

島名熊の山遺跡

島名・福田坪一体型特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書 XIII

(第 4 分 冊)

平成 19 年 3 月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第280集

しま な くま やま い せき
島名熊の山遺跡

島名・福田坪一体型特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書 XIII

(第 4 分冊)

平成 19 年 3 月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団

目 次

— 第 4 分冊 —

6	その他の時代の遺構と遺物	893
(1)	土坑	893
(2)	その他の土坑	894
7	遺構外出土遺物	921
第 8 節	まとめ	927

写真図版

6 その他の時代の遺構と遺物

その他の時代の遺構は、近代の土坑1基、時期や性格が不明な土坑342基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

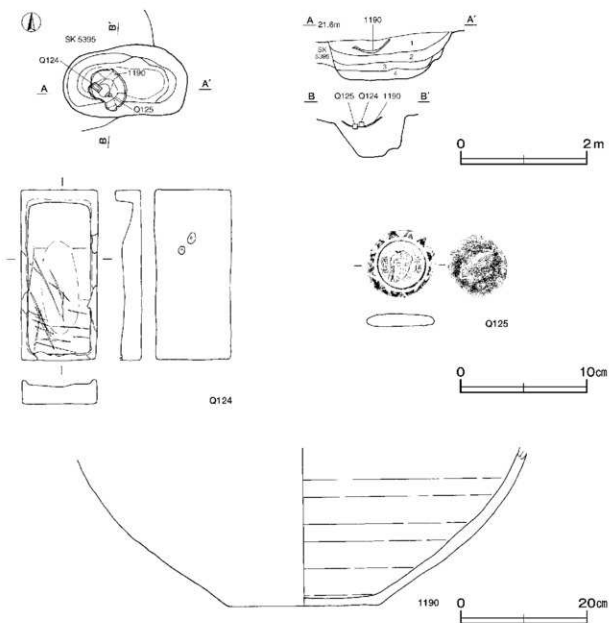
(1) 土坑

第5398号土坑（第757図）

位置 調査区南西部のS319区、標高21.5mほどの斜面部中段に位置している。

重複関係 第5395号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.95m、短径1.12mの隅丸長方形で、長径方向はN-88°-Wである。深さは73cmで、底面は平坦であり、壁は外傾して立ち上がっている。



第757図 第5398号土坑・出土遺物実測図

覆土 4層に分けられる。ロームブロックや炭化材を含む人為堆積である。

土層解説

- | | | | | | |
|---|------|----------------------------|---|------|-----------|
| 1 | 暗灰黄色 | ロームブロック中量,炭化材少量,白色粘土ブロック微量 | 3 | 灰黄褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 | 黒褐色 | ロームブロック中量,炭化材少量 | 4 | 暗褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 陶器片51点(源法寺焼襷),石製品1点(硯),ガラス製品1点(石鹸道具),鉄製品1点(不明)が出土しているほか,縄文土器片,土師器片,須恵器片,土師質土器片,陶磁器片が混入している。1190は第2層の上面に正位で据え置かれた状態で出土し,内部底面からはQ124・Q125が出土している。

所見 1190の内面には炭化した有機物の付着がみられ,肥糞と考えられる。ただし,掘り方が隅丸長方形であり,糞を棺に転用した墓坑の可能性もあり,Q124・Q125はその副葬品とも考えられる。Q125は,赤穂浪士の図柄と「赤垣源藏」の銘があり,同種の石鹸道具は,神奈川県逗子市池子遺跡群のNo7地点東地区第1号旧河道に出土例がある。第1号旧河道の埋没時期が昭和13年以前とされていることから戦前に流行した玩具類と考えられる。時期は,出土遺物から19世紀末葉から20世紀初頭と考えられる。

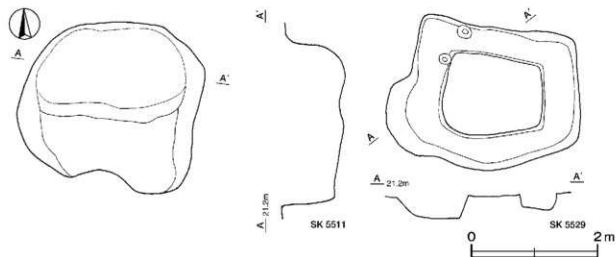
第5398号土坑出土遺物観察表(第757図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1190	陶器	襷	-	24.8	24.0	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口口成形	上層	20% 源法寺焼

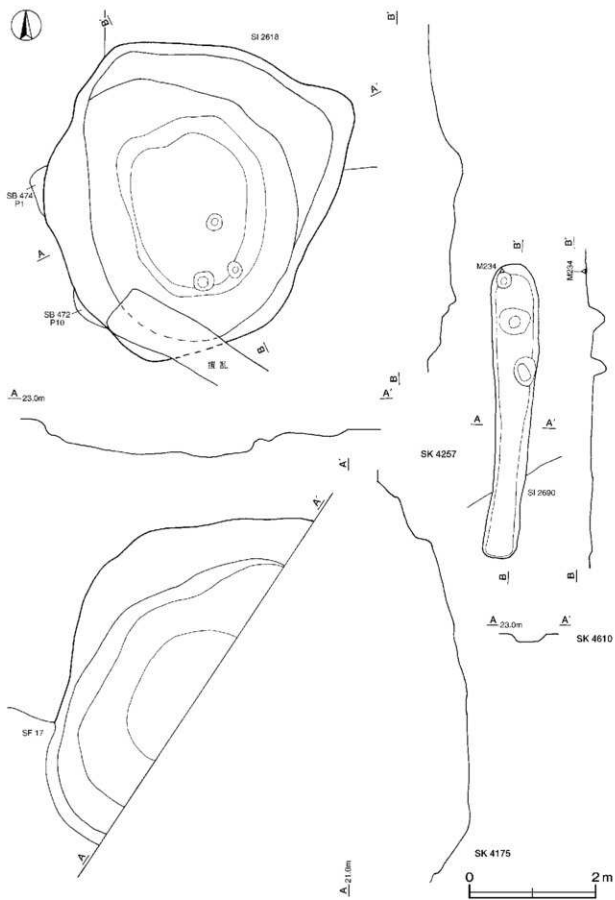
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q124	硯	13.5	6.1	2.0	219.1	泥岩	陸部一部欠損 擦痕	1190底面	PL143
Q125	石鹸道具	5.3	4.7	0.9	41.5	ガラス	浪士像 「赤垣源藏」 銘 三角文 灰オリブ色	1190底面	PL143

(2) その他の土坑(第758~776図)

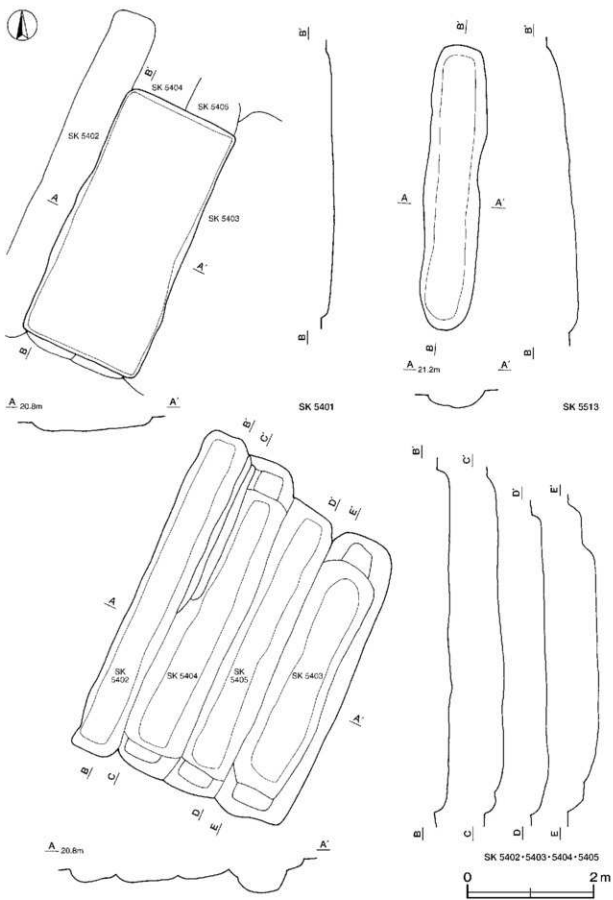
性格不明の土坑については,以下,実測図にて紹介する。



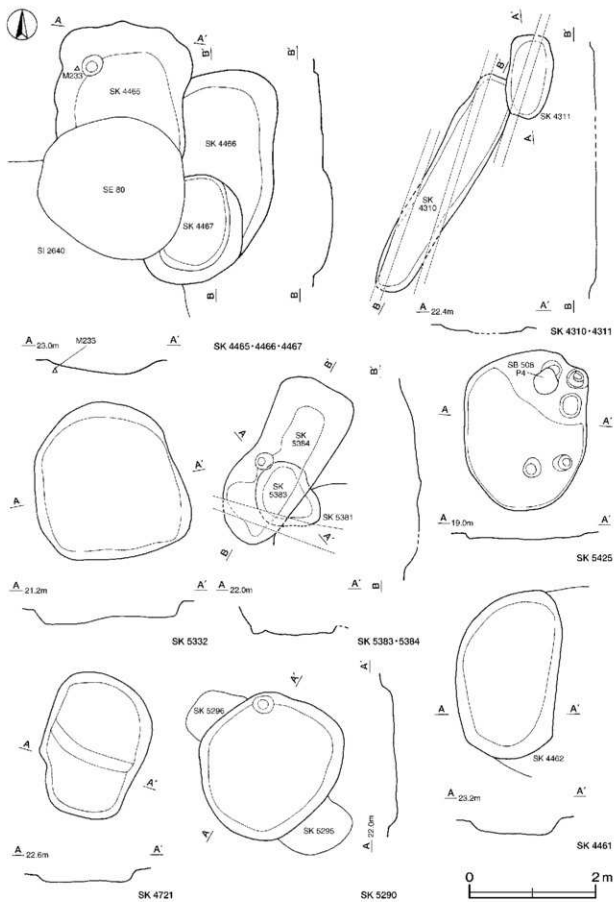
第758図 その他の土坑実測図(1)



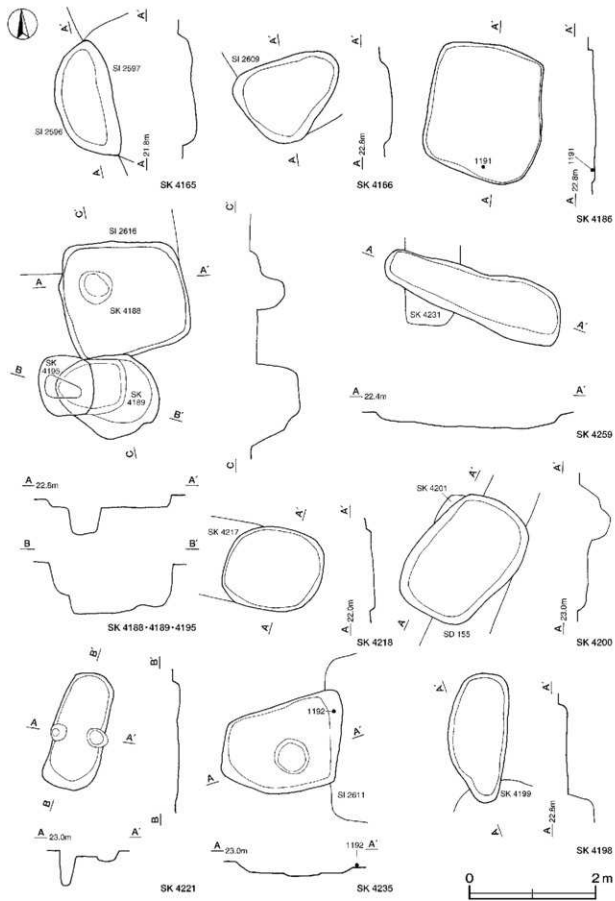
第759図 その他の土坑実測図2)



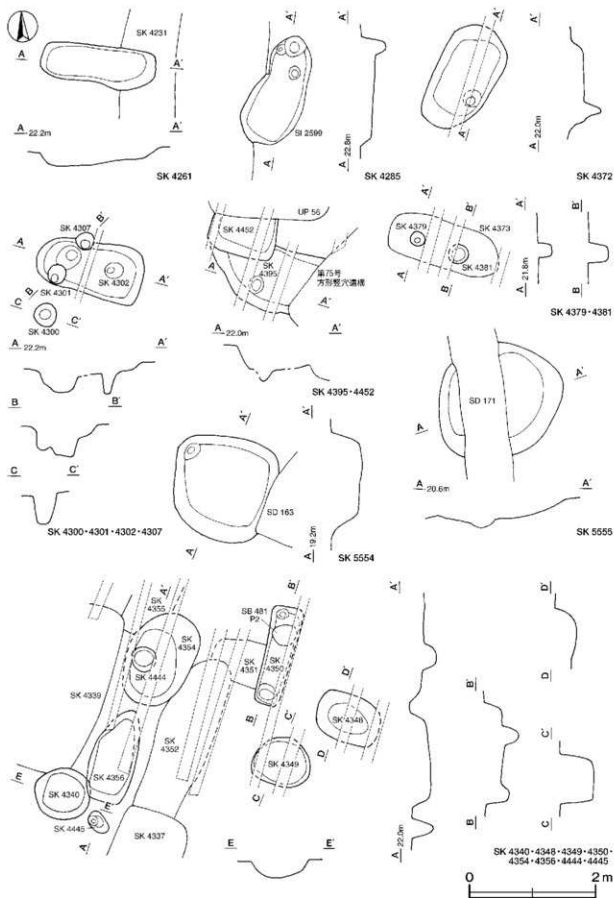
第760図 その他の土坑実測図(3)



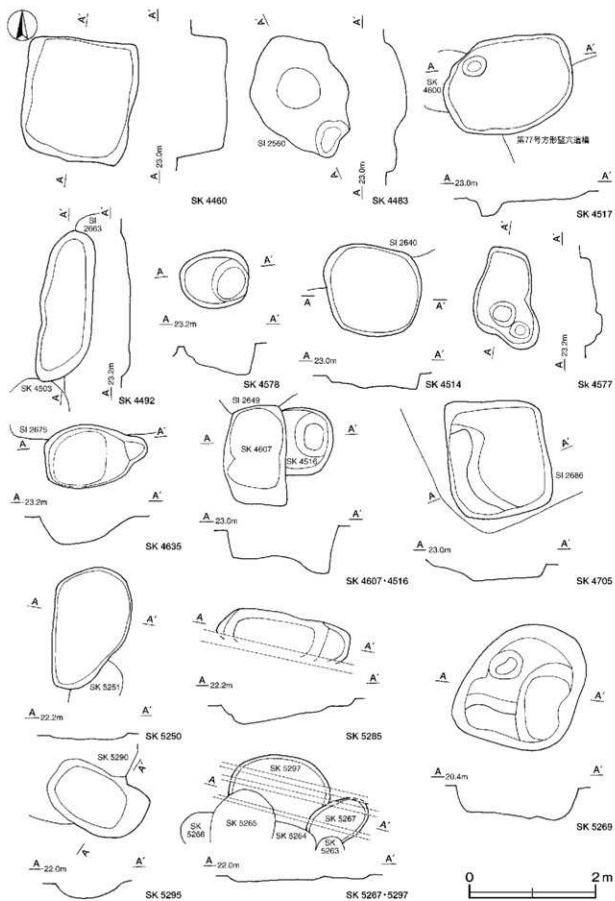
第761図 その他の土坑実測図(4)



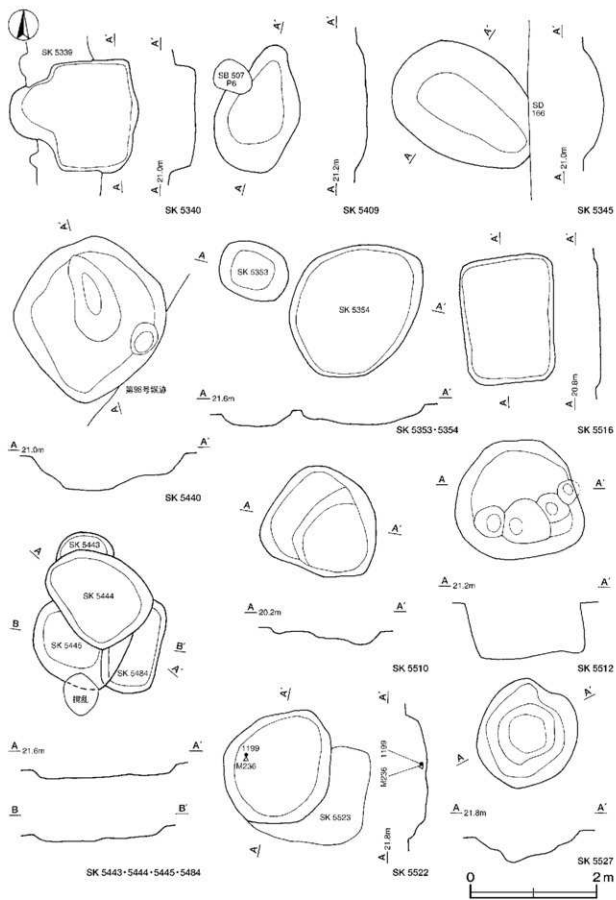
第762図 その他の土坑実測図⑤)



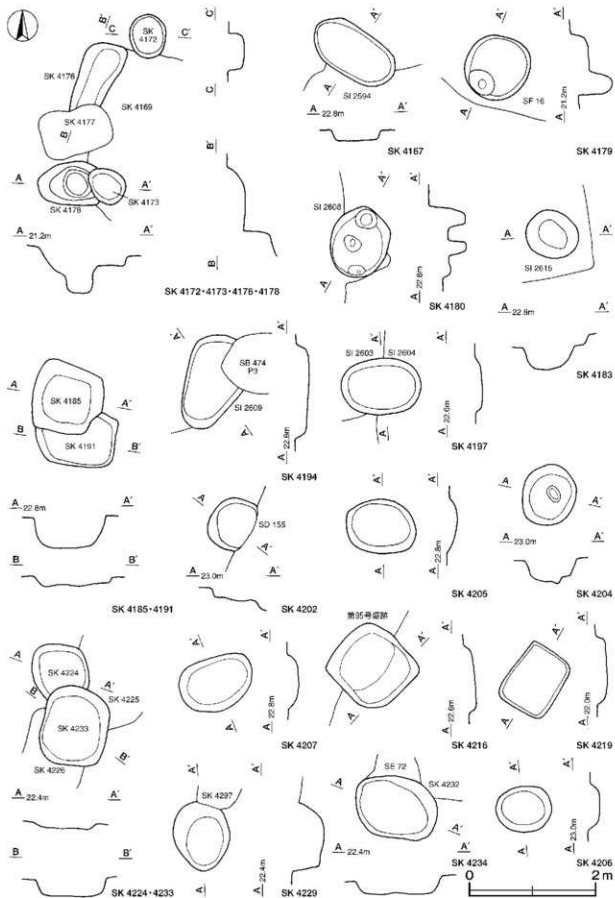
第763図 その他の土坑実測図(6)



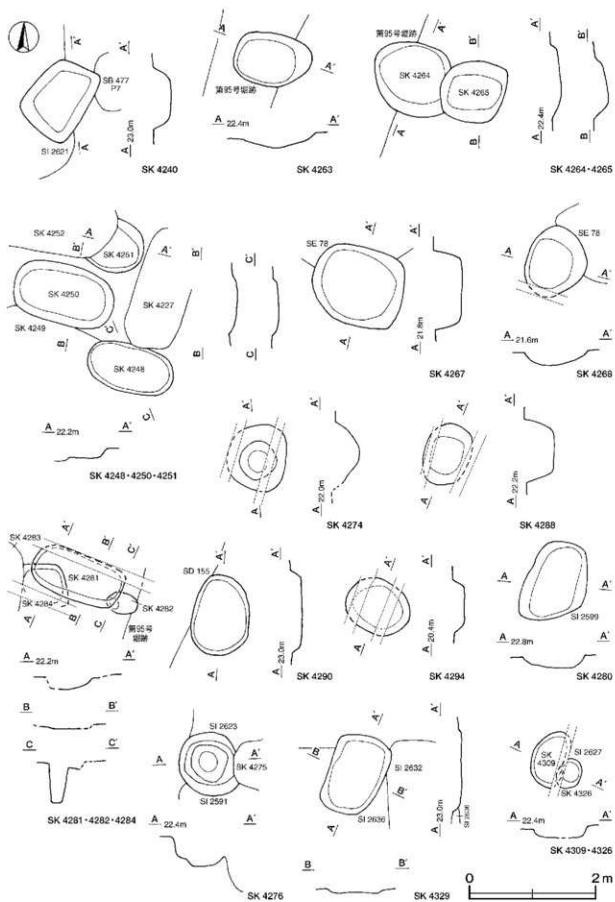
第764図 その他の土坑実測図(7)



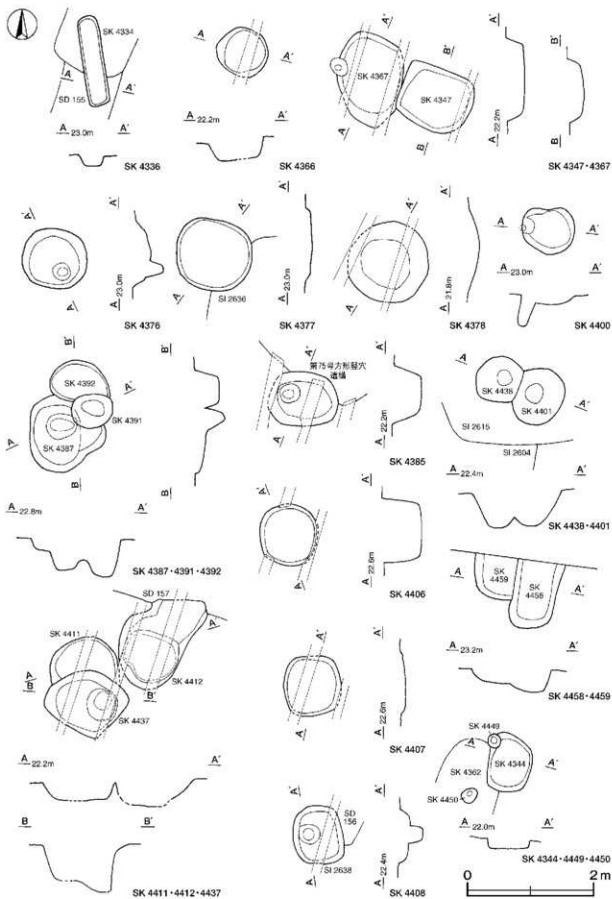
第765図 その他の土坑実測図(8)



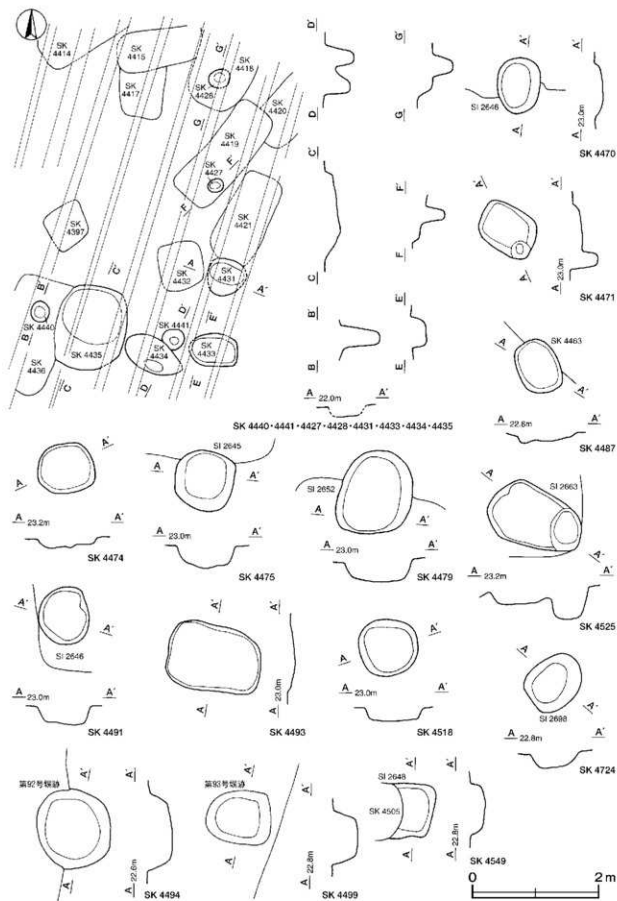
第766図 その他の土坑実測図(9)



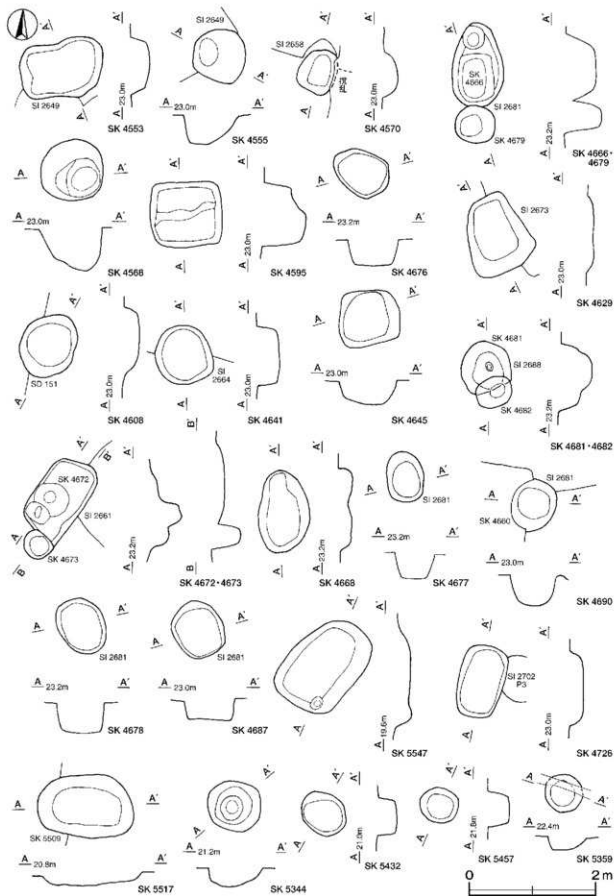
第76図 その他の土坑実測図¹⁰⁾



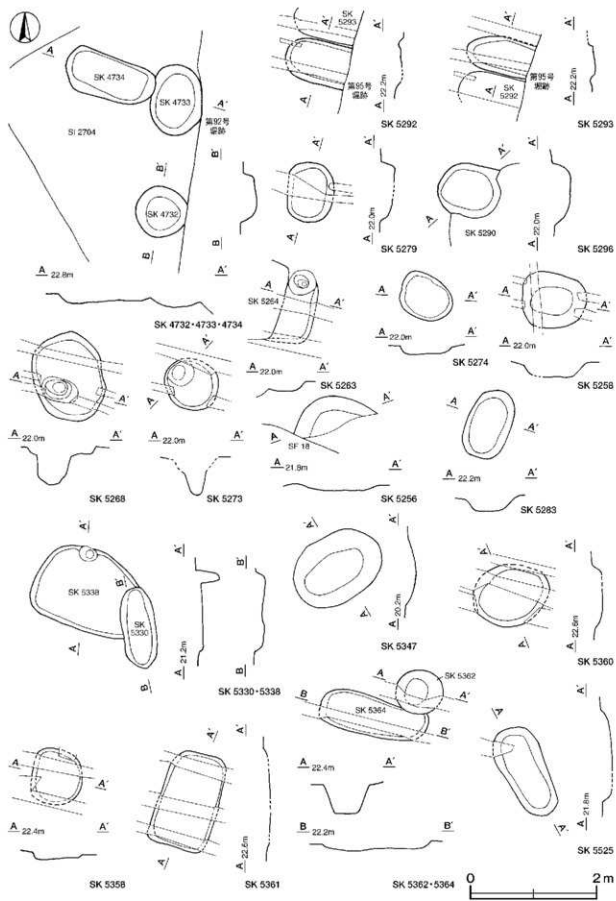
第768図 その他の土坑実測図(11)



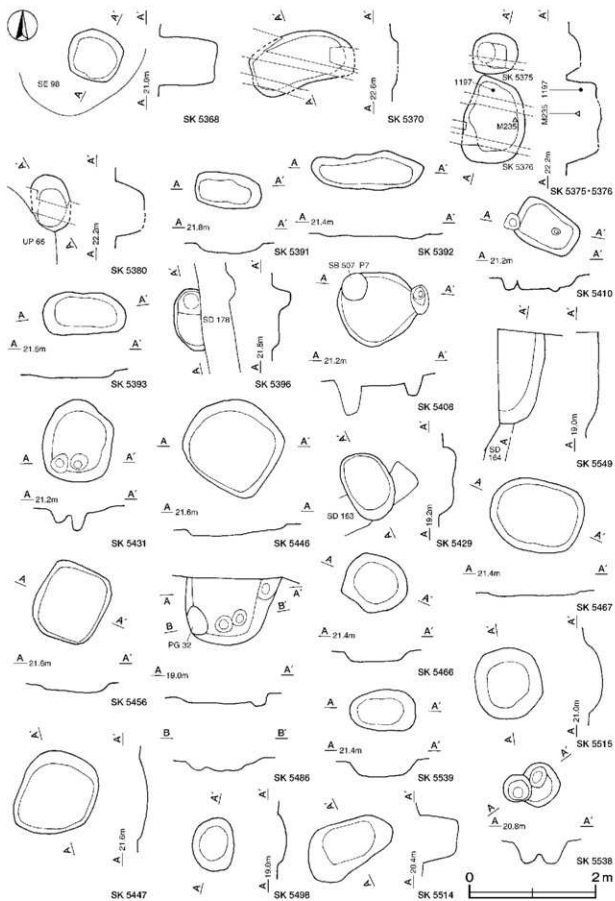
第769図 その他の土坑実測図¹²⁾



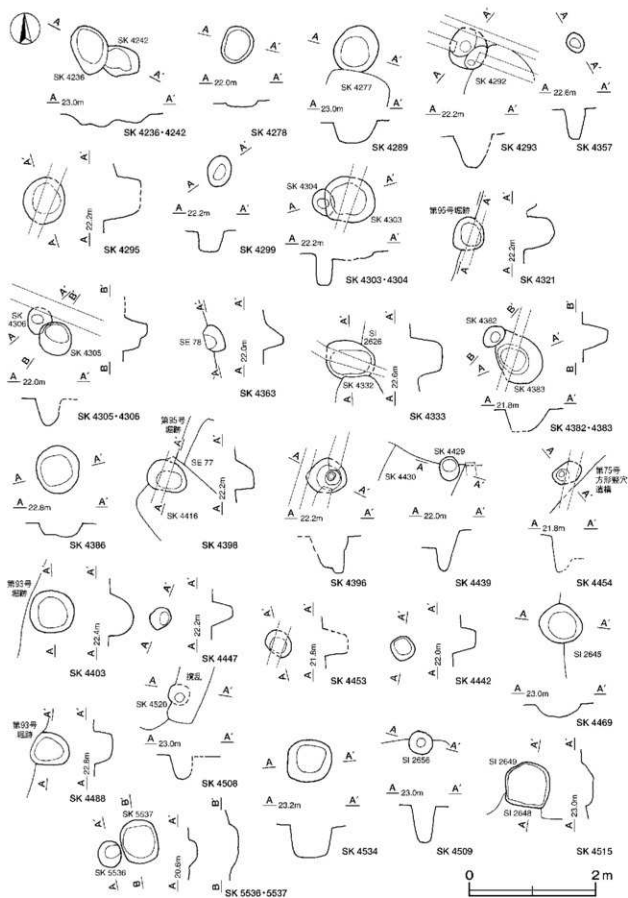
第770図 その他の土坑実測図(3)



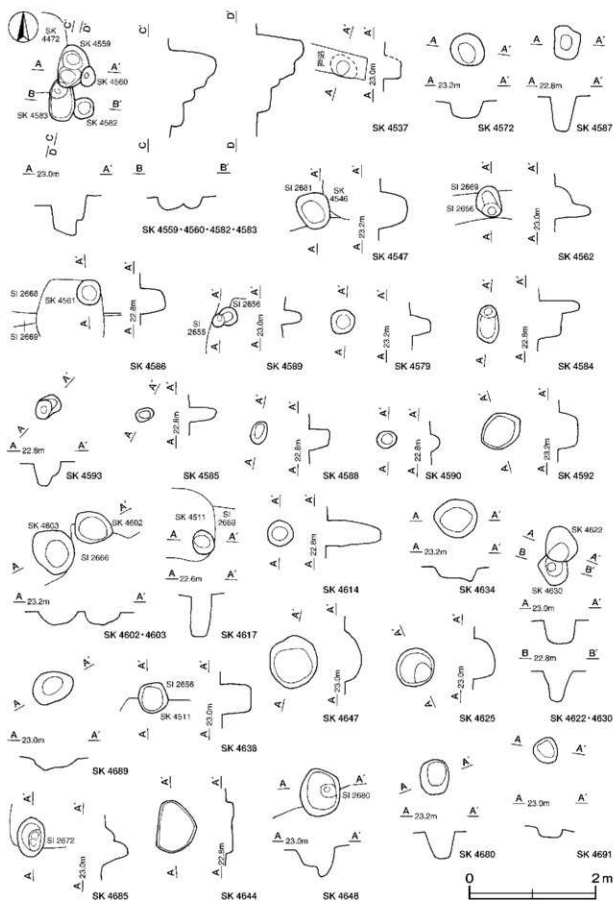
第771図 その他の土坑実測図(14)



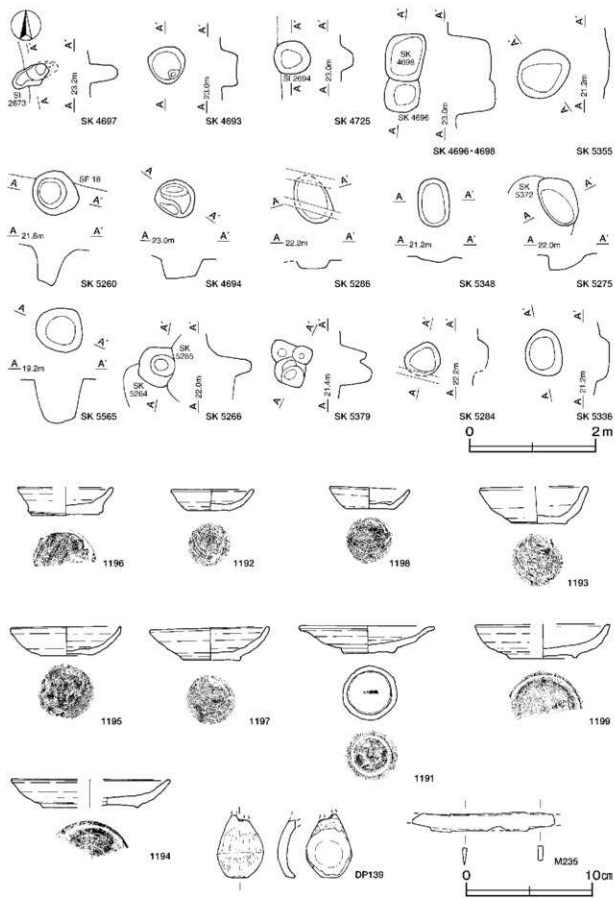
第772図 その他の土坑実測図(15)



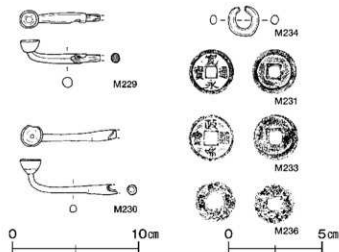
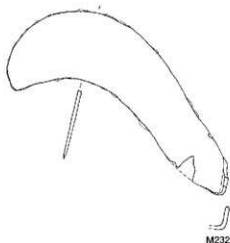
第773図 その他の土坑実測図(16)



第774図 その他の土坑実測図(17)



第775図 その他の土坑・出土遺物実測図



第776図 その他の土坑出土遺物実測図

第4175号土坑出土遺物観察表 (第776図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M229	煙管	(6.4)	1.4	2.0	(6.4)	銅	外面緑青 内羅字一部残存 履首部	覆土中	PL147

第4186号土坑出土遺物観察表 (第775図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1191	陶器	灰釉 鍍反皿	10.5	2.3	4.0	精良・灰釉	灰才 リープ	良好	体部内・外面灰釉 体部内面ト字ン痕 り出し高台 高台周辺無釉 底部朱墨「一」	下層	100% 瀬戸美濃系 PL136・137

第4194号土坑出土遺物観察表 (第775図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP139	土鈴	(5.0)	3.7	0.3	(16.2)	土(長石・雲母)	ヘラ磨き にぶい橙色 孔有	覆土中	PL138

第4235号土坑出土遺物観察表 (第775図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1192	土銅質土器	小皿	6.4	1.7	3.4	長石・赤色粘土	橙	普通	体部内・外面口ロナデ 底部回転糸切リ	上層	80%

第4383号土坑出土遺物観察表 (第776図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M230	煙管	(7.7)	2.7	0.8	(7.2)	銅	外面緑青 履首部 肩部有リ	上層	PL147

第4412号土坑出土遺物観察表 (第776図)

番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M231	古銭	2.50	0.55	0.20	5.5	銅	寛永通寶 初鋳1636年 古寛永	覆土中	

第4438号土坑出土遺物観察表 (第776図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M232	鎌	17.5	5.4	0.3	129.3	鉄	曲刃 基部折り返し	覆土中	PL146

第4465号土坑出土遺物観察表(第776図)

番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M233	古銭	2.50	0.64	0.24	2.5	銅	政和通寶 初鑄1111年 北宋銭 篆書	下層	PL148

第4553号土坑出土遺物観察表(第775図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1193	土師質土器	小皿	[8.3]	3.0	4.2	雲母	橙	普通	体部内・外面口ロナデ 体部内面ナデ 底部回転糸切り	覆土中	50%

第4610号土坑出土遺物観察表(第776図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M234	耳環	1.7	1.6	0.5	3.2	銅	開口部有り	下層	PL147

第5279号土坑出土遺物観察表(第775図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1194	陶器	丸皿	[12.6]	2.2	[7.6]	精良・長石釉	灰白	良好	口ク口成形 体部内・外面長石釉 雨り出し高台 底部無釉	覆土中	30% 志野系

第5336号土坑出土遺物観察表(第775図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1195	土師質土器	小皿	8.7	2.3	4.1	長石・石灰・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部内・外面口ロナデ 底部回転糸切り	覆土中	100% PL136

第5368号土坑出土遺物観察表(第775図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1196	土師質土器	小皿	[7.4]	2.2	5.2	長石・石灰・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部内・外面口ロナデ 底部回転糸切り	覆土中	50%

第5376号土坑出土遺物観察表(第775図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1197	土師質土器	小皿	9.4	2.6	4.7	長石・石灰・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部内・外面口ロナデ 体部内面ナデ 底部回転糸切り	上層	70%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M235	刀子	[11.3]	1.6	0.4	[13.8]	鉄	鍔部欠損 断面三角形 肉閉	上層	

第5514号土坑出土遺物観察表(第775図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1198	土師質土器	小皿	6.2	1.7	3.8	長石・石灰・雲母・赤色粒子	にんじり	普通	体部内・外面口ロナデ 底部回転糸切り	覆土中	100% PL136

第5522号土坑出土遺物観察表(第775・776図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1199	陶器	丸皿	[10.4]	2.7	[5.3]	精良・長石釉	灰白	良好	口ク口成形 体部内・外面長石釉 雨り出し高台 底部無釉	中層	40% 志野系

番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M236	古銭	2.40	0.69	0.10	2.6	銅	熙寧元寶 初鑄1068年 北宋銭 真書	中層	PL148

表64 その他の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模(m)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (新旧関係 旧→新)
				長径×短径	深さ(cm)					
4165	S 5 h1	N-10°-W	楕円形	1.91×0.92	23	外傾	平坦	人為	土師器片	S12596→S12597→本跡
4166	S 5 c2	N-54°-E	不整形円形	1.68×1.40	12	罐斜	平坦	人為	土師器片, 須恵器片, 灰釉陶器片	S12609→S478→本跡
4167	S 5 c4	N-54°-W	楕円形	1.44×0.76	20	外傾	平坦	人為		S12594→本跡
4172	S 4 l8	N-9°-E	楕円形	0.68×0.58	26	垂直	平坦	人為		SK4169→本跡
4173	S 4 j8	N-61°-W	楕円形	0.64×0.58	38	外傾	傾斜	人為		SK4169→SK4178→本跡
4175	T 4 a8	N-33°-E	[不整形円形]	6.14×(2.40)	95	罐斜	U字状	自然	土師器片, 須恵器片, 土師質土器片, 陶器片, 石臼, 磁石, 埴輪	本跡→SF17
4176	S 4 l8	N-24°-E	[楕円長方形]	(1.22)×0.64	28	罐斜	U字状	人為		SK4169→本跡→SK4177
4178	S 4 j8	N-88°-E	[楕円形]	(1.15)×0.70	72	外傾	平坦	人為	土師質土器片	SK4169→本跡→SK4173
4179	S 4 j8	N-48°-E	円形	1.08×1.00	30	垂直	平坦	人為		SF16→本跡
4180	S 5 c3	N-14°-E	楕円形	1.16×0.94	30	垂直	平坦	人為	土師器片, 須恵器片, 土師質土器片	S12608→本跡
4183	S 5 d1	N-52°-W	楕円形	0.84×0.74	36	罐斜	平坦	人為	土師器片	S12615→本跡
4185	S 5 a7	N-78°-W	方形	1.14×1.08	49	罐斜	U字状	人為	土師器片, 須恵器片	SK4191→本跡
4186	S 5 a7	N-10°-E	長方形	2.12×1.78	11	罐斜	平坦	人為	土師器片, 陶器片	
4188	S 4 c0	N-80°-E	方形	1.96×1.84	19	外傾	平坦	人為		SK2616→本跡→SK4189→SK4195
4189	S 4 c0	N-82°-W	楕円形	1.66×1.36	77	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片	SK4188→本跡→SK4195
4191	S 5 a7	N-78°-W	[長方形]	1.26×0.89	16	罐斜	平坦	人為		本跡→SK4185
4194	S 5 b2	N-25°-E	楕円形	1.52×0.91	20	罐斜	平坦	人為	土師器片, 須恵器片, 土師質土器片, 陶器片, 土製器	S12609→本跡→S474
4195	S 4 c0	N-10°-W	楕円長方形	0.94×0.86	54	外傾	平坦	人為		SK4188→SK4189→本跡
4197	S 4 e0	N-87°-E	楕円形	1.25×0.87	11	罐斜	平坦	人為	土師器片, 須恵器片, 土師質土器片, 灰釉陶器片	S12603→S12604→本跡
4198	S 4 b0	N-7°-E	楕円長方形	2.02×0.96	12	罐斜	平坦	人為	土師器片, 須恵器片, 磁石	SK4199→本跡
4200	S 5 l2	N-35°-E	楕円長方形	2.24×1.46	17	罐斜	平坦	人為		SD155→SK4201→本跡
4202	Q 5 j1	N-30°-E	楕円形	0.83×(0.68)	10	罐斜	U字状	人為	土師器片, 須恵器片	本跡→SD155
4204	Q 5 l1	N-15°-E	楕円形	0.96×0.85	38	外傾	平坦	人為	土師器片, 磁器片, 瓦片	
4205	Q 5 h1	N-80°-W	楕円形	1.12×0.85	14	罐斜	U字状	自然	土師器片, 須恵器片	
4206	Q 5 g2	N-74°-E	楕円形	0.86×0.74	18	罐斜	平坦	自然	土師器片, 須恵器片, 磁器片, 種子	
4207	Q 5 h1	N-68°-E	楕円形	1.20×0.85	16	罐斜	平坦	人為	土師器片, 瓦片	
4216	Q 4 g0	N-48°-W	方形	1.22×1.12	19	罐斜	平坦	人為		第95号堀跡→本跡
4218	Q 4 g8	N-79°-W	楕円形	1.52×1.32	8	罐斜	平坦	人為		SK4217→本跡
4219	Q 4 g8	N-35°-E	長方形	1.06×0.84	16	外傾	平坦	自然		
4221	R 5 j4	N-18°-E	長方形	1.90×0.82	8	罐斜	平坦	自然	土師器片, 須恵器片	
4224	Q 4 l8	N-7°-W	[楕円長方形]	(0.90)×0.88	15	罐斜	平坦	人為	土師器片, 土師質土器片	SK4225→本跡→SK4233
4229	Q 4 l7	N-4°-W	楕円形	1.10×0.88	49	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片, 土師質土器片, 磁石, 磁石, 埴輪	本跡→SK4297
4233	Q 4 l8	N-12°-E	楕円長方形	1.26×1.04	28	外傾	平坦	人為		SK425→SK424→SK426→本跡
4234	Q 4 l8	N-78°-W	楕円形	1.38×1.01	26	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片	SE72→SK4232→本跡
4235	R 5 h1	N-73°-E	長方形	2.00×1.41	15	罐斜	平坦	人為	土師器片, 須恵器片, 土師質土器片	S12611→本跡
4236	R 5 h2	N-21°-W	楕円形	0.79×0.56	19	罐斜	平坦	人為		SK4242→本跡
4240	S 4 a0	N-30°-E	長方形	1.24×0.94	29	罐斜	傾斜	人為	土師器片, 須恵器片, 土師質土器片, 灰釉陶器片	S12621→S477→本跡
4242	R 5 h2	N-75°-W	[楕円形]	(1.54)×0.46	13	罐斜	平坦	人為	土師器片, 土師質土器片	本跡→SK4236
4248	Q 4 j8	N-76°-W	楕円形	1.40×0.78	12	罐斜	平坦	人為	土師器片, 土師質土器片	SK4249→本跡→SK4227
4250	Q 4 j7	N-74°-W	楕円形	1.62×0.96	13	罐斜	U字状	人為	土師器片, 須恵器片, 土師質土器片	SK4249→本跡
4251	Q 4 j8	N-40°-E	[楕円形]	0.90×(0.60)	16	罐斜	平坦	人為	土師質土器片	本跡→SK4252
4252	S 5 b4	N-24°-E	楕円形	5.16×4.32	66	罐斜	U字状	人為	土師器片, 須恵器片, 土師質土器片, 灰釉陶器片, 陶磁器片, 刀子	S12618→S472→474→本跡
4259	Q 4 f9	N-67°-W	不整形長方形	2.97×0.77	10	罐斜	平坦	人為	土師器片, 土師質土器片	SK4231→本跡
4261	Q 4 f9	N-82°-W	楕円形	1.84×0.63	24	罐斜	平坦	自然		SK4231→本跡
4263	Q 4 j9	N-80°-W	楕円形	1.21×0.88	22	罐斜	平坦	人為		第95号堀跡→本跡

番号	位置	長径方向	平面形	規模(m)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (新旧関係 旧→新)
				長径×短径	深さ(cm)					
4264	R 4 j 9	N-72°-W	楕円形	[1.43]×1.14	16	罐斜	平坦	人為	土師器片, 須惠器片	第95号塚跡→本跡→SK4265
4265	R 4 j 9	N-77°-W	楕丸方形	1.04×1.00	24	罐斜	平坦	人為	土師器片, 須惠器片, 土師質土器片	第95号塚跡→SK4264→本跡
4267	Q 4 i 6	N-76°-W	楕丸長方形	1.46×1.24	46	外種	平坦	人為	土師器片, 土師質土器片	SE78→本跡
4268	Q 4 i 5	N-19°-E	楕円形	[1.18]×0.96	22	罐斜	平坦	人為	土師器片	SE78→本跡
4274	R 4 f 5	N-9°-E	方形	1.07×[0.93]	44	罐斜	U字状	人為	須惠器片, 鉄滓	
4276	S 4 f 0	N-36°-W	楕円形	1.08×0.94	50	外種	U字状	人為	土師器片, 須惠器片, 磁石	SI2591-2623→本跡→SK4275
4278	Q 4 g 7	N-23°-E	楕円形	0.60×0.48	10	外種	U字状	人為		
4280	R 5 g 1	N-25°-E	楕丸長方形	1.34×0.96	18	罐斜	平坦	人為	土師器片, 須惠器片, 土師質土器片, 土玉	SI2599→本跡
4281	R 4 a 8	N-66°-E	[楕円形]	1.48×[0.70]	6	罐斜	平坦	人為	土師器片, 須惠器片	SK4282-4284→本跡
4282	R 4 a 8	N-77°-W	楕円形	0.50×0.35	62	垂直	凹凸	人為	土師器片, 須惠器片	第95号塚跡→本跡→SK4281
4284	R 4 a 8	N-85°-E	[方形]	0.68×(0.48)	20	罐斜	U字状	人為	須惠器片	本跡→SK4281-4283
4285	R 5 f 1	N-23°-E	不整形円形	1.83×0.88	18	外種	凹凸	人為		SI2599→本跡
4288	R 4 c 7	N-16°-E	楕円形	1.00×[0.72]	46	外種	平坦	自然	土師器片, 須惠器片, 陶器片	
4289	R 5 a 1	N-14°-E	円形	(0.74)×0.68	35	外種	U字状	自然	須惠器片	本跡→SK4277
4290	Q 5 j 2	N-16°-E	楕円形	1.28×0.92	18	外種	平坦	自然	土師器片, 茶臼	SD155→本跡
4293	R 4 a 8	N-23°-E	円形	[0.62]×0.58	52	外種	U字状	人為	土師質土器片, 陶器片	SK4292→本跡
4294	R 4 i 4	N-64°-W	楕円形	1.06×0.84	18	外種	平坦	人為	土師器片, 土師質土器片, 陶器片	
4295	R 4 i 4	N-0°	円形	0.74×0.68	60	外種	U字状	人為	土師器片, 須惠器片, 土師質土器片, 陶器片	
4299	R 4 a 7	N-17°-E	楕円形	0.45×0.38	32	外種	U字状	人為	土師器片, 須惠器片, 土師質土器片	
4300	R 4 b 7	N-17°-E	円形	0.36×0.35	49	外種	平坦	人為		
4301	R 4 b 7	N-21°-E	楕円形	0.34×0.30	35	外種	平坦	人為		SK4302→本跡
4302	R 4 a 7	N-77°-W	楕丸長方形	1.72×0.84	16	罐斜	平坦	人為	土師器片, 須惠器片, 土師質土器片	本跡→SK4301-4307
4303	R 4 i 5	N-81°-E	楕円形	0.80×0.74	15	罐斜	平坦	人為	土師器片	SK4304→本跡
4304	R 4 i 5	N-12°-W	楕円形	0.45×0.36	51	垂直	平坦	人為	陶器片	本跡→SK4303
4305	Q 4 j 7	N-36°-W	楕円形	0.56×0.52	36	外種	平坦	人為		SK4306→本跡
4306	Q 4 j 6	N-0°	円形	0.42×0.40	44	外種	U字状	人為	土師質土器片	本跡→SK4305
4307	R 4 a 7	N-70°-E	円形	0.30×0.28	17	罐斜	平坦	人為		SK4302→本跡
4309	R 4 c 8	N-23°-E	楕円形	0.92×[0.58]	11	外種	平坦	人為	陶器片	SI2627→本跡→SK4326
4310	R 4 d 8	N-30°-E	長方形	3.88×0.73	10	罐斜	平坦	人為	土師器片, 須惠器片, 土師質土器片, 磁器片	本跡→SK4311
4311	R 4 d 8	N-6°-E	楕円形	1.34×0.70	11	罐斜	平坦	人為	土師器片, 須惠器片, 土師質土器片	SK4310→本跡
4321	R 4 f 7	N-65°-E	方形	0.55×0.53	50	外種	平坦	人為	土師質土器片	第95号塚跡→本跡
4326	R 4 d 8	N-23°-E	楕円形	0.60×[0.38]	18	外種	平坦	人為		SI2627→本跡→SK4309
4329	R 5 i 1	N-25°-E	楕丸長方形	1.32×0.90	5	外種	平坦	人為	土師器片, 須惠器片, 土師質土器片, 鉄製物	SI2632-2636→本跡
4333	R 4 b 9	N-80°-E	楕円形	0.76×0.62	48	垂直	平坦	人為	土師器片, 須惠器片, 土師質土器片	SI2626→本跡→SK4332
4336	R 4 g 0	N-9°-W	長方形	1.44×0.33	28	外種	平坦	人為		SD155→SK4334→本跡
4340	R 4 j 3	N-73°-W	円形	0.91×0.85	27	罐斜	U字状	人為	土師器片	SK4339→本跡→SK4356
4344	R 4 j 4	N-5°-E	楕円形	0.92×0.70	17	外種	平坦	人為		SK4362→本跡→SK4449
4347	R 4 h 4	N-69°-W	長方形	1.16×0.98	24	罐斜	平坦	人為	土師器片, 土師質土器片	SK4367→本跡
4348	R 4 i 4	N-67°-W	[楕丸長方形]	[1.05]×0.76	34	外種	平坦	人為	土師器片, 土師質土器片, 陶器片	
4349	R 4 i 4	N-66°-W	円形	0.90×0.79	54	垂直	平坦	人為	土師器片, 瓦片	
4350	R 4 i 4	N-15°-E	[長方形]	1.60×[0.47]	32	外種	凹凸	人為	土師器片, 土師質土器片	SK4351→本跡→SB481
4354	R 4 i 3	N-19°-E	楕円形	1.53×[1.05]	20	罐斜	平坦	人為		SK4352-4355→本跡→SK4444
4356	R 4 i 3	N-19°-E	楕円形	1.52×0.72	30	外種	平坦	人為	土師器片	SK4340→本跡
4357	Q 4 i 9	N-54°-W	円形	0.31×0.29	45	外種	平坦	人為		
4363	Q 4 i 6	N-20°-W	[円形]	0.44×(0.28)	30	外種	平坦	人為		本跡→SE78
4366	R 4 i 4	N-75°-W	楕円形	0.86×0.74	32	外種	平坦	人為	土師器片, 須惠器片, 土師質土器片, 鉄滓	

番号	位置	長径方向	平面形	規 模 (m)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (新旧関係 旧→新)
				長径×短径	深さ(cm)					
4367	R 4 h4	N- 9°- W	不整楕円形	1.36×1.18	28	罐斜	平坦	人為	土師器片, 須惠器片, 土師質土器片	本跡→SK4347
4372	R 4 e3	N- 23°- E	楕丸長方形	1.76×0.95	24	外種	平坦	人為	土師器片, 土師質土器片	
4376	R 5 l1	N- 76°- W	楕円形	1.05×0.94	25	罐斜	平坦	人為	土師器片, 土師質土器片	
4377	R 5 l1	N- 47°- W	円形	1.25×1.18	11	罐斜	平坦	人為	土師器片, 須惠器片	S12636→本跡
4378	R 4 e3	N- 20°- E	円形	1.27×[1.26]	15	罐斜	U字状	自然		
4379	R 4 f4	N- 23°- E	円形	0.22×0.22	24	垂直	平坦	人為		SK4373→本跡
4381	R 4 f4	N- 15°- E	円形	0.32×[0.32]	32	垂直	平坦	人為		SK4373→本跡
4382	R 4 d5	N- 35°- E	円形	0.38×0.30	42	外種	U字状	人為	土師質土器片	SK4383→本跡
4383	R 4 d5	N- 28°- W	楕円形	0.95×0.65	35	罐斜	U字状	人為	煙管	本跡→SK4382
4385	R 4 h4	N- 75°- W	楕円形	[1.08]×0.87	42	外種	平坦	人為	土師器片	第75号方形甕六遺構→本跡
4386	S 5 d2	N- 12°- W	円形	0.78×0.70	11	外種	平坦	人為		
4387	S 5 d2	N- 0°	[円形]	[1.21]×1.20	50	罐斜	平坦	人為	土師器片, 須惠器片, 土師質土器片, 陶器片	本跡→SK4392→SK4391
4391	S 5 d2	N- 79°- E	楕円形	0.64×0.54	60	外種	平坦	人為		SK4387→SK4392→本跡
4392	S 5 d2	N- 79°- W	楕円形	1.00×0.62	38	外種	平坦	人為	須惠器片	SK4387→本跡→SK4391
4395	R 4 g4	N- 67°- W	[不整楕円形]	[1.82]×1.00	40	罐斜	平坦	人為	土師器片, 土師質土器片, 陶器片	本跡→第75号方形甕六遺構 →SK4452
4396	R 4 h5	N- 64°- W	楕円形	0.60×0.55	40	罐斜	平坦	人為		
4398	R 4 h8	N- 67°- W	楕円形	0.66×0.48	30	垂直 外種	平坦	人為		第9号壁礎-SE77-SK4416→本跡
4400	R 5 j4	N- 85°- W	楕円形	0.85×0.72	16	罐斜	U字状	自然	土師器片, 須惠器片, 土師質土器片	
4401	S 5 d1	N- 19°- E	楕円形	0.80×(0.74)	55	罐斜	U字状	自然	土師器片, 須惠器片	S1204→S1215→本跡→SK4438
4403	S 4 e9	N- 67°- W	円形	0.71×0.67	38	垂直	U字状	人為	土師器片	S12614→本跡
4406	R 4 c7	N- 0°	円形	1.00×[0.98]	62	垂直	平坦	人為	土師器片, 須惠器片	S12638→本跡
4407	R 4 h8	N- 4°- W	楕丸長方形	0.96×0.90	8	外種	平坦	人為	土師器片, 須惠器片, 灰釉陶器片	S12638→本跡
4408	R 4 h8	N- 8°- W	楕丸長方形	0.94×0.80	16	外種	凹凸	人為	土師器片	S12638→S D156→本跡
4411	R 4 g6	N- 87°- E	[楕円形]	1.08×(0.51)	26	罐斜	平坦	人為	土師器片, 須惠器片, 土師質土器片, 陶器片, 灰石	本跡→SK4437
4412	R 4 g6	N- 28°- E	[楕円形]	[1.51]×1.04	41	罐斜	平坦	人為	土師器片, 須惠器片, 土師質土器片, 土器片	本跡→S D157
4427	R 4 f6	N- 83°- E	楕円形	0.26×0.21	50	垂直	U字状	人為		SK4419→本跡
4428	R 4 e6	N- 69°- E	楕円形	0.36×0.30	58	垂直	U字状	人為		SK4418→本跡
4431	R 4 f6	N- 22°- E	不整楕円形	[0.60]×0.60	18	外種	平坦	人為		SK4421→本跡
4433	R 4 f6	N- 80°- W	楕円形	0.78×0.52	25	外種	平坦	人為	土師器片, 須惠器片, 土師質土器片	
4434	R 4 f6	N- 63°- W	楕円形	0.98×0.54	43	外種	U字状	人為	土師器片	SK4441→本跡
4435	R 4 f5	N- 16°- E	楕丸長方形	1.48×1.12	25	外種	罐斜	人為		本跡→SK4436
4437	R 4 g6	N- 87°- E	楕円形	1.34×1.02	68	外種	平坦	人為		SK4411→本跡
4438	S 4 d0	N- 14°- E	円形	0.73×0.72	55	罐斜	平坦	人為	土師器片, 須惠器片, 灰釉陶器片, 鎌	S1204→S1215→SK4401→本跡
4439	R 4 g4	N- 23°- W	楕円形	0.35×0.32	62	外種	平坦	人為		SK4430→SK4429→本跡
4440	R 4 f5	N- 16°- E	楕円形	0.34×0.31	64	垂直	U字状	人為		SK4436→本跡
4441	R 4 f6	N- 75°- W	楕円形	0.36×0.32	46	外種	U字状	人為		本跡→SK4434
4442	R 4 g3	N- 32°- W	方形	0.39×0.38	34	外種	平坦	人為		
4444	R 4 l3	N- 13°- E	円形	0.40×(0.36)	44	外種	U字状	人為		SK4254→本跡
4445	R 4 j3	N- 33°- W	楕円形	0.38×0.23	34	外種	U字状	人為		
4447	R 4 l5	N- 21°- E	楕円形	0.41×0.31	32	外種	平坦	人為		
4453	R 4 g3	N- 47°- W	楕円形	0.44×[0.35]	40	外種	平坦	人為		
4454	R 4 g4	N- 60°- E	楕円形	0.46×0.30	56	外種	U字状	人為		
4458	Q 5 f9	N- 11°- E	[楕丸長方形]	(1.10)×0.68	36	外種	平坦	人為	土師器片, 土師質土器片	SK4459→本跡
4459	Q 5 f9	N- 5°- E	[楕丸長方形]	(0.70)×(0.66)	22	垂直	平坦	人為		本跡→SK4458
4460	Q 5 f6	N- 10°- E	長方形	1.95×1.74	68	垂直	平坦	人為	土師器片, 須惠器片, 土師質土器片, 瓦製品	
4461	Q 5 g9	N- 2°- E	楕円形	2.60×1.61	21	罐斜	平坦	人為	土師器片, 土師質土器片, 石臼	SK4462→本跡

番号	位置	長径方向	平面形	規模(m)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (新旧関係 旧→新)
				長径×短径	深さ(cm)					
4465	Q 5 g 7	N- 3°- E	[不整形]	2.01×(1.52)	17	罐斜	U字状	人為	土師器片, 須惠器片, 土師質土器片, 古銭	S12640→本誌・SK4466→SK4467→本誌
4466	Q 5 g 7	N- 4°- E	[楕円形]	2.86×(1.45)	18	外種	U字状	人為	土師器片, 須惠器片	S12640→本誌・SK4465・SK4467→SE80
4467	Q 5 g 7	N- 28°- E	[楕円形]	1.83×(1.08)	28	罐斜	U字状	人為	土師器片, 須惠器片, 土師質土器片	S12640→SK4466→本誌・SK4465→SE80
4469	R 5 a 4	N- 41°- W	円形	0.66×0.60	23	罐斜	平坦	人為	土師器片, 釘, 鉄滓	S12645→本誌
4470	R 5 a 4	N- 3°- E	楕円形	0.91×0.69	16	罐斜	平坦	人為	土師器片, 須惠器片, 陶器片, 釘	S12646→本誌
4471	R 5 a 3	N- 58°- W	長方形	0.95×0.73	16	罐斜	平坦	人為	土師器片, 須惠器片	
4474	R 5 c 7	N- 72°- E	楕円形	0.93×0.78	14	罐斜	U字状	人為		
4475	R 5 b 5	N- 5°- E	隅丸方形	0.96×0.92	34	外種	平坦	人為		S12645→本誌
4479	Q 5 g 8	N- 17°- E	楕円形	1.35×1.15	34	外種	平坦	人為		S12652→本誌
4483	Q 5 g 5	N- 38°- W	[不整形]	2.09×1.45	33	罐斜	平坦	人為	土師器片, 土師質土器片, 磁石	S12560→本誌
4487	Q 5 g 5	N- 16°- W	楕円形	0.87×0.68	10	外種	平坦	人為		SK4463→本誌
4488	Q 5 j 3	N- 79°- W	[楕円形]	0.65×0.52	26	外種	平坦	人為		S12643→本誌→第93号増誌
4491	R 5 a 4	N- 9°- W	楕円形	0.91×0.80	31	罐斜	平坦	人為		S12646→本誌
4492	Q 6 l 1	N- 11°- E	楕円形	2.43×0.84	16	罐斜	平坦	人為	土師器片, 須惠器片	S12663→SK4503→本誌
4493	Q 6 h 5	N- 77°- W	隅丸長方形	1.50×1.04	10	罐斜	U字状	人為	土師器片, 須惠器片, 磁器片, 鉄製品	
4494	R 6 a 8	N- 7°- W	円形	1.26×1.17	40	罐斜	平坦	人為	土師器片, 須惠器片, 瓦片	本誌→第92号増誌
4499	R 5 a 3	N- 80°- W	不整形円形	1.04×0.88	38	外種	平坦	人為	須惠器片	S12655→本誌→第93号増誌
4508	Q 5 j 5	N- 52°- W	[円形]	0.34×0.31	36	外種	U字状	人為		SK4520→本誌
4509	R 5 b 4	N- 29°- W	円形	0.40×0.37	57	垂直	U字状	人為		S12656→本誌
4514	Q 5 l 7	N- 78°- W	楕円形	1.58×1.43	23	垂直	平坦	人為	土師器片, 須惠器片, 土師質土器片	S12640→本誌
4515	R 5 b 5	N- 6°- E	[不整形円形]	0.71×0.70	8	罐斜	凹凸	人為	土師器片, 須惠器片	S12648・2649→本誌
4516	R 5 d 5	N- 3°- E	[楕円形]	1.07×(0.74)	52	外種	平坦	人為	土師器片, 須惠器片, 土師質土器片	本誌→SK4607
4517	R 5 b 5	N- 78°- E	楕円形	2.07×1.52	20	罐斜	平坦	人為	土師器片, 須惠器片, 土師質土器片, 釘	第77号方形穴遺構→SK4600→本誌
4518	Q 5 l 5	N- 89°- W	楕円形	0.95×0.89	21	罐斜	平坦	人為	土師器片, 須惠器片, 土師質土器片	
4525	Q 6 j 2	N- 70°- W	[不整形円形]	1.56×0.97	18-50	外種	平坦	人為		S12663→本誌
4534	R 5 o 6	N- 9°- E	隅丸方形	0.68×0.68	49	外種	平坦	人為	土師器片, 須惠器片	
4537	Q 5 j 6	N- 40°- W	[楕円形]	0.48×0.34	23	外種	平坦	人為	土師器片, 須惠器片, 土師質土器片	
4547	R 5 f 6	N- 19°- W	[不整形円形]	0.60×0.52	42	垂直	平坦	人為		S12681→SK4546→本誌
4549	R 5 c 5	N- 7°- E	[不整形円形]	0.83×(0.46)	23	外種	平坦	人為		S12648・2649→本誌→SK4505
4553	R 5 b 6	N- 81°- E	[不整形円形]	0.70×0.85	30	外種	平坦	人為	土師器片, 須惠器片, 土師質土器片	S12649→本誌
4555	R 5 c 7	N- 28°- W	[不整形円形]	0.90×0.85	44	罐斜	平坦	人為	須惠器片	S12649→本誌
4559	R 5 b 3	N- 14°- E	楕円形	0.68×0.50	73	垂直	平坦	人為		SK4583→本誌→SK4560→SK4472
4560	R 5 a 4	N- 8°- E	楕円形	0.32×0.27	38	垂直	平坦	人為		SK4559→本誌
4562	R 5 d 3	N- 15°- W	[不整形円形]	0.50×0.38	52	外種	U字状	人為		S12669→S12656→本誌
4568	R 5 f 5	N- 1°- E	円形	0.97×0.98	67	外種	U字状	人為	土師器片, 須惠器片	
4570	Q 6 g 5	N- 17°- E	[楕円形]	0.74×[0.58]	18	外種	平坦	人為		S12658→本誌
4572	R 5 o 6	N- 39°- W	楕円形	0.56×0.50	26	外種	平坦	人為	土師器片, 須惠器片	
4577	R 5 e 5	N- 3°- E	[不整形円形]	1.42×0.88	22	罐斜	凹凸	人為	土師器片, 須惠器片	
4578	R 5 e 5	N- 88°- W	楕円形	1.11×0.90	55	外種	平坦	人為	土師器片, 須惠器片	
4579	R 5 f 5	N- 28°- E	円形	0.40×0.36	38	外種	U字状	人為	土師器片	
4582	R 5 c 4	N- 40°- E	[楕円形]	0.36×0.32	19	外種	U字状	人為		本誌→SK4583
4583	R 5 c 3	N- 1°- W	[楕円形]	0.66×0.38	36	垂直	平坦	人為	土師器片	SK4582→本誌
4584	R 5 c 3	N- 6°- W	楕円形	0.60×0.33	40	垂直	平坦	人為		S12699→S12668→S12656→本誌
4585	R 5 c 3	N- 60°- E	楕円形	0.29×0.22	41	垂直	U字状	人為		S12699→S12668→S12656→本誌
4586	R 5 d 3	N- 5°- W	円形	0.40×0.37	34	垂直	U字状	人為		S12669→S12668→S12656→SK4561→本誌
4587	R 5 c 3	N- 17°- W	[不整形円形]	0.56×0.42	56	外種	平坦	人為		S12699→S12668→S12656→本誌

番号	位置	長径方向	平面形	規模(m)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (新旧関係 旧→新)
				長径×短径	深さ(cm)					
4588	R 5 c3	N-24°-E	楕円形	0.36×0.24	32	垂直	平坦	人為		S1269→S1268→S1265→本誌
4589	R 5 b3	N-64°-E	不整形円形	0.40×0.25	30	垂直	平坦	人為		S12656→S12655→本誌
4590	R 5 c2	N-42°-E	円形	0.30×0.28	15	外傾	平坦	人為		S12656→S12655→本誌→ 第93号補誌
4592	Q 6 h1	N-35°-E	楕円形	0.63×0.55	31	外傾	平坦	人為		
4593	R 5 d3	N-55°-E	不整形楕円形	0.43×0.40	37	外傾	平坦	人為		
4595	R 5 d4	N-88°-E	方形	1.13×1.04	67	外傾	平坦	人為		
4602	Q 6 j3	N-81°-W	楕円形	0.59×0.49	20	外傾	平坦	人為	土師器片	S12666→本誌
4603	Q 6 j3	N-47°-W	楕円形	0.74×0.62	22	傾斜	平坦	人為	土師器片, 須惠器片, 陶器片	S12666→本誌
4607	R 5 d5	N-1°-E	長方形	1.58×0.99	46	傾斜	平坦	人為	土師器片	S12649→SK4516→本誌
4608	Q 6 h6	N-26°-E	楕円形	1.07×0.85	26	傾斜	平坦	人為	土師器片, 須惠器片	SD151→本誌
4610	Q 6 h6	N-4°-E	隅丸長方形	4.70×0.74	12	外傾	平坦	人為	土師器片, 須惠器片, 灰陶器片, 耳環	S12690→本誌
4614	R 5 c3	N-0°	円形	0.40×0.40	86	垂直	平坦	人為		S1269→S1268→S12656→本誌
4617	R 5 c3	N-34°-W	楕円形	0.38×0.34	67	垂直	平坦	人為	土師器片, 須惠器片, 土師質土器片, 陶器片	S12669→S12668→S12656 →SK4511→本誌
4622	Q 5 j8	N-21°-W	楕円形	0.59×0.45	37	外傾	U字状	人為	土師器片, 須惠器片	S12680→S12674→SK4630→本誌
4625	Q 5 j9	N-11°-W	円形	0.60×0.60	32	外傾	U字状	人為		S12680→S12673→本誌
4629	Q 5 j9	N-26°-W	不整形長方形	1.21×1.04	18	外傾	平坦	人為		S12680→S12673→本誌
4630	Q 5 j8	N-61°-W	[楕円形]	0.49×(0.46)	50	外傾	平坦	人為		S1280→S12674→本誌→SK4622
4634	R 5 b8	N-84°-W	楕円形	0.71×0.60	20	傾斜	平坦	人為	土師器片, 須惠器片	
4635	R 5 b7	N-79°-E	不整形円形	1.64×1.01	44	傾斜	平坦	人為	土師器片, 須惠器片, 土師質土器片	S12675→本誌
4638	R 5 b3	N-0°	円形	0.48×0.47	-	外傾	平坦	人為		S12669→S12668→S12656 →SK4511→本誌
4641	Q 6 g3	N-27°-W	楕円形	0.95×0.86	35	外傾	平坦	人為	土師器片	S12664→本誌
4644	Q 5 g8	N-4°-W	不整形円形	0.84×0.60	11	外傾	平坦	人為	土師器片	S12680→S12674→本誌
4645	Q 5 j8	N-70°-E	隅丸長方形	0.96×0.87	38	傾斜	平坦	人為	土師器片	S12680→S12675→S12674→本誌
4647	Q 6 h6	N-1°-W	楕円形	0.84×0.76	26	傾斜	U字状	人為	土師器片, 須惠器片	
4648	Q 5 l8	N-20°-W	楕円形	0.77×0.66	44	外傾	平坦	人為	土師器片	S12680→本誌
4666	R 6 e7	N-4°-W	楕円形	1.32×0.80	50	傾斜	U字状	人為	土師器片, 須惠器片, 馬歯	S12681→本誌→SK4679
4668	R 5 a9	N-5°-E	楕円形	1.30×0.82	21	外傾	凹凸	人為		
4672	R 5 a0	N-37°-E	長方形	1.30×0.79	53	傾斜	平坦	人為	土師器片, 須惠器片	S12661→本誌→SK4673
4673	R 5 a0	N-50°-W	楕円形	0.46×0.41	46	外傾	平坦	人為		SK2672→本誌
4676	R 5 f6	N-56°-W	楕円形	0.92×0.68	43	外傾	平坦	人為	土師器片	S12681→本誌
4677	R 5 f7	N-3°-W	楕円形	0.80×0.59	25	傾斜	平坦	人為	土師器片	S12681→本誌
4678	R 6 e7	N-29°-W	楕円形	0.93×0.75	46	垂直	平坦	人為	土師器片, 須惠器片	S12681→本誌
4679	R 5 f7	N-79°-W	円形	0.64×0.59	27	傾斜	U字状	人為	土師器片, 須惠器片	S12681→SK4666→本誌
4680	R 5 f6	N-2°-W	円形	0.56×0.46	30	外傾	平坦	人為		S12681→本誌
4681	R 5 h8	N-17°-W	楕円形	0.82×0.79	38	傾斜	U字状	人為	土師器片, 土師質土器片, 磁器片	S12688→本誌→SK4682
4682	R 5 h8	N-68°-E	楕円形	0.60×0.46	16	傾斜	平坦	人為		S12688→SK4681→本誌
4685	Q 6 l2	N-1°-W	楕円形	0.65×0.43	41	外傾	U字状	人為	土師器片, 須惠器片	S12665→S12672→本誌
4687	R 5 e7	N-22°-W	楕円形	0.91×0.78	36	垂直	平坦	人為	土師器片	S12681→本誌
4689	Q 6 g2	N-62°-E	楕円形	0.67×0.49	14	傾斜	U字状	人為	土師器片, 須惠器片	S12662→本誌
4690	R 5 f7	N-22°-E	円形	0.85×0.72	46	傾斜	U字状	人為	土師器片, 須惠器片, 土製支脚	S12681→本誌→SK4660
4691	R 6 e6	N-10°-E	円形	0.40×0.37	13	外傾	U字状	人為	土師器片, 須惠器片, 陶器片	S12681→本誌
4693	R 5 f7	N-24°-W	円形	0.58×0.58	25	垂直	平坦	人為	土師器片	S12681→本誌
4694	R 5 f7	N-54°-W	楕円形	6.08×5.50	30	外傾	平坦	人為	土師器片, 須惠器片	S12662→本誌
4696	R 5 f7	N-5°-E	円形	(0.50)×0.56	58	垂直	平坦	人為	土師器片	S12681→本誌→SK4698
4697	Q 5 j0	N-69°-E	不整形円形	0.80×0.33	65	垂直	U字状	人為	土師器片, 須惠器片	S12673→本誌
4698	R 5 f7	N-9°-E	楕円形	0.75×0.63	68	外傾	平坦	人為	土師器片, 須惠器片, 土師質土器片	S12681→SK4696→本誌

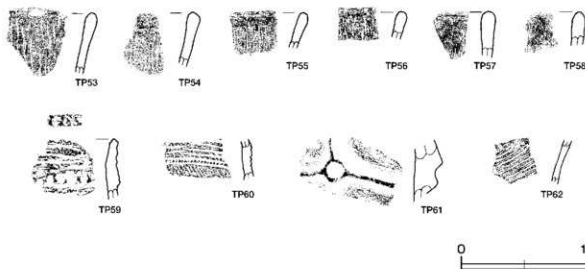
番号	位置	長径方向	平面形	規模(m)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (新旧関係 旧→新)
				長径×短径	深さ(cm)					
4705	R 6 f3	N- 6°- W	楕丸長方形	1.86×1.60	24	外傾	凹凸	人為	土師器片, 須惠器片	S12686→本跡
4721	Q 5 b1	N- 18°- E	不整形長方形	2.30×1.64	23	罐斜	平坦	人為	土師器片, 須惠器片, 土師質土器片	
4724	R 5 e0	N- 49°- E	楕円形	0.95×0.78	22	罐斜	平坦	人為	土師器片	S12698→本跡
4725	R 5 d0	N- 87°- E	楕円形	0.46×0.40	20	罐斜	平坦	人為	土師器片, 須惠器片	S12694→本跡
4726	R 6 d5	N- 13°- E	楕丸長方形	1.18×0.71	16	外傾	平坦	人為		S12702→本跡
4732	R 6 f6	N- 0°	円形	0.80×0.80	20	外傾	平坦	人為	土師器片, 須惠器片	S12704→本跡→第92号堀跡
4733	R 6 e6	N- 5°- E	楕円形	1.10×0.82	20	外傾	平坦	人為		S12704→本跡→SK 4734→第92号堀跡
4734	R 6 e6	N- 71°- W	長楕円形	1.47×0.68	14	外傾	平坦	人為	土師器片, 土師質土器片	S12704→SK 4733→本跡
5250	S 4 i5	N- 30°- E	不定形	2.06×1.30	8	罐斜	平坦	人為		SK 5251→本跡
5256	T 4 a5	N- 72°- E	[円形]	1.26×(0.56)	10	罐斜	平坦	人為	土師器片, 須惠器片, 土師質土器片	本跡→SF 18
5258	S 3 g0	N- 7°- E	楕円形	1.04×0.88	18	罐斜	平坦	人為		
5260	T 4 a3	N- 62°- W	円形	0.74×0.68	56	外傾	U字状	人為		SF 18→本跡
5263	S 4 c2	N- 17°- E	[方形]	[1.20]×(0.54)	14	罐斜	平坦	人為	土師質土器片	本跡→SK 5264
5266	S 4 c2	N- 10°- E	円形	0.60×(0.55)	66	垂直	平坦	人為		SK 5264→本跡→SK 5265
5267	S 4 c3	N- 58°- E	[楕円形]	(0.94)×0.68	6	罐斜	平坦	人為		SK 527→本跡→SK 5262→SK 5264
5268	S 4 b4	N- 16°- W	楕円形	1.40×1.20	58	外傾	平坦	人為	土師器片, 土師質土器片	
5269	T 4 d3	N- 57°- E	不定形	2.30×1.80	48	垂直	平坦	人為	土師器片, 土師質土器片, 磁石, 鉄滓	
5273	S 4 a3	N- 70°- W	円形	0.87×[0.80]	56	外傾	平坦	人為		
5274	S 4 a4	N- 44°- W	楕円形	0.90×0.70	12	罐斜	平坦	人為		
5275	S 4 a4	N- 36°- W	楕円形	0.87×0.57	22	外傾	平坦	人為	土師質土器片	SK 5372→本跡
5279	S 4 b4	N- 3°- E	楕円形	0.94×0.72	20	外傾	平坦	人為	土師器片, 須惠器片, 土師質土器片	
5283	S 4 c1	N- 25°- E	楕円形	1.14×0.70	18	罐斜	平坦	人為	土師器片, 土師質土器片	
5284	S 4 c2	N- 76°- E	不整形円形	0.56×0.50	18	外傾	平坦	人為	土師器片, 須惠器片	
5285	S 4 c2	N- 78°- W	[楕丸長方形]	2.10×[0.72]	20	外傾	平坦	人為	土師質土器片	
5286	S 4 c2	N- 29°- W	楕円形	[0.81]×0.56	12	外傾	平坦	人為		
5290	S 4 e1	N- 44°- E	不整形円形	2.41×2.07	15	罐斜	平坦	人為	土師器片, 土師質土器片, 陶器片	SK 5295・5296→本跡
5292	S 4 b5	N- 76°- W	不明	(1.02)×0.68	9	罐斜	平坦	人為		本跡→第95号堀跡
5293	S 4 c5	N- 74°- W	不明	(1.04)×[0.58]	9	罐斜	平坦	人為		本跡→第95号堀跡
5295	S 4 d1	N- 66°- W	楕丸長方形	1.57×0.97	24	罐斜	U字状	人為	須惠器片, 土師質土器片, 陶器片, 磁石	本跡→SK 5290
5296	S 3 d0	N- 59°- W	楕円形	0.96×0.83	27	罐斜	平坦	人為	陶器片	本跡→SK 5290
5297	S 4 c2	N- 74°- W	[楕円形]	1.68×(1.06)	10	罐斜	平坦	人為	土師質土器片, 陶器片, 磁石	本跡→SK 5264→5265→5267
5300	R 3 j6	N- 5°- W	楕円形	1.27×0.53	12	罐斜	平坦	人為	土師質土器片	SK 5338→本跡
5332	S 3 b5	N- 12°- W	不整形	2.51×2.26	25	外傾	平坦	人為	土師器片, 土師質土器片	
5336	R 3 f7	N- 1°- W	楕円形	0.74×0.59	18	外傾	平坦	人為	土師質土器片	
5338	R 3 j6	N- 64°- W	不明	(1.60)×1.27	8	罐斜	平坦	人為		本跡→SK 5330
5340	R 3 h5	N- 89°- E	不整形	2.06×1.76	36	外傾	平坦	人為	須惠器片, 土師質土器片	本跡→SK 5339
5344	R 3 e8	N- 59°- W	円形	0.87×0.77	28	罐斜	U字状	人為		
5345	R 3 d6	N- 54°- W	楕円形	2.48×1.74	30	罐斜	U字状	人為	土師器片, 土師質土器片	本跡→SD 166
5347	R 3 d2	N- 57°- E	楕円形	1.49×1.05	16	罐斜	U字状	人為	須惠器片, 土師質土器片, 陶器片	
5348	R 3 d9	N- 6°- W	楕円形	0.80×0.48	8	罐斜	U字状	人為	須惠器片	
5353	R 3 i0	N- 63°- W	楕円形	1.13×0.89	28	罐斜	U字状	人為	土師質土器片	
5354	R 3 i0	N- 44°- E	不整形円形	2.42×1.91	22	罐斜	U字状	人為	土師器片, 土師質土器片	
5355	R 3 c8	N- 67°- E	楕円形	0.88×0.76	6	罐斜	平坦	人為		
5358	S 4 d6	N- 6°- E	[楕円形]	[0.88]×0.79	10	外傾	平坦	人為	礎	
5359	S 4 d7	N- 8°- E	円形	0.60×0.60	21	外傾	平坦	人為		
5360	S 4 c6	N- 60°- E	楕円形	1.21×[1.00]	15	外傾	平坦	人為	土師器片, 須惠器片, 土師質土器片	

番号	位置	長径方向	平面形	規模(m)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (新旧関係 旧→新)
				長径×短径	深さ(cm)					
5361	S 4 d6	N-16°-E	隅丸長方形	1.56×0.94	6	罐斜	平坦	人為		
5362	S 4 e5	N-75°-W	楕円形	0.74×0.67	47	外種	平坦	人為	土師器片	SK5364→本跡
5364	S 4 e5	N-78°-W	[隅丸長方形]	1.72×0.61	13	外種	平坦	人為	土師器片, 須惠器片	本跡→SK5362
5368	R 3 a8	N-49°-W	円形	0.86×0.82	90	重蓋	平坦	人為	土師質土器片	SE98→本跡
5370	S 4 e6	N-74°-E	[隅丸長方形]	1.63×0.84	10	罐斜	平坦	人為	土師器片, 須惠器片, 土師質土器片	
5375	S 4 a4	N-95°-E	不整形円形	0.72×0.64	21	罐斜	平坦	人為		
5376	S 4 a4	N-10°-E	不整形長方形	1.35×0.98	54	外種	平坦	人為	土師器片, 土師質土器片, 灰石, 不明鉄製品	
5379	R 4 b1	N-27°-W	不整形	0.83×0.65	49	外種	U字状	人為	土師器片, 須惠器片, 土師質土器片, 陶器片	
5380	S 4 c4	N-13°-W	楕円形	0.89×0.59	43	罐斜	平坦	人為	土師器片, 土師質土器片	本跡→U P 66
5383	R 4 j1	N-33°-W	[楕円形]	[1.16]×[0.86]	30	罐斜	平坦	人為	土師器片, 須惠器片, 土師質土器片, 陶器片	本跡→SK5381→SK5384
5384	R 4 i1	N-31°-E	隅丸長方形	2.79×1.12	23	罐斜	平坦	人為	土師器片, 須惠器片, 土師質土器片, 陶器片, 圓石	SK5383→SK5381→本跡
5391	S 4 j1	N-79°-W	隅丸長方形	1.06×0.57	15	罐斜	U字状	人為		
5392	T 4 b2	N-89°-E	不整形円形	1.77×0.61	8	罐斜	U字状	人為		
5393	T 4 b1	N-87°-E	楕円形	1.32×0.68	10	罐斜	平坦	人為		
5396	S 3 i0	N-10°-W	[楕円形]	1.00×(0.44)	26	罐斜	平坦	人為		本跡→SD178
5401	Q 3 i9	N-24°-E	長方形	4.22×1.96	25	罐斜	平坦	人為	土師器片, 須惠器片, 陶器片	SK5405→SK5404→SK5403→SK5402→本跡
5402	Q 3 i9	N-24°-E	長方形	5.46×0.71	22	罐斜	平坦	人為	土師器片, 土師質土器片, 陶器片, 瓦片	SK5404→本跡→SK5401
5403	Q 3 i9	N-25°-E	長方形	4.86×1.20	50	外種	平坦	人為	土師器片, 須惠器片	SK5405→本跡→SK5401
5404	Q 3 i9	N-25°-E	長方形	5.32×0.97	24	罐斜	平坦	人為		SK5405→本跡→SK5402→SK5401
5405	Q 3 i9	N-25°-E	長方形	4.88×0.80	25	外種	平坦	人為	須惠器片, 陶器片	本跡→SK5404→SK5403→SK5401
5408	Q 4 f3	N-73°-W	円形	1.27×1.22	28	罐斜	平坦	人為	土師質土器片	本跡→SB507
5409	Q 4 e2	N-16°-E	不整形円形	2.06×1.28	18	罐斜	平坦	人為		本跡→SB507
5410	Q 4 e3	N-59°-W	隅丸長方形	1.03×0.69	15	外種	平坦	人為	土師質土器片	
5425	Q 3 f3	N-10°-E	楕円形	2.59×1.95	10	外種	平坦	人為		本跡→SB508
5429	Q 3 g4	N-25°-W	楕円形	1.10×0.75	22	外種	平坦	人為		SD163→本跡
5431	Q 4 e3	N-7°-W	楕円形	1.32×1.08	12	罐斜	U字状	人為	土師器片, 土師質土器片	
5432	Q 3 j9	N-43°-W	楕円形	0.76×0.62	32	外種	平坦	人為		
5440	Q 3 i0	N-41°-W	隅丸長方形	2.30×2.25	56	外種	平坦	人為	土師器片, 灰釉陶器片, 釘	第98号堀→本跡
5444	Q 4 j4	N-44°-W	隅丸長方形	1.68×1.33	16	外種	平坦	人為	土師質土器片, 陶器片	SK5443→5445→5484→本跡
5445	Q 4 j4	N-52°-W	[楕円形]	[1.54]×[0.76]	14	外種	平坦	人為	土師器片, 土師質土器片	SK5484→本跡→SK5444
5446	Q 4 j3	N-53°-W	隅丸長方形	1.48×1.41	14	外種	平坦	人為	土師器片, 須惠器片	
5447	R 4 a3	N-32°-E	隅丸長方形	1.38×1.19	14	罐斜	平坦	人為		
5456	Q 4 j3	N-26°-E	隅丸長方形	1.22×1.08	12	外種	平坦	人為		
5457	R 4 a4	N-77°-E	円形	0.62×0.59	35	外種	平坦	人為		
5466	Q 4 d4	N-66°-W	楕円形	1.02×0.90	15	外種	平坦	人為	土師質土器片, 陶器片	
5467	Q 4 d3	N-69°-W	隅丸長方形	1.46×1.14	4	罐斜	平坦	人為		
5484	Q 4 j4	N-11°-E	[隅丸長方形]	1.50×(0.49)	15	外種	平坦	人為		本跡→SK5445→SK5444
5486	Q 3 e2	N-89°-W	[隅丸長方形]	1.46×(1.07)	22	罐斜	平坦	人為		本跡→PG32
5498	Q 3 e3	N-8°-E	楕円形	0.84×0.63	12	外種	U字状	人為		
5510	T 4 e3	N-31°-W	円形	1.90×1.78	23	罐斜	平坦	人為		
5511	T 4 c2	N-71°-E	不整形	3.12×2.82	92	外種	平坦	人為	土師器片, 須惠器片, 土師質土器片, 陶器片	
5512	T 4 b1	N-73°-E	楕円形	1.95×1.90	89	外種	平坦	人為	土師器片, 須惠器片, 陶器片, 灰石, 鉄製品	
5513	T 3 b0	N-3°-E	楕円形	4.52×0.90	24	外種	平坦	人為	土師器片, 土師質土器片, 鉄製品	
5514	T 3 d0	N-61°-E	楕円形	1.46×0.86	58	外種	平坦	人為	土師質土器片	
5515	T 3 a8	N-48°-W	円形	1.12×1.14	24	罐斜	平坦	人為	土師器片, 須惠器片	
5516	T 3 a6	N-4°-W	方形	2.00×1.50	6	罐斜	平坦	人為		

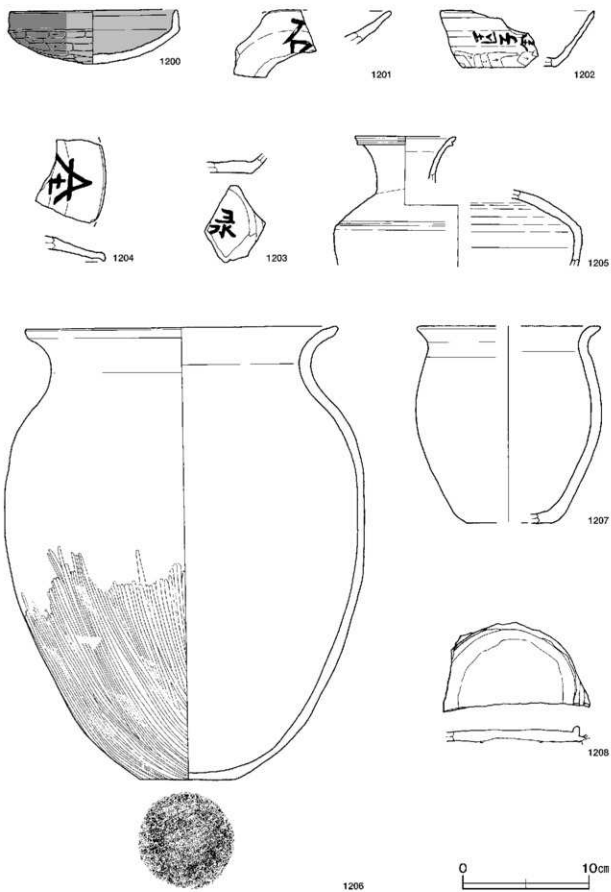
番号	位置	長径方向	平面形	規模(m)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (新旧関係 旧→新)
				長径×短径	深さ(cm)					
5517	S 3 14	N-80°-W	楕円形	1.56×1.02	16	罐斜	U字状	人為		SK5509→本跡
5522	S 3 f 8	N-30°-E	楕円形	2.00×1.72	33	罐斜	平坦	人為	土師器片, 土師質土器片, 陶器片, 古銭	SK5523→本跡
5525	S 3 d 9	N-28°-W	楕円形	1.50×0.66	12	外種	平坦	人為		
5527	S 3 b 9	N-5°-E	楕円形	1.73×1.56	42	外種	U字状	人為	土師器片, 須恵器片, 土師質土器片	
5529	S 3 c 5	N-82°-W	長方形	3.06×2.22	35	罐斜	平坦	人為	土師質土器片, 陶器片	
5536	T 3 c 8	N-18°-W	楕円形	0.41×0.36	12	罐斜	平坦	人為		
5537	T 3 c 8	N-20°-W	楕円形	0.70×0.58	11	罐斜	平坦	人為		
5538	T 3 c 8	N-76°-E	不整形	0.88×0.64	32	外種	平坦	人為		
5539	R 3 j 7	N-87°-E	楕円形	1.03×0.65	24	外種	凹凸	人為	土師質土器片	
5547	Q 3 h 8	N-41°-E	楕丸長方形	1.60×1.08	20	外種	平坦	人為		
5549	Q 3 e 3	N-6°-E	楕円形	(1.48)×(0.74)	20	罐斜	平坦	人為	土師質土器片, 陶磁器片	SD164
5554	Q 3 g 2	N-22°-E	楕丸長方形	1.70×1.66	50	外種	平坦	人為	土師器片, 土師質土器片	本跡→SD163
5555	S 3 c 3	N-78°-E	円形	2.02×1.76	30	罐斜	U字状	人為		本跡→SD171
5565	Q 3 f 5	N-51°-W	不整形円形	0.78×0.72	69	外種	U字状	人為	土師器片	

7 遺構外出土遺物(第777~781図)

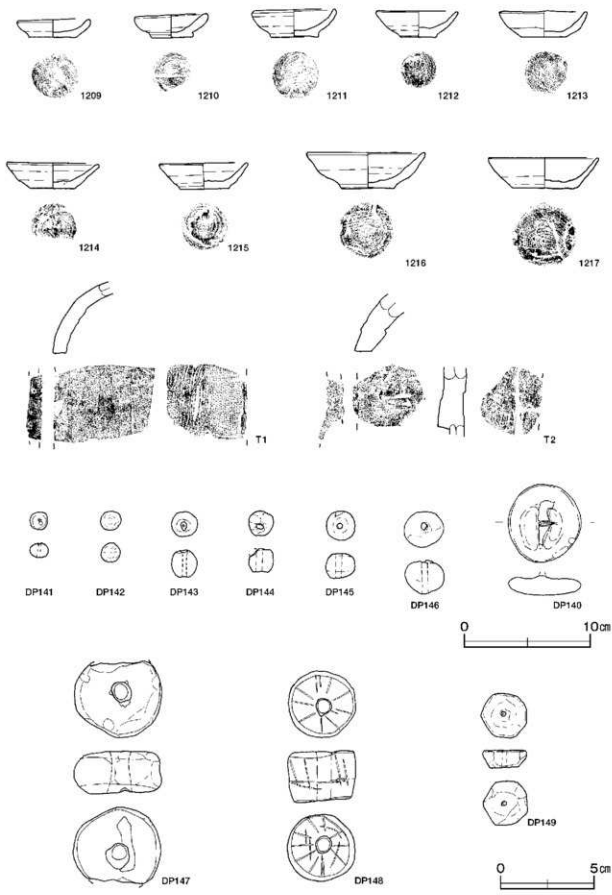
今回の調査で、出土した遺構に伴わない遺物のうち、特徴的なものを抽出して記載する。なお、解説は遺物観察表で示した。



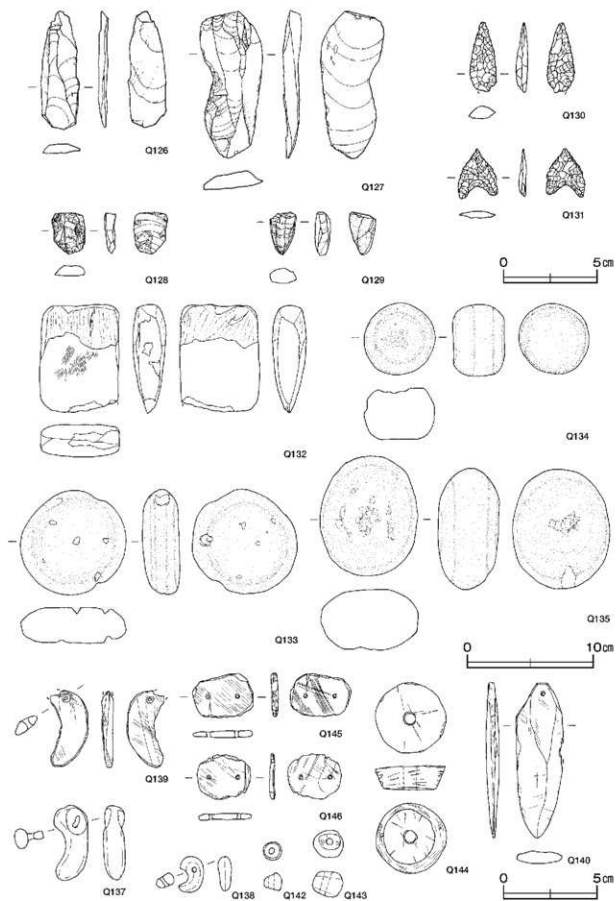
第777図 遺構外出土遺物実測図(1)



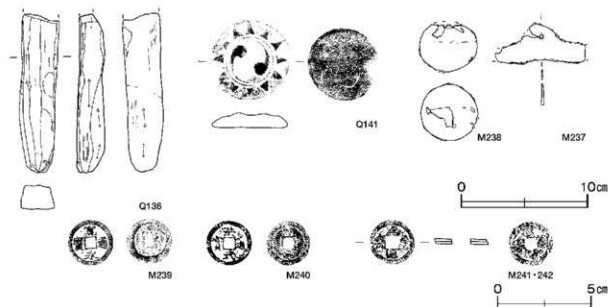
第778図 遺構外出土遺物実測図(2)



第779図 遺構外出土遺物実測図(3)



第780図 遺構外出土遺物実測図(4)



第781図 遺構外出土遺物実測図(5)

遺構外出土遺物観察表 (第777～781図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
T P53	縄文土器	深鉢	-	(4.9)	-	長石・石英・雲母	に灰1層	普通	体部外面縦位の掘糸文	S12595 掘り方埋土	早期前葉 PL141
T P54	縄文土器	深鉢	-	(4.4)	-	長石・石英・赤色粒子	に灰1層	普通	体部外面縦位の掘糸文	SB475 P.1埋土	早期前葉 PL141
T P55	縄文土器	深鉢	-	(2.7)	-	長石・石英・雲母	に灰1層	普通	体部外面縦位の掘糸文	S12596 P.1埋土	早期前葉 PL141
T P56	縄文土器	深鉢	-	(2.3)	-	長石・石英	に灰1層	普通	体部外面縦位の掘糸文	S12681 埋土	早期前葉 PL141
T P57	縄文土器	深鉢	-	(3.7)	-	粘土・赤鉄・赤砂	灰層	普通	体部外面縦位の掘糸文	SK4165 埋土	早期前葉 PL141
T P58	縄文土器	深鉢	-	(2.6)	-	長石・石英・雲母	に灰1層	普通	体部外面縦位の掘糸文	SK4165 埋土	早期前葉 PL141
T P59	縄文土器	深鉢	-	(4.9)	-	長石・石英・雲母	に灰1層	普通	高麗文を地文とし、口唇部・体部を半縦竹管による斜交文脈文	表土	早期前葉 PL141
T P60	縄文土器	深鉢	-	(3.2)	-	長石・石英	橙	普通	R.L.の半縦文脈を地文とし、半縦竹管による沈線・爪形文脈文	第103号埋土	前期前半 PL141
T P61	縄文土器	深鉢	-	(5.0)	-	粘土・赤鉄・赤砂	橙	普通	胎付隆起帯 押圧文	第54号地下式 埋土	中期前半 PL141
T P62	弥生土器	広口壺	-	(3.4)	-	粘土・赤鉄・赤砂	褐	普通	附加糸一種縄文	S12656 埋土	後期後半 PL141

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1200	土師器	坏	13.2	4.2	-	長石・石英	黒褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へら削り	S E69 埋土	65%
1201	土師器	坏	-	(2.7)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部外面口口ロナデ 下縁回転へら削り 内面へら磨き	SK4493 埋土	10% 磨き 「赤」 PL137
1202	須恵器	坏	[13.8]	4.5	[8.2]	石英・雲母	灰黄	普通	体部内・外面口口ロナデ 下縁手持ちへら削り 底部回転へら削り後一方の手持ちへら削り	SK4617 埋土	20% 磨き 磨き 「赤」 PL137
1203	須恵器	坏	-	(1.5)	[6.4]	石英・雲母	灰黄	普通	体部内・外面口口ロナデ 下縁手持ちへら削り 底部回転へら削り後一方の手持ちへら削り	SK4493 埋土	20% 底部 磨き 「赤」
1204	須恵器	蓋	[18.8]	(2.0)	-	長石・石英	灰白	良好	天井部左回りの回転へら削り後つまみ削り付けつまみ径2.4cm つまみ高1.0cm	SK4496 埋土	10% 磨き 「赤」
1205	須恵器	平瓶	7.8	(10.2)	-	長石・石英	灰	良好	体部内・外面口口ロナデ	表土	25%
1206	土師器	甕	24.6	36.0	7.6	長石・石英・雲母	に灰1層	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へら磨き 内面へらナデ削り	第61号地下式 埋土	90%
1207	土師器	小形甕	14.0	15.6	[7.0]	長石・石英・雲母	橙	普通	口辺部内・外面横ナデ	第65号地下式 埋土	45%
1208	須恵器	円蓋	[11.0]	(1.3)	-	長石・雲母	黄灰	良好	硬面残存 体部内・外面口口ロナデ	S E82 埋土	15%
1209	土師質土器	小皿	5.6	1.4	3.8	長石・石英・赤色粒子	に灰1層	普通	体部内・外面口口ロナデ 体部内面ナデ 底部回転糸切り後ナデ	S12610 埋土	95%
1210	土師質土器	小皿	5.7	1.9	3.1	長石・石英・赤色粒子	に灰1層	普通	体部内・外面口口ロナデ 底部回転糸切り	Q 4 g0	100%
1211	土師質土器	小皿	6.3	2.2	3.8	長石・石英・雲母	に灰1層	普通	体部内・外面口口ロナデ 底部回転糸切り	表土	95%
1212	土師質土器	小皿	6.3	2.1	2.8	長石・石英	橙	普通	体部内・外面口口ロナデ 体部内面ナデ 底部回転糸切り	Q S 14	80%
1213	土師質土器	小皿	6.9	2.1	3.6	粘土・赤鉄・赤砂	に灰1層	普通	体部内・外面口口ロナデ 底部回転糸切り	SB490 P.2埋土	95% PL136
1214	土師質土器	小皿	7.2	2.1	3.6	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部内・外面口口ロナデ 体部内面ナデ 底部回転糸切り	R 4 f6	95%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1215	土質質土器	小皿	6.9	2.1	3.9	長石・石英・赤色粘土	に灰褐色	普通	体部内・外周口ノナデ 体部内蓋ナデ 底部断絶切り後ナデ	R 4 f 6	95%
1216	土質質土器	小皿	9.0	2.9	4.0	長石・石英	に灰褐色	普通	体部内・外周口ノナデ 体部内蓋ナデ 底部断絶切り後ナデ	S12673覆土	95%
1217	土質質土器	小皿	8.4	2.5	5.2	長石・石英・雲母	に灰褐色	普通	体部内・外周口ノナデ 底部断絶系切り	表土	90%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
T 1	丸瓦	(5.9)	(4.4)	1.2	(85.2)	長石	に灰褐色	不良	凸面へう削り 凹面布目痕	Q 4 g 0	
T 2	丸瓦	(5.5)	(3.9)	1.9	(84.4)	長石・赤色粘土	に灰褐色	不良	玉縁部一部残存 凸面へう削り 凹面布目痕	表土	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
DP140	鏡形土製品	6.2	5.8	(1.6)	52.4	土(長石・雲母)	紐部欠損 ナデ 褐色	表土	PL138

番号	器種	径	厚さ	孔径	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
DP141	土玉	1.4	1.1	0.2	2.4	土(長石・石英)	ナデ 二方向からの穿孔	SB474P3覆土	PL140
DP142	土玉	1.6	1.5	-	6.7	土(長石・石英)	ナデ 穿孔無し	SD152覆土	PL140
DP143	球状土鉢	2.1	2.2	0.4	8.7	土(長石・石英)	ナデ 二方向からの穿孔	SD153覆土	PL140
DP144	球状土鉢	1.9	1.9	0.6	3.8	土(長石)	ナデ 一方向からの穿孔	SD152覆土	PL140
DP145	球状土鉢	2.3	2.0	0.5	11.5	土(長石・石英)	ナデ 一方向からの穿孔	第96号埋土	PL140
DP146	球状土鉢	3.1	2.7	0.5	19.7	土(長石・赤色粘土)	ナデ 一方向からの穿孔	SD151覆土	PL140
DP147	紡錘車	4.7	2.3	0.8	(43.6)	土(長石・赤色粘土)	ナデ 二方向からの穿孔	SD153覆土	PL140
DP148	紡錘車	3.6	2.7	0.8	40.8	土(長石・赤色粘土)	ヘラ磨き 二方向からの穿孔 表・裏面放射射, 側面縦位の線刻	S 5 b 2	
DP149	紡錘車	2.4	1.0	0.24	7.4	土(長石・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	SK5340覆土	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
Q126	剥片	6.2	2.1	0.6	5.9	安山岩	縦長剥片 背面に割面を残す	S12603覆土	PL141
Q127	剥片	7.8	3.3	0.9	23.1	珪質頁岩	縦長剥片 側縁部両側に丁寧な片置押圧剥離調整 背面に割面を残す	S12667覆土	PL141
Q128	剥片	2.2	1.8	0.6	2.4	黒曜石	側縁部両側に押圧剥離調整 背面に割面を残す	S12658覆土	PL141
Q129	細石刃核	2.3	1.4	0.7	2.8	黒曜石	縦長の剥離痕跡 背面に割面を大きく残す	表土	PL141
Q130	有茎尖頭器	(3.6)	1.5	0.6	(3.1)	安山岩	茎部欠損 両面押圧剥離調整	SF16覆土	PL141
Q131	石錐	2.6	2.1	0.4	1.3	安山岩	凹基無茎錐 両面押圧剥離調整	表土	PL141
Q132	磨石片岸	8.5	6.4	2.6	283.5	凝灰岩	丁寧な研磨 刃部・着装部使用のため欠損・摩滅	SK5522覆土	PL144
Q133	磨石	8.4	8.3	2.8	132.0	安山岩	表・裏面を使用	表土	
Q134	磨石	5.7	5.6	4.2	478.6	安山岩	表・裏面を使用 中央部に敲打痕	表土	
Q135	敲石	9.5	7.8	4.8	159.5	安山岩	表・裏面を使用 表面中央部に敲打痕	第97号埋土	
Q136	砥石	(12.5)	3.2	2.2	104.3	砂岩	端部欠損 砥面6面 断面六角形	R 4 c 6	
Q137	勾玉	3.9	1.8	1.2	11.1	蛇紋岩	孔径0.6cm 全面研磨 二方向からの穿孔 再穿孔	SK4631覆土	PL144
Q138	勾玉	1.9	1.4	0.7	2.4	蛇紋岩	孔径0.2cm 全面研磨 二方向からの穿孔	SD181覆土	PL144
Q139	勾玉	4.0	1.9	0.6	(6.2)	滑石	孔径0.4cm 全面研磨 二方向からの穿孔	表土	PL144
Q140	石製濾器	8.2	2.5	0.7	(18.2)	滑石	刺形 孔径0.2cm 全面研磨 一方向からの穿孔	第96号埋土	PL144
Q141	石製濾器	6.2	6.0	1.1	52.5	ガラス	巴紋 三角文 青色	表土	PL143

番号	器種	径	厚さ	孔径	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
Q142	白玉	0.9	0.9	0.3	1.1	蛇紋岩	全面研磨 一方向からの穿孔	SE73覆土	PL144
Q143	小玉	1.5	1.3	0.3	4.4	蛇紋岩	全面研磨 一方向からの穿孔	SK20覆土	PL144
Q144	紡錘車	3.7	1.3	0.7	24.4	蛇紋岩	全面研磨 一方向からの穿孔 表・裏面放射射, 側面横位の線刻	R 5 c 5	
Q145	双孔円板	3.2	0.4	0.2	5.0	滑石	全面研磨 一方向からの穿孔	SD153覆土	PL144
Q146	双孔円板	2.9	0.3	0.15	3.5	滑石	全面研磨 一方向からの穿孔	表土	PL144

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
M237	火打具	3.2	(7.2)	0.3	(14.4)	鉄	山形 頂上部に孔有り	表土	
M238	鈴弁	(3.8)	4.6	0.07	(17.6)	鉄	中央部に溶接部 下部に2孔有り	S12602覆土	PL147

番号	器種	径	孔径	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
M239	古銭	2.43	0.54	0.12	2.6	銅	寛永通寶 初鋳1636年 古寛永	S12602覆土	PL148
M240	古銭	2.42	0.56	0.14	2.5	銅	洪武通寶 初鋳1368年 明銭 無背銭	R 5 c 9	PL148
M241	古銭	2.42	0.60	0.12	[2.7]	銅	元豊通寶 初鋳1078年 北宋銭 行書 鑄のため融着	表土	PL148
M242	古銭	2.42	0.60	0.12	[2.7]	銅	元豊通寶 初鋳1078年 北宋銭 行書 鑄のため融着	表土	PL148

第8節 ま と め

1 はじめに

鳥名熊の山遺跡は、平成7年度に調査が開始され、現在も調査が継続している県内最大級の遺跡である。調査区域は便宜的に第1～16区に分けられており、第1～13区については第120・133・149・166・174・190・214・236・264集で既に報告されている。今年度は、遺跡北部の第14区、中央部の第4・7・9区の一部、南西部の第16区について整理を行った。これまでの調査で、古墳時代前期から平安時代にかけての集落遺跡であることが判明しているが、今年度整理分では、第9区の鑄造土坑、第16区の大規模な堀跡をはじめ、中・近世の遺構や遺物が多数確認されている。そこで、各調査区を概観するとともに、中世以降の鳥名熊の山遺跡の様相について、特に特徴のある遺構や遺物を取り上げて紹介し、若干の考察を加えたい。

2 各調査区の概要

ここでは、今年度整理を行った第4・7・9・14・16区のうち、遺跡中央部に位置する第7・9区、北部に位置する第14区、南西部に位置する第16区の様相について概観したい。なお、時期区分に関しては、既報告済みの調査区との整合性を保つために、『第190集』で示された土器の分類に基づき、第1・2期を4・5世紀、第3～5期を6世紀、第6～8期を7世紀、第9～11期を8世紀、第12～14期を9世紀、第15～18期を10～11世紀とする。

(1) 第7区

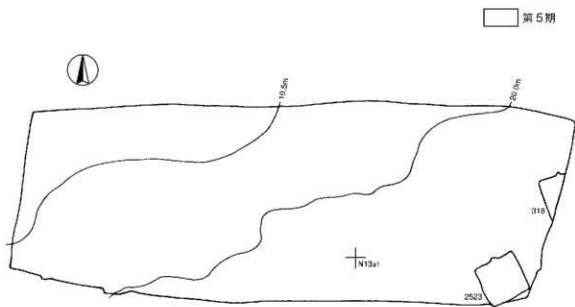
第7区は当遺跡の中央部に位置し、同区の北側の第2区は平成7・10・11年度に調査され、すでに『第120・174集』として報告されている。また、東側の第6区も平成8・9年度に調査され、『第133集』として報告されている。さらに、南側及び西側の第7区も平成9年度に調査され、『第149集』として報告されており、これらの調査報告を参考にしながら、当区を中心とした遺跡中央部について概観する。

古墳時代（第782図）

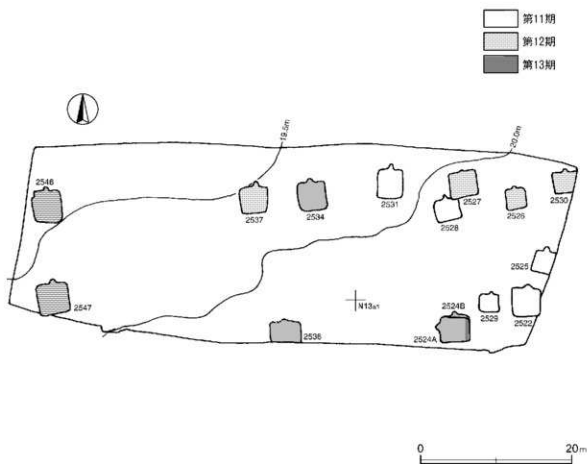
当区では、古墳時代前・中期の遺構は確認されていないが、東側の第6区では5世紀代の集落が確認されている。当区内に集落が出現するのは6世紀後葉にあたる第5期からで、竪穴住居跡2軒が該当する。この2軒は第6区に広がる集落の西端部に位置するもので、第318・2523号住居跡はいずれも一辺5mを超える中形住居である。さらに平成9年度に調査された西側の第7区からは第5期の竪穴住居跡7軒が確認されており、この時期の集落は、当区を挟んで東西に位置する標高約20mの台地上に広がっていたと理解できる。

奈良時代（第783図）

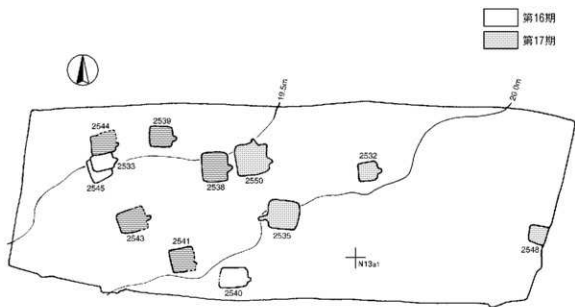
第5期以降、当区に遺構は確認されていないが、8世紀後葉の第11期に5軒の竪穴住居跡が確認されている。規模は異なるが主軸方向は真北に近く、いずれも当区の北東部に位置している。特に第2522号住居跡と第2529号住居跡は、軸線やその間隔から2軒1組の単位として存在していたものと考えられるが、この他の住居跡は確認できなかった。周辺部の調査では、第7区の南側と西側（平成9年度調査）から7軒、東側の第6区から7軒が確認され、北側の第2区を除いた周辺に集落の広がりが確認できる。またこの時期、北西50mの第8区には掘立柱建物群が立ち並ぶようになり、律令体制下の本集落の様相がうかがえる。



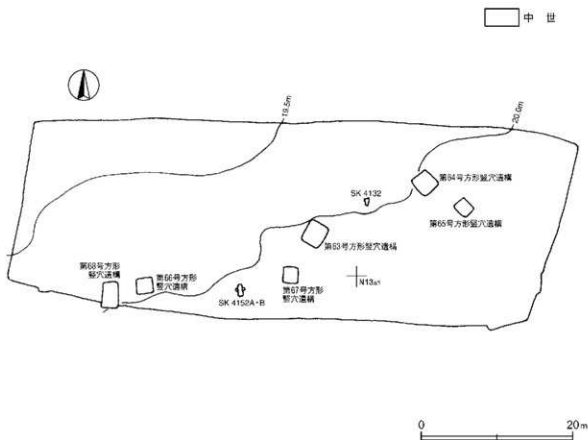
第782图 第7区集落変遷図(第5期)



第783图 第7区集落変遷図(第11-13期)



第784图 第7区集落変遷図(第16・17期)



第785图 第7区集落変遷図(中世)

平安時代（第783・784図）

9世紀前葉の第12期には竪穴住居跡6軒が確認されており、第2546号住居跡では、竈の両側を掘り込んだ棚状施設が検出されている。また、出土遺物としては第2547号住居跡や、南に45m離れた第604号住居跡から鉄鉗が出土しており、いずれも時期は9世紀中葉に比定されている。鉄滓や粒状滓などは検出されていないが、鉄鉗の出土から鍛冶関連遺構の存在が想定される。

9世紀中葉の第13期には竪穴住居跡4軒が確認されており、第2534号住居跡の床面からは鉄製鋤先が形に近い状態で出土している。当遺跡で鋤先が出土した住居跡は5例目で、鋤先の所有について『第214集』では、「特定の在地有力者によって所有されていた¹⁾。」と指摘されており、単位集団における中心的な人物の居住が推測できる。また、第2524A号住居跡からは円面硯が出土しており、第2537号住居跡出土の転用硯とあわせ、9世紀前葉から中葉にかけてひとつの集落が形成されていたと考えられ、硯の出土は、第7区における集落の性格を考える上で重要である。また、8世紀代まで第10～12区でしか確認されなかった硯が、9世紀中葉以降は第7～9区からも確認されるようになり、集落の性格を考える上で興味深い。

第14・15期の住居跡は確認されず、その後10世紀後半の第16期では、竪穴住居跡3軒が確認される。当遺跡では第15期以降、東竈の住居跡が増加する傾向にあり、当区西側には9軒が確認されている。第2533号住居跡からは「大」・「城」の墨書土器が出土し、第2545号住居跡からは、底部に「大」と施書きされた土師器高台付椀が出土している。以前の調査で出土した文字資料については『第174・190集』において集成され、「大」・「城」の言葉の意味について『第190集』では、「大」は「地名、あるいは特定の人物に対する美称」と述べられている。また、「城」については遺跡全体から5例が出土しており、「8世紀前半に掘削された大溝を意識したもので、9世紀になっても溝を避けるように遺構が築かれていることから、後世の人々にとっても溝の存在が意識されていたものと考えられる²⁾。」と述べられている。報告者は、前述したように「大」については、当遺跡の広い地域で確認されていることから集落内の特定の人物をさし、「城」については、後世の人々にとっても溝の存在が意識されていたことから、地域や場所を意味する言葉と推測している。また表採出土の須恵器杯「城内」については、溝区画の内側を意味するものと推測される。

11世紀前半の第17期には竪穴住居跡9軒が確認でき、当区全体に広がりが見られる。第2535号住居跡は、煙道部の細長い西竈と地床炉を持ち、南東コーナー部の床面から、雲母片岩が出土している。当遺跡では、炉と竈を有している住居跡は本年度調査分を含め14軒調査され、10世紀後半に比定され第10区に位置する第1345住居跡からは銅滓や埴壇、鋳型（小形仏）が出土しており、鋳造に関わる工房跡として報告されている。また、9世紀前葉に比定され第8区に位置する第918号住居跡からは鍛冶炉・鉄滓・粒状滓・鍛造剥片が確認され、鍛冶工房の様相を呈している。本跡では、炉の周りから焼土・炭化物が出土しており、雲母片岩が全床石の可能性もあると想定されたが、鍛冶に関わる遺物は全く出土していないため、工房的な様相は示しているがその可能性は薄い。

中世（第785図）

中世の遺構としては、方形竪穴遺構6基、火葬土坑3基が確認されている。

方形竪穴遺構については『第236集』で類型別に分類されているが、当区から検出された第63～68号方形竪穴遺構はいずれも柱穴を伴わないグループに該当し、その機能などについては「住居、工房、倉庫とする多様な説があるが、居住者の社会的な階層、築造者の社会的な階層、遺構群を構成する中で与えら

れた機能など複雑な要素を含む遺構であり、機能はその検出状況で判断すべきである³⁾。」と述べられている。

当区の遺構について見ていくと、第63・68号方形竪穴遺構では床に硬化面が確認されており、人の出入りが想定できることから倉庫的な機能を有していたと考えられる。また、第64号方形竪穴遺構の床面からは炭化物と焼土塊が確認され、有機物を燃した痕跡と考えることから住居的な機能を有していたと考えられる。さらに、第65号方形竪穴遺構の床面からは台石と思われる雲母片岩が検出され、工房的な機能を有していたと考えられる。当区におけるこれらの遺構は、標高20mの緩斜面上に北東から南西方向に並びように確認されており、ひとつの集合体を形成するように意識して構築されたと考えられる。

火葬土坑についても『第236集』で12基が集成されている。当区から検出された第4132・4152A・4152B号土坑の形状は不整形及びT字形で、規模は長軸1m前後と小規模のものである。いずれも土坑内に通風孔を掘って、熱効率をあげたものであり、当遺跡から検出された火葬施設の大半が本遺構と同じ形状を示している。検出場所は、いずれも10世紀後半から11世紀前半の住居跡を掘り込み、単独で検出されている。『第236集』によると「火葬の場所と墓地との関係は、同一墓地内にその場所を設ける事例が多い¹⁾。」と述べられているが、当区においては周辺に墓域が検出されていないことや、火葬の場と墓域が同一墓地内に存在していないことから、『第236集』で述べられている15～16世紀よりも古い可能性が考えられる。また、当遺跡の西側に隣接する永仁5年(1297年)開基と伝えられる妙徳寺との関連性についても明確ではない。

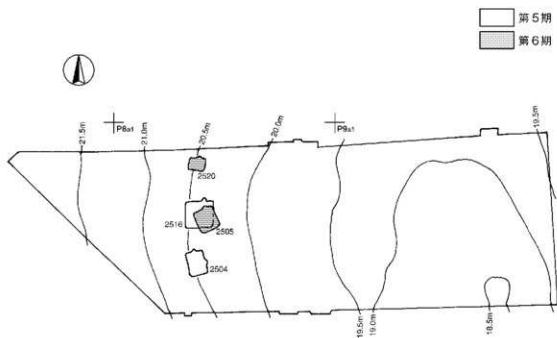
第4152B号火葬土坑の覆土中から、「城内」と書かれた墨書土器と小金銅仏の鋳型が出土している。鋳型は、表・裏一対で出土しており、鋳出したもの大きさは長さ5cm、幅1.4cmで、厚さは最大0.6cmと推定される。当鋳型からその造形を明確に特定することはできないが立像であり、年代を明確にすることはできなかった。小金銅仏は下り松遺跡²⁾(結城市・平安時代)出土例が約5cm、本田屋敷遺跡³⁾(千代川村・平安時代末)出土例が約8cm、木原城跡⁴⁾(美浦村・鎌倉時代)出土例が約5.5cmなどが知られているが、当鋳型の像形と類似するものはなく、大きさなどから懸仏あるいは菩薩像の頭上を飾る化仏とも推測される。また、当遺跡では、第7区の第16号井戸跡から10世紀後半に比定される天部立像、第10区中央部に位置する第1345号住居跡から銅滓が付着した埴埴片と小形仏の鋳型が出土しており、当遺跡における鋳物集団の存在が想定される。

(2) 第9区

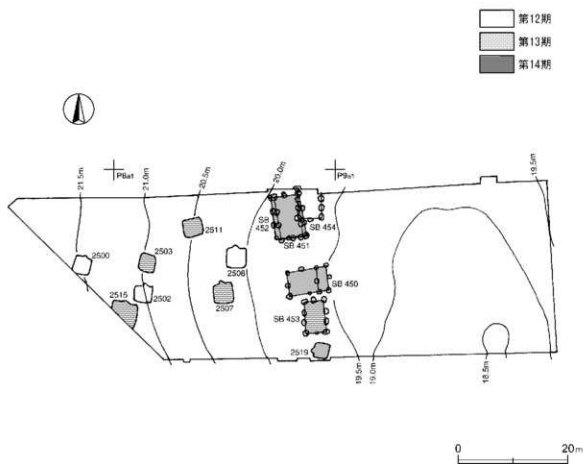
第9区は当遺跡の中央部やや南に位置し、北側の第8・9区は平成8・9年度に調査され、『第133・166集』において報告されている。また、東側の第10区は平成10・15年度に調査され、『第190・236集』において報告されている。南側の第9・12区の一部は未調査区域はあるものの平成14・15年度に調査され、『第214・236集』において報告されており、それらの報告を参考に、当区を中心とした遺跡中央部について概観する。

古墳時代(第786図)

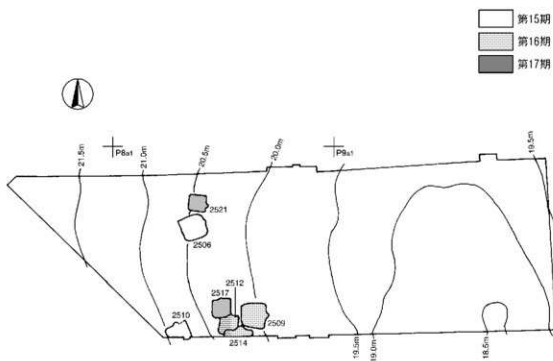
当区に集落が出現する時期は6世紀後半の第5期からで、竪穴住居跡2軒が該当する。この時期は、熊の山遺跡の周辺部が大規模に開発され、それまで遺構が検出されなかった当区にも集落が形成されるようになる。遺跡南部の第12区では22軒が検出され、小さな谷津を挟んだ東側の第10区でも7軒の住居跡が検



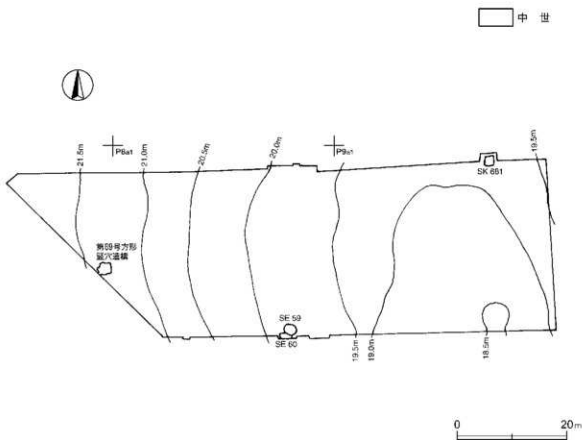
第786图 第9区集落变迁图(第5・6期)



第787图 第9区集落变迁图(第12~14期)



第788图 第9区集落变迁图(第15-17期)



第789图 第9区集落变迁图(中世)

出されて集落が拡大していることが確認されている。

続く第6期も引き続き集落が拡大する時期であり、竪穴住居跡2軒が検出されている。第12区では、標高22mほどの台地上から東縁辺部にかけて住居跡19軒が広がっており、その北端に本調査区が位置し、第10区では6軒が分布している。

平安時代（第787・788図）

当区で最も多くの遺構が確認されているのは9世紀代で、竪穴住居跡15軒、掘立柱建物跡5棟、土坑9基、鋳冶関連土坑4基が確認されている。掘立柱建物跡は、当区中央部に南北に延びるように検出されており、2×4間の側柱式の形状から倉庫であったと考えられる。また、本年度調査中の当区南側からも掘立柱建物跡が検出されており、さらに南に広がっている状況が確認されている。

当区の中央部には、南からの小さな谷津が入り込んでおり、その軸線から、掘立柱建物跡群はこれらの谷津を意識して建てられた可能性が考えられる。

9世紀前葉の第12期では、竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡1棟、鋳冶関連土坑4基が検出されている。第2508号住居跡からは「主」、第4125号鋳冶関連土坑からは「区」と書かれた墨書土器がそれぞれ出土している。「区」は第12区中央部に位置する第1578号住居跡からも出土しており、『第214集』では「鳥名八幡前遺跡の第86号住居跡から出土した墨書土器と筆跡が酷似している⁹⁾。」と報告されている。このように文字資料からも鳥名八幡前遺跡¹⁰⁾と密接に係わり合っていたと推測できる。また、調査区中央部の谷津からは第4119・4120・4125・4127号鋳冶関連土坑4基が検出され、遺構確認面での鉄滓の分布状況からも鋳冶関連の地域として利用されたと考えられる。

第13期では竪穴住居跡4軒、掘立柱建物跡2棟が検出されている。第2507号住居跡からは、判読できない墨書土器3点、第2515号住居跡からは「地田」と書かれた墨書土器1点と転用硯が出土している。この転用硯の出土は、集落の性格を考える上でも重要な資料である。

第14期では竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡2棟が検出されている。第2519号住居跡は西側に竈を有し、紡錘車や巡方、鉄鏝や墨書土器が出土している。巡方の出土は官人的な支配者層の存在を推測させるもので、転用硯や巡方が出土する当区周辺は、9世紀代において鳥名熊の山遺跡の中心的な集落であった可能性が考えられる。10世紀に入ると、それまで散在していた集団がひとつの地区に集合して集落を形成するようになり、集落の中心は東側の第10区へと移る。

当遺跡においては10世紀以降、東に竈をもつ住居が多くなり、当区では2軒確認されているが、北に竈をもつ住居も4軒確認されている。これは、東に竈をもつ住居の居住者と血縁的に別の集団と考えられ、また、東側に隣接する第10区でも北に竈をもつ住居跡が確認されている。

第15期では、竪穴住居跡2軒、第16期では竪穴住居跡3軒、第17期では竪穴住居跡2軒が確認されているが、住居の規模や出土遺物に大きな差異が認められないことから集落内における中心的な住居を特定することは難しく、第15・17期での住居跡の間隔は約40m離れており、住居が点在する状況を示している。

中世（第789図）

中世の遺構としては、铸造土坑1基、井戸跡2基、方形竪穴遺構1基が確認されている。第681号铸造土坑は調査区の北東部から検出され、その遺構の北側は『第166集』¹¹⁾ですでに報告されており、今回の調査で遺構全体の様相が明らかとなった。本土坑は一辺が2mほどの方で、梵鐘（竜頭、撞座、乳）、

燈籠の蓮華座、鯛口等の銅製片や溶解炉の炉壁片など約400点が出土している。京都府京都大学構内遺跡¹¹⁾ 検出の梵鐘鑄造土坑や奈良県巨勢寺¹²⁾ 検出の梵鐘鑄造土坑と比較して見ると、規模や出土遺物から本施設で梵鐘を鑄造した可能性が考えられ、『第166集』で報告されたような廃棄土坑ではなく、梵鐘鑄造土坑であると想定される。また、同時期に鯛口や燈籠が鑄造されており、具体的には明確ではないが、この時期の熊の山遺跡周辺での宗教の広まりを認識することができる。なお、本土坑については別項で記述する。

方形竪穴遺構や井戸跡については、当区内に中世の遺構が確認できないことから、現在調査中の南地区への遺構の広がりが想定される。

(3) 第14区

第14区は遺跡の北部にあたり、『第264集』で報告された第13区の西側に位置している。ここでは、隣接する第13区の様相を加味しながら、遺跡北部の様相について概観する。なお、文中では、東西方向に入り込んだ谷津の北側にあたる第13・14区を北部、谷津の南側にあたる第1～10区を中央部としている。

古墳時代（第790～792図）

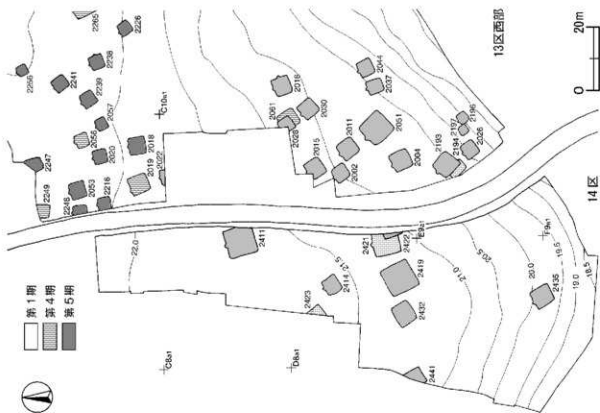
4世紀にあたる第1期は、熊の山の地に集落が出現する時期であり、当区では竪穴住居跡1軒が該当する。規模は一辺6.9mで、中央部の北寄りに炉を有している。第13区では同時期の竪穴住居跡4軒が確認されており、規模や構造、出土遺物に本住居跡との大きな差違は認められない。また、本住居跡の周囲では同時期の住居跡が確認されていないことや、第13区で確認された住居跡は、それぞれが30m以上の間隔をもって存在していることから、当期には各住居が最小単位となって存在していたものと考えられる。

続く第2・3期の遺構は確認されず、6世紀前半の第4期に再び遺構が確認されるようになり、竪穴住居跡2軒が該当する。当区の中央部東側に位置する第2421号住居跡は、一辺が8mを超える大形の住居であり、貯蔵穴を有する住居構造や多量の出土土器から、集落の中心的な住居であったと考えられる。また、調査区西端では第2423号住居跡が確認されており、さらに西側に集落が拡大する可能性が考えられる。

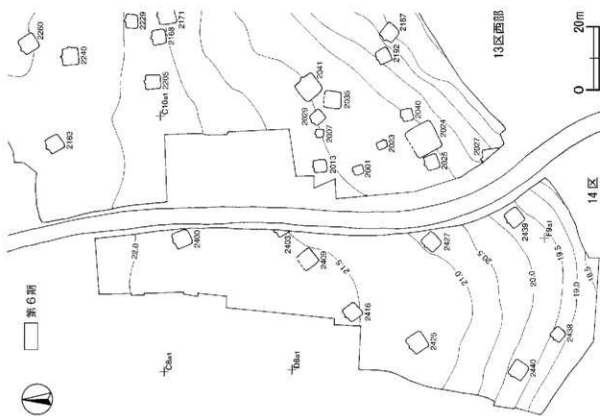
6世紀後葉の第5期になると、住居跡数の増加とともに、第4期の住居跡の間や前期まで遺構が検出されなかった南緩斜面部にも新たに住居が構築されて集落が拡大している。竪穴住居跡6軒が該当する。この時期は、熊の山遺跡を中心とした周辺部一帯が大規模に開発されて人口が急増した時期であり、北部全体で確認された竪穴住居跡数は48軒である。また、鉄製農具や祭祀具の出土数が増加する。

第6期も引き続き集落の繁栄期であり、竪穴住居跡9軒が該当する。北部全体で確認された竪穴住居跡数は45軒であり、集落の広がりはほぼ全域に及んでいる。また、第5期同様、鉄製農具や祭祀具の出土数の増加が確認されている。6世紀中葉の第4期以降、ほぼ同じ地域で住居跡が確認されていることから、それまで小集団を単位として分散、移動していた集団が、血縁的なつながりを持ちつつ住み替えを行うようになったと考えられる。また、当区における古墳時代後期の竪穴住居跡のほとんどが、主軸方向を北西に向ける規格性が見られるのに対し、南緩斜面部に位置する第2438・2440号住居跡だけが主軸方向を大きく西に向けている。出土遺物からは、北側平坦部の住居との間に明確な差違は認められないが、この2軒は、平坦部の住居群とは血縁的には別の集団とも考えられる。

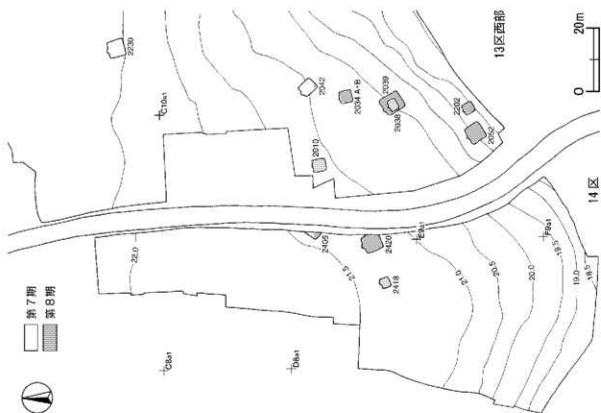
7世紀中葉の第7期の竪穴住居跡は2軒、第8期には1軒だけとなる。北部全体でも、第7期は14軒、第8期は7軒と6世紀代と比べて急激に住居跡数は減少しており、遺跡中央部と同様に、北部においても集落が一時的に衰退に向かう時期であったと考えられる。また、住居跡数は減少しているものの居住域は



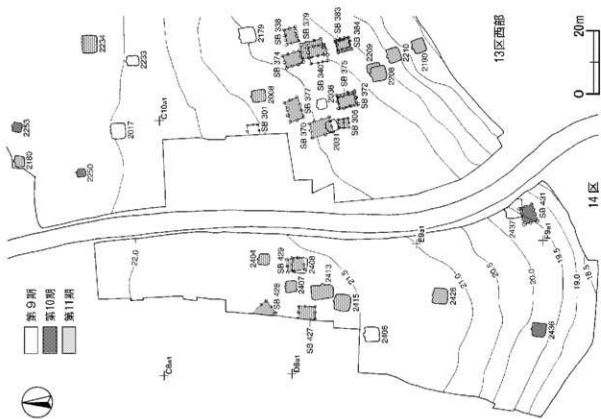
第790图 第14区集落变迁图(第1·4·5期)



第791图 第14区集落变迁图(第6期)



第792图 第14区集落变迁图(第7·8期)



第793图 第14区集落变迁图(第9-11期)

前期とはほぼ同地域であることから 前代からの系譜を引く集団が引き続き居住していたものと考えられる。遺跡中央部では、6世紀後葉の第5期以降、余剰生産物の収納の場と考えられる掘立柱建物跡が確認されるようになるが、遺跡北部では、古墳時代を通じて掘立柱建物跡は確認されていない。

奈良時代（第793図）

奈良時代の第9期になると、それまで減少していた住居が再び増加し始め、当区では竪穴住居跡3軒が該当する。調査区中央の平坦部で2軒、南部の緩斜面部で1軒の住居跡が確認されているが、いずれも一定の距離を置いて分布し、集落としての明確なまとまりは認められない。2軒の竪穴住居跡が確認された調査区中央部では、第7期以降本期まで継続して住居跡が確認されており、律令制への過渡期においても、地縁・血縁的につながる集団が継続的に居住していたものと考えられる。また、遺跡中央部では、過去の調査から、律令制の開始とともに集落の再編が行われ、各遺構は真北を主軸方向とすることが指摘されており、当区でも同様の傾向が認められる。隣接する第13区では、主軸方向が北西に振れる竪穴住居跡が大半を占めていることから、別系譜の集団であったとも考えられる。北部全体では、竪穴住居跡10軒、掘立柱建物跡3棟が確認されており、遺跡北部において初めて掘立柱建物跡が出現する時期でもある。

続く第10・11期は、住居跡、掘立柱建物跡ともに急激に増加し、集落の拡大が顕著な時期である。新たに南側の緩斜面部に住居群が出現し、多数の掘立柱建物跡も確認され、北部全域に遺構の広がりが見られるようになる。当区では、第10・11期ともに、竪穴住居跡3軒が該当する。また、出土遺物が少量であるため詳細な時期は明らかでないが、奈良時代を通して4棟の掘立柱建物跡も確認されている。第13区南東部の谷津沿いでは、大形住居跡とともに6棟の掘立柱建物跡が確認されており、既報告済みの『第264集』では、「谷津に沿って掘立柱建物群が並ぶ様相からは、東方を流れる東谷田川を利用した水運との関連を容易に想起することが可能である。」¹¹⁾としているが、当区南部の谷津沿いから検出された掘立柱建物跡は1棟だけであり、水運を意識した居住体系は西側までは及んでいなかったと考えられる。

平安時代（第794図）

当区で確認された平安時代の遺構は、9世紀代の竪穴住居跡3軒、土坑1基だけであり、10世紀前半の第15期以降、いずれの遺構も確認されていない。住居跡はいずれも中央部に位置し、南緩斜面部からは姿を消している。第13区において、9世紀前葉の第12期は、集落としては繁栄期であるが中心が東へと移っていく時期であり、続く第13・14期は、集落の衰退期であると同時に集落が東へと移動する時期と捉えられている。当区の住居跡が少数であることから、集落が東へ移動していった状況がうかがえる。

注目される遺構としては、円形の大形で底面に段を有する第3412号土坑が確認されている。当区南部の緩斜面肩部に位置しており、9世紀代の遺物が出土している。同様の形態をもつ遺構は、茨城県南部、千葉県北部、栃木県中央部にかけて検出されており、特に官衙関連遺跡からの検出例が多い。当遺跡においては過去に10基が報告されている。時期は、いずれの土坑も奈良時代から平安時代であり、台地縁辺部に位置している。このような円形で有段式の土坑を氷室として、有力者層の主権を饗宴に氷を供するための施設の一部とする説もあるが、本遺構の周辺から官衙的な遺構は検出されていない。過去の調査においては、遺跡中央部から須臾器大甕が多数の供膳具とともに出土している例や、「酒」と書かれた墨書土器の存在から、饗宴を主催することのできる有力者層の存在が想定される。

遺跡中央部では、11世紀前半の第17期においても90軒以上の竪穴住居跡が確認されており、11世紀後半

(4) 第16区

第16区は当遺跡の南西部にあたり、既に報告されている第1～11区の南西側、第12区の西側に位置している。当区の地形は、東・南・西側の三方を谷津に囲まれた舌状台地を呈し、台地上の北東部が標高23.0mの最高所となっている。中央部にかけては平坦面が広がり、標高22.0～22.5m付近が傾斜変換点で西側へは緩やかに傾斜し、南側は急な傾斜となっている。竪穴住居跡や竪立柱建物跡の多くは、北東部から中央部にかけて標高22.5～23.0mの台地上に集中し、一部は台地の縁辺部や斜面部にも展開している。

そこで、これまでに報告された調査成果を考慮しながら、当区の様相について概観する。なお中世以降については、別項で述べる。

古墳時代（第795・796図）

第1期は、当遺跡に集落が出現する時期であるが、当区で遺構は確認されていない。

第2期は5世紀代にあたり、当区では竪穴住居跡5軒確認されている。これまでの調査では、東谷田川沿いの台地縁辺部に小規模な集落が確認されているが、時期は5世紀前半を中心としており、集落の廃絶後は時期的な空白が想定されている。今回、当区で検出された住居跡の時期は、5世紀中葉から後葉に位置付けられ、当遺跡の空白期を埋める資料といえる。したがって、集落の形成には時期差が認められることから、東谷田川沿いに点在していた集団の一部が、当区周辺へ移住したと想定される。5世紀中葉は、当区中央部の台地縁辺部に第2638号住居跡が位置している。一辺7mを超える大形住居で、周辺には住居跡が確認されておらず、単独での存在と考えられる。南東コーナー部には径100cmほどの貯蔵穴があり、炉は3か所、北部に位置する炉1・炉2は作り替えが行われている。出土遺物は土師器環・埴・甌、刀子があり、土器類はほぼ完形の状態で壁際に集中していることから、壁際が収納空間として利用されていたと考えられる。5世紀後葉には、東部の台地上に一辺7m前後と推定される大形の第2689号住居跡と一辺4.2～5.5mの中形住居跡3軒がまとまっており、小集団を形成している。第2689号住居跡は、北西コーナー部に長径145cmほどの貯蔵穴や、西壁側に間仕切り溝2条を有している。出土遺物は土師器環・埴のほか、白玉や双孔円板などの石製模造品が出土している。他の遺構との重複が激しいため内容は明らかではないが、規模や形状から集落の中心的な住居であったと考えられる。

6世紀前葉から中葉の第3・4期は空白期であり、当区で再び集落が確認されるようになるのは6世紀後葉の第5期である。当遺跡では、第4期に大形住居を中心に集団として結合の強化が見られ、第5期にはその単位集団が増加し、集団ごとに住居の主軸方向には統制がとられるようになる。また第5期は、当遺跡を中心とする周辺一帯が大規模に開発される時期でもあり、当遺跡は繁栄期を迎え、当区でも住居跡数は一挙に増加している。当区では竪穴住居跡17軒が該当し、台地上から斜面部まで集落の広がりが見られるようになり、調査区東部や中央部に10軒、南部の台地縁辺部や斜面部にも7軒が確認されている。当区東部には一辺7mを超える第2681号住居跡が位置し、その周辺を取り囲むように複数の中形住居が配置されている。いずれも主軸方向はおおむね北西方向を向いており、同一の集団を構成していたと考えられる。第2681号住居跡は、東および西壁側に3条ずつ間仕切り溝を有し、出土遺物は竈の周辺を中心に土師器環・埴・甌、辻金具などが遺棄されていたほか、須恵器甕、鎌先なども廃絶後に投棄されている。また、南部の台地縁辺部から斜面部に位置する7軒の住居跡は、一辺4～6mの中形住居であり、主軸方向はおおむね北西を向いていることから、前述の集団に属する集団と考えられる。

第6期は住居跡数がさらに増加し、継続して繁栄期の様相を示している。竪穴住居跡は23軒で、分布の

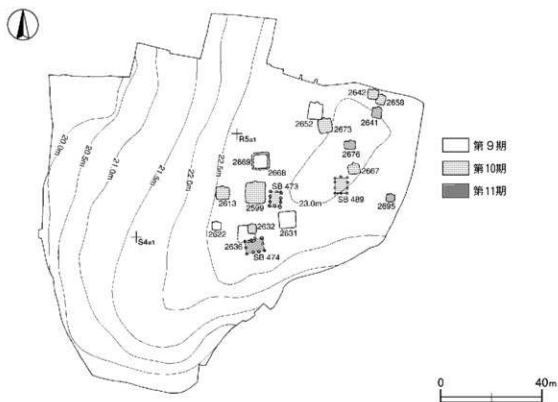
中心は台地上に移動している。北・東部に17軒、南部には6軒が確認されている。一辺6mを超える住居跡は9軒を数え、大形住居の増加が見られ、これら3か所には大形住居を中心とした集団が形成されている。北部の集団は、第2657号住居跡と3軒の中形住居で構成され、第2657号住居跡の竈の灰層中からは、土玉・小玉・菅玉など10点が出土している。東部の集団は、第2666号住居跡を中心に数多くの住居跡がまとまっており、他の集団と比べて各住居の鉄器や紡錘車、玉類の保有率が高く、集落内における優位性が認められる。中心となる第2666号住居跡は、東および西壁側に間仕切り溝がそれぞれ3条ずつ検出されており、主柱穴が6か所、支柱穴が3か所と計9本の柱を有することから堅固な上屋構造であったと推定される。出土遺物は土師器環・鉢・甕などのほか、北東・南西コーナー部から土玉や球状土錘などの土製品20点が出土している。住居の規模や構造や集団の優位性から、前期の中心的な住居であった第2681号住居跡とのつながりが想定される。また、第2666号住居跡から南西20mほどに位置する第2698号住居跡は、北西・北東コーナー部を中心に土師器環が多量に出土している。口縁部および底部から個体を算出すると47個体を数え、出土状況は住居の廃絶後に投げ込まれた様相を示している。このように一括投棄された玉類や甕の出土例は、集落の廃絶に伴う廃棄行動として注目される。

7世紀中葉にあたる第7期は、当遺跡が一時的に衰退する時期である。当区でも竪穴住居跡は6軒に減少し、北東部から東部の台地上に2軒、南部から南東部の斜面部に4軒が確認されているだけである。東部に位置する第2677号住居跡は一辺8m、南東部に位置する第2634号住居跡は一辺6.5mといずれも大形で第2662・2677号住居跡、第2624・2634号住居跡は、それぞれ近接して主軸方向もおおむね一致しており、同一の集団と想定される。なお、当区では第7期以降、9世紀後葉の第14期まで、当遺跡内でも最大級(上位3位以内)の大形住居が継続して営まれている。当期の住居数の減少にみられる集落の再編以降、当遺跡の集落形成のなかで、一定の立場を保持し続けた集団の居住域と捉えられる。

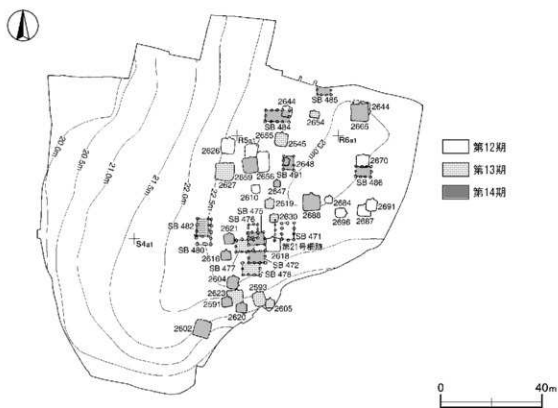
第8期は、竪穴住居跡6軒が該当する。北部から東部の台地上に6軒が存在し、一つのまとまりを構成し、斜面部に住居跡は見られなくなる。第2693号住居跡を除く5軒の主軸方向は、おおむね北西方向を向いている。北部に位置する第2693号住居跡は、長軸5.5m、短軸4.0mの長方形で、各期を通して当区唯一の西竈の住居である。南壁際には多量の粘土塊が堆積しており、P3の覆土上層には、焼土や炭化材が堆積している。出土遺物は土師器環・甕・小形甕、須恵器環、石製紡錘車、鉄滓などである。住居の形状や多量の粘土塊、P3の堆積状況から何らかの手工業生産に関わる工房の可能性が考えられる。第2640・2649号住居跡は、一辺7mを超える大形住居であり、その他4軒は一辺4～6mの中形住居である。出土遺物は土器類のほか、3軒の住居跡から鎌1点、鏃2点、不明鉄製品4点が出土しており、集落内での鉄製品の保有率が高くなる傾向が見られる。また、鉄製品については、それまで大形住居を中心に出土していたが、当期ではいずれも中形住居から出土している。鉄製品の普及に起因するものか、主屋と倉庫といった機能差によるものかは即断できないが、鉄製品の管理体制には変化が認められる。

奈良時代(第797図)

8世紀前葉にあたる第9期は、遺跡中央部に一辺70mの方形区画溝が開削され、さらに、遺跡内の住居跡は形態が均質化し、主軸方向が真北方向を指すようになる。このような様相は、律令体制による居住域の統制が図られた結果と考えられる。当区では、竪穴住居跡5軒が該当し、それらは北部・中央部の台地上に10～20mと一定の間隔を保って配列している。北部に位置する第2652号住居跡は、長軸6.5m、短軸5.5mの長方形で、北東コーナー部に貯蔵穴を有している。主柱穴は6か所で、堅固な構造の住居である。



第797图 第16区集落变迁图(第9-11期)



第798图 第16区集落变迁图(第12-14期)

中央部に位置する第2631号住居跡は、一辺6.5mほどの大形住居で、主柱穴が4か所、支柱穴が2か所と計6本の柱を有し、第2652号住居跡と同様に堅固な構造である。2軒とも規模や形状、出土遺物から中心的な住居であったと想定され、出土遺物は土師器・環・甕、須恵器蓋などのほか、石製勾玉・双孔円板、刀子・鏃などが出土している。また、第2631号住居跡の出現以後、中央部には継続的に大形住居が形成されていることから、当期は、中心的な住居が東部から中央部へ移る過渡期に位置付けられる。

第10期は、遺跡中央部に整然と配置された掘立柱建物群が出現し、集落域を取り囲むように大溝が巡らされている。当区は、大溝の区画からは外れるものの、北東部から中央部の台地上に竪穴住居跡7軒と掘立柱建物跡2棟が確認されている。住居跡は、いずれも主軸が真北方向を向いており、前期に続いて主軸方向は統制がとられている。中央部に位置する第2599号住居跡は一辺8.5mで、遺跡内でも当期の最大規模の住居である。出土遺物は土師器・環や須恵器蓋のほか、土玉、石製勾玉・双孔円板、刀子・鏃・紡錘車・火打具などが出土している。本住居跡の東側には第473号掘立柱建物跡、さらにその東側20mほどの位置に第489号掘立柱建物跡が位置している。2棟は桁行3間×梁行2間でほぼ同規模の側柱建物であり、主軸方向もおおむね一致していることから倉庫としての機能が想定される。その他の住居跡は、一辺4～5mに均質化しており、小形化の傾向を示している。また、6軒の住居跡から刀子・鏃・紡錘車・火打具が出土しており、鉄製品の保有率が高いのも当期の特徴に挙げられる。

第11期には、以前として遺跡の中央部には掘立柱建物群が建ち並び、大溝による区画も踏襲されている。当区は、竪穴住居跡4軒、掘立柱建物跡1棟が確認され、住居跡数はやや減少して、規模の小形化が進んでいる。北東部から中央部の台地上には、一辺6.5mほどの第2668号住居跡を中心に、一辺4～4.5mの中形住居や3m以下の小形住居が一定の間隔で点在しており、主軸方向は4軒とも真北方向を向いている。第2668号住居跡は平安時代の住居と重複しており、出土遺物も少ないため全容は明らかでない。

平安時代（第798・799図）

9世紀前半の第12期になると、当区では増加傾向に転じ、竪穴住居跡11軒、掘立柱建物跡3棟、柵跡1列が確認されている。住居跡はいずれも台地上に位置し、中央部から南部に6軒、東部に5軒の2集団に分けられる。中央部に位置する第2656号住居跡は、一辺7.5mほどの当期最大級の住居跡である。前述したように、第9期から同じ場所での建て替えが行われており、集落の中心は調査区中央部に移ってから代々住み替えが行われ、中心部は世襲的に踏襲されたと考えられる。南部には、東から第471・476・480号掘立柱建物跡が同じ桁行方向で並んでいる。第471・480号掘立柱建物跡は柱穴の規模が大きく、柱間寸法が広いことから居宅の機能が想定され、小規模な第476号掘立柱建物跡は倉庫と考えられる。また、第471号掘立柱建物跡の西側に並行する第21号柵跡は、本建物跡の西側を遮断する簡易的な塼と考えられる。第471・476・480号掘立柱建物跡は、大形住居である第2618号住居跡から住み替えのために建設されたと考えられる。東部では、第2696号住居跡が東廬である以外、おおむね北方向を向いており、主軸方向はほぼ一致している。出土遺物は、大形住居から双孔円板や石製管玉、中形住居を中心に刀子・鏃・鎌・手斧・緑金具・釘などの鉄製品が出土しており、鉄製品の保有率は高い傾向を示している。

第13期は、竪穴住居跡9軒と掘立柱建物跡3棟が該当する。住居跡は、北東部から中央部の台地上に6軒、南部の斜面部に3軒が位置し、弧を描くように点在しており、再び斜面部にも住居が形成されるようになる。当期以降、主軸方向の振れ幅は大きくなり、また一辺3.5mほどの小形住居跡が4軒を数え、さらに小形化する傾向が認められる。中央部の台地縁辺部に位置する第2627号住居跡は、一辺7.0mほどの

当期最大の住居跡である。出土遺物は、土師器高台付椀、須恵器杯・高台付杯・蓋・襖のほかには灰釉陶器瓶も見られる。また、北東部に位置する第2664号住居跡の竈からは「田」と刻書された土師器高台付皿と須恵器円面鏡片が出土し、いずれも集団の中心的な住居と考えられ、有力者層の存在がうかがわれる。竪立柱建物跡は、南部の台地縁辺部に3棟が集中しており、第477・478・482号竪立柱建物跡が該当する。規模や形状はほぼ同一であり、配置からは倉庫としての機能が想定され、倉庫群を形成していたと考えられる。

第14期には、住居跡数はわずかに増加し、竪穴住居跡11軒と竪立柱建物跡5棟が確認されている。住居跡は規模がさらに小形化し、一辺4m以下のものが半数を占めるようになる。鋤先・鎌・刀子などの鉄製品や砥石は小形住居跡を中心に出土しており、小形住居は倉庫的な機能も有していたと考えられる。東部から中央部の台地上には、一辺7mほどの第2665・2688号住居跡と、一辺5mほどの第2659号住居跡が位置し、互いに20～30mの間隔を空け、それぞれ単独で存在している。その間には倉庫と想定される竪立柱建物跡4棟が点在している。第2665号住居跡は一辺7mほどの住居跡で、前期の第2664号住居跡と同位置にあり、同住居跡からの建て替えが想定される。竈は作り替えが行われており、床面には4面の貼床が認められ、短期間に4回以上の貼り替えが行われている。遺物は土師器杯・高台付椀・高台付皿などのほか、灰釉陶器椀や「空」、「口」、「石□□」、「土」と書かれた墨書土器も出土しており、前期から引き続き有力者の居宅として機能したと考えられる。第2659号住居跡からは、灰釉陶器椀が出土し、中央部の集団の中心的な住居と考えられる。また、南部の斜面部には6軒がまとまっており、一つの集団を形成している。第2616・2621号住居跡は、一辺3.5mほどの小形住居跡であり、東側には桁行方向と同じにする第472・475号竪立柱建物跡が位置している。建物は、規模や形状からいずれも倉庫としての機能が想定される。

10世紀前半の第15期になると住居跡数は急激に減少し、以後当区では、集落が衰退していく傾向が認められる。竪穴住居跡4軒と竪立柱建物跡1棟が確認されており、住居跡はいずれも一辺4m台の中形住居で、主軸方向はおおむね北方向である。北部の2軒は30mほどの間隔をあけて点在し、南部の台地縁辺部では2軒が隣接している。出土遺物は土師器が主体となり、杯・高台付椀・皿などが出土している。南部の台地縁辺部に位置する第2615号住居跡からは「高」と刻書された土製紡錘車出土し、北東部の第2672号住居跡からは、「石」と墨書された須恵器高台付皿が出土している。第2672号住居跡は、第13期の第2664号住居跡から継続して同位置での建て替えが行われており、いずれも刻書土器や墨書土器が出土していることから、血縁的なつながりをもつ有力者層の居宅と想定される。また、調査区中央部の第490号竪立柱建物跡は、規模や形状から倉庫と考えられる。

第16期は竪穴住居跡2軒が該当し、竪立柱建物跡は確認されていない。住居跡は一辺3m台の小形住居で、中央部に約20mほどの間隔で点在しており、いずれも東竈である。出土遺物は土師器杯・高台付椀・小皿・襖などで、当期から小皿が器種組成に加わるようになる。また、鎌・鎌・刀子の鉄製品に加え、各住居跡から鉄斧が出土しており、鉄の精錬から鉄製品の製造までの工程が集落内で行われていた可能性がある。

11世紀前半の第17期には、調査区南側の台地縁辺部に4軒のまとまりが認められる。第2633号住居跡が一辺5.5mを超える規模で、当期では大形の住居であるが、後世の堀や土坑に掘り込まれているため全容は不明である。その他の住居跡は一辺3m台の小形住居で、いずれも東竈である。出土遺物は、前期と同様に土師器杯・高台付椀・小皿・襖などである。

第18期は、当区における集落の終末期であり、当区では住居跡が確認されておらず、集落は一早く終焉を迎えている。以後、中世段階まで遺構形成が認められない空白地となっている。

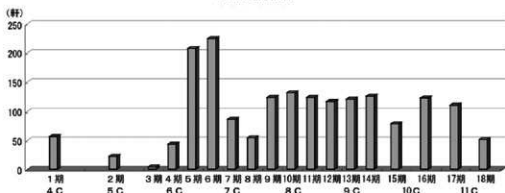
(2) 竪穴住居跡数の推移

次に、時期ごとの集落の盛衰について概観したい。当遺跡において最初に住居跡が確認されるのは4世紀の第1期で、小規模な集団の出現期と捉えられる。6世紀前葉の第3期には4軒が確認されるが、第4期以降再び増加の傾向を示し、6世紀後葉から7世紀前葉の第5・6期に古墳時代で最大の繁栄期を迎える。当期は、住居跡の分布が遺跡全体に及ぶようになることや鉄製農具の出土状況からも、当遺跡一帯が大規模に開発され、人口が急増した時期であったと考えられる。当遺跡の南側に位置する島名前野東遺跡や島名八幡前遺跡と同様に、7世紀中葉から後葉の第7・8期になると住居跡数は急減する。しかし、この時期においても50軒以上の住居跡が確認されており、律令制への過渡期においても、当地では地縁・血縁的につながる集団が継続的に居住していたことが推測できる。

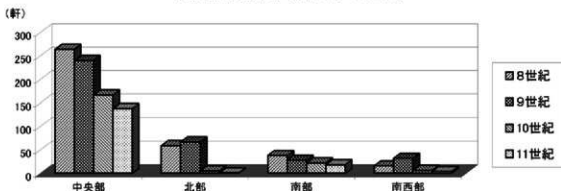
奈良時代の第9期になると住居跡数は再び増加の傾向を示し、8世紀中葉の第9期以降平安時代の第14期まで、116～131軒と、各期ともほぼ同数の住居跡が検出されている。このことから人口を支えるための生活基盤の安定がうかがえ、鉄製農具の普及とともに、農業の盛行やそれに伴う経済力の充実に計られたと考えられる。律令期における当地は河内郡島名郷に比定されており、確認された住居跡数の多さからも、中心的な集落であったことが裏付けられる。

その後、10世紀前半の第15期以降減少傾向を示すものの、11世紀まで継続して集落が営まれていた様子がうかがえる。そして、11世紀後半の第18期を最後に竪穴住居跡は確認されなくなる。竪穴住居から平地式住居へと居住形態が変化した時期とも考えられるが、生活痕は認められず、中世への連続性は確認できない。なお、住居跡数の減少は遺跡内で一様ではなく、遺跡北部、南西部では、遺跡中央部よりも約1世紀早い10世紀後半に、竪穴住居跡はほぼ姿を消している。

時期別住居跡数



地域別住居跡数の推移 (奈良時代・平安時代)



(3) 住居規模の変化

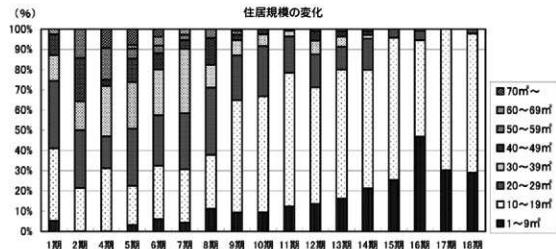
次に、時期を追って竪穴住居跡の規模の変化について確認したい。当遺跡で確認された竪穴住居跡の平面形はいずれも方形または長方形である。なお、第3期については、確認住居跡数が4軒であるため、グラフからは除外している。

古墳時代前・中期ともに、中心となる規模は10～29㎡である。4世紀代の第1期は、10～19㎡が36%、20～29㎡が33%であるのに対して、5世紀代の第2期には、10～19㎡が21%、20～29㎡が29%の他、第1期には13%であった40㎡以上の割合も35%となり、住居跡が大形化する傾向が見られる。

古墳時代後期になるとさらに大形化が進行する。6世紀中葉の第4期は、前期までと同様に10～29㎡の住居跡が半数近くを占めているが、30～39㎡の割合が25%となり、70㎡を超える住居跡も確認されるようになる。当遺跡において最も多くの住居跡が確認される第5・6期は、住居跡が最も大形化する時期でもあり、100㎡を超える大形の住居跡も確認されている。また、古墳時代後期を通じて各規模の割合に大きな差違が認められないことから、血縁関係を同一とする集団が継続的に居住していたことがうかがえる。その後、住居跡数の減少とともに小形化の傾向を見せ、第7期以降になると70㎡以上の住居跡は確認されていない。

関東地方の竪穴住居跡について、南関東（東京都・神奈川県・千葉県）と、北関東（茨城県・埼玉県・栃木県・群馬県）を対比させて分析した宮本長二郎氏は、『平均規模は、南関東では前期27.8㎡、中期28.2㎡、後期32.1㎡と時代の下降にしたがって増大しているが、北関東では前期25.8㎡、中期31.1㎡、後期22.2㎡と中期に最も大きく、後期には南関東とは反対に小型化する。』また、『30㎡以上の中・大規模と比較すると、南関東では前期29.7%、中期49.6%、後期44.6%、北関東では前期30.5%、中期43.0%、後期26.8%で、前・中期には両地方で同様の傾向を示すが、後期に大きな差を生じている。』²⁰としている。同様の手法で当遺跡を分析すると、平均規模は、前期24.6㎡、中期30.3㎡、後期30.7㎡、30㎡以上の割合は、前期25.6%、中期50.0%、後期43.9%となり、いずれの値も南関東の統計値と近似している点が興味深い。

奈良時代の第9期になると、10～19㎡の割合が半数以上を占めるようになる。50㎡以上の大形住居跡も3軒が確認されるだけとなり、住居の小形化は急速に進行する。奈良時代を通じて同様の傾向が見られ、9世紀中葉から後葉の第10・11期では、50㎡以上の住居跡は確認されていない。この急激な変化からは、律令制の確立に伴う社会体制の変化や集落の再構築の様子がうかがえる。



平安時代においても、奈良時代と同様に10～19mの住居が中心であるが、小形化はさらに進行し、9m以下の割合が増加する。10世紀後半の第16期には、9m以下の割合が47%に達し、10世紀以降に確認された30m以上の住居跡は1軒だけである。また、奈良時代から平安時代にかけて、住居規模は均一化の様相を呈するようになる。そのために、集落内において支配的立場にあった住居の特定や身分的差違については、遺構の面から掌握することが難しい。

(4) 検出住居跡数と標高

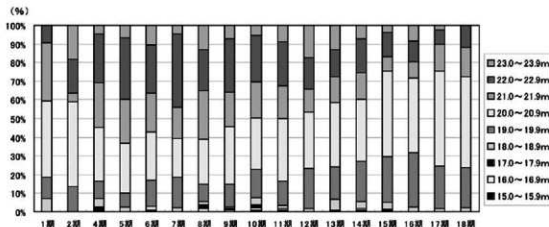
当遺跡は東谷田川に面した台地上の縁辺部に位置しており、台地上の標高は20.0～23.0mである。また、遺跡の中央部と北部の間には谷津が入り込み、遺跡北部・南部・西部の南側、中央部の東側は緩斜面となっている。住居跡は、標高15.5～23.4mの範囲で確認されており、各期ともに20.0～22.9mに集中するが、時期的な差違も認められる。そこで、立地する標高の違いについて、集落の分布と関連させながら確認したい。なお、第3期については、確認住居跡数が4軒であるため、グラフからは除外している。

古墳時代前期の第1期は、全体の72.2%が標高20.0～21.9mに位置しており、中でも40.7%が20.0～20.9mに集中している。続く第2期においても20.0～20.9mの割合が45.5%に達し、前期と同様の傾向を示しているが、22.0m以上の割合が増加している。両期とも台地の東縁辺部からの検出例が多い。

古墳時代後期は、住居数が急増して台地上の全域で集落が確認されるようになる時期である。古墳時代前・中期と比べて、より標高が高い位置からの検出例が増加していることから、大規模な開発と、それに伴う居住域の拡大がうかがえる。

奈良時代・平安時代を通して住居跡の分布は台地上の全域に及んでいるが、古墳時代と比べて、標高が低い位置からの検出例が増加してくる。時代が下るにつれて低い位置の割合が増加しており、これは、遺跡北部や中央部において、標高が高い北西側から標高が低い東側へと集落が移動している様子と一致している。また、資料からは、10世紀前半の第15期以降に21.0m以上の割合が急激に減少し、20.0～20.9mの割合が半数近くを占めるようになることが読みとれる。この時期は、遺跡北部・西部において住居数が急激に減少する時期と一致しており、確認された住居跡の多くが遺跡中央部の南東域に集中していることとの関連が考えられる。なお、17.0m以下の住居のほとんどは、遺跡最南部に位置する第12区の南側で確認されている。

立地標高の変化



以上、竪穴住居跡の推移、住居規模の変化、検出住居跡数と標高の3つの観点から、当遺跡の竪穴住居について検証を試みた。使用した資料は竪穴住居跡だけであり、掘立柱建物跡等の他の遺構についての確認がなされていないため、遺跡全体の性格を語るには不十分であるが、今回の資料分析の結果から考えられる特徴は以下の通りである。

- ・古墳時代前期の4世紀以降に竪穴住居が確認されるようになるが、古墳時代前・中期の住居跡数は調査面積に対して少数であり、小規模な集団が出現し小移動を繰り返していた時期と考えられる。
- ・古墳時代後期の第5・6期に住居跡数が急増する。住居の分布も遺跡全体に及びようになることから、大規模な開発と人口増加に伴う集落の拡大が考えられる。また、住居規模もこの時期が最大となる。
- ・第7・8期になると住居跡数が減少傾向を示すが、最減期においても50軒ほどが確認されており、律令期への連続性が認められる。
- ・奈良時代に入ると住居跡数が増加し、11世紀まで継続して集落が営まれている。ただし、集落の衰退期は遺跡全体で一様ではなく、11世紀前半まではほぼ同数の住居跡が確認され、11世紀後半に急激に減少する中央部に対して、北部および南西部では、10世紀後半以降、竪穴住居跡はほとんど検出されていない。
- ・律令期に入ると住居規模は急激に小形化し、また、均一化してくる。このことから当遺跡が律令制に組み込まれていった様子がうかがえる。

表65 時期別住居規模一覧表

面積	1期	2期	3期	4期	5期	6期	7期	8期	9期	10期	11期	12期	13期	14期	15期	16期	17期	18期	総計(軒)
1-9㎡	2				5	11	3	5	10	11	13	14	17	22	18	51	30	13	225
10-19㎡	14	3	1	10	32	49	19	12	60	67	70	60	67	62	50	52	68	31	727
20-29㎡	13	4	2	5	46	46	20	15	24	29	19	17	12	16	3	5			277
30-39㎡	5	2		8	38	42	23	5	8	7	3	7	5	2		1			156
40-49㎡	4	3		1	19	15	3	6	3	3	1	5	3	2					68
50-59㎡		2		5	8	7	2	2	2			1		1					30
60-69㎡	1				3	8	2		1				1						16
70-79㎡				2	5	2													9
80-89㎡				1	5	2													8
90-99㎡					2	2													4
100-109㎡					1	1													2
平均面積(㎡)	24.6	30.3	21.9	33.3	34.1	30.2	27.2	25.1	19.5	17.9	15.8	18.2	16.8	15.6	12.2	11.1	11.8	11.6	152(軒)

表66 時期別標高一覧表

標高	1期	2期	3期	4期	5期	6期	7期	8期	9期	10期	11期	12期	13期	14期	15期	16期	17期	18期	総計(軒)
15.5-15.9m										1	1		1	1	1				5
16.0-16.4m									1	1				1					3
16.5-16.9m								1		1	1								3
17.0-17.4m				1		2		1	1	2									7
17.5-17.9m																			0
18.0-18.4m	2		1	1	1	2	2		1	3		1	6	2	1	1			24
18.5-18.9m	2			1	4	3		1		2	2	1	1	3	2	2	2	1	27
19.0-19.4m	3			1	5	8	6	2	4	12	6	13	6	7	5	14	8	6	106
19.5-19.9m	3	3		3	11	22	8	3	11	8	10	12	15	20	14	20	17	5	185
20.0-20.4m	17	6	1	9	32	27	12	8	23	22	26	23	22	22	24	26	36	19	355
20.5-20.9m	5	4	1	3	24	31	6	5	15	14	15	12	19	20	11	21	20	6	232
21.0-21.4m	7	1		7	26	26	10	4	16	14	13	8	11	9	5	8	12	2	179
21.5-21.9m	10		1	3	22	19	4	10	6	11	8	6	6	9	1	2	4	6	128
22.0-22.4m	1	3		4	31	30	13	9	20	25	18	12	11	13	5	8	4	4	211
22.5-22.9m	4	1		7	38	28	21	3	15	8	11	8	6	10	5	5	4	2	176
23.0-23.4m	4			2	14	23	4	7	9	7	11	20	16	9	3	10	3		142
総計(軒)	54	22	4	42	208	221	86	54	122	131	122	116	120	126	77	117	110	51	1782(軒)

4 中・近世の遺構と遺物

前述したように、第9・16区では中世・近世の遺構や遺物が数多く検出されている。ここでは、その遺構や遺物について若干の考察を加え、当遺跡の新たな性格が表出できればと考える。

(1) 梵鐘鑄造遺構と鑄物師

第9区からは、梵鐘鑄造に関わる遺構が検出された。ここでは、検出状況について検討し、さらに京都府京都大学構内遺跡³¹⁾・埼玉県金井8遺跡³²⁾・神奈川県宮ヶ瀬遺跡群³³⁾で検出されている梵鐘鑄造土坑等と比較して、当遺跡における遺構の特徴や周辺施設との比較検討を加えてみたい。また、出土遺物や本県における鑄物師の集成から当遺跡の鑄物師についても追りたい。

ア 第681号土坑について

鳥名熊の山遺跡第9区で検出された第681号土坑は、平成9年度にその北半分が調査され、梵鐘の竜頭、鱗口、灯籠の蓮華座の鑄型片が出土した。その後、平成13年の調査において遺構全体の様相が明らかになった。遺構は、西に緩やかに傾斜している標高20.0mほどの緩斜面部に位置しており、長軸2.15m、短軸2.05mの隅丸方形で、地山を35～40cm掘り込んでいる。底面には、中央部の東西方向に幅24cm、長さ129cm、深さ10cmの掘り込みが検出され、焼土や炭化物も確認された。遺物は、梵鐘の乳、鱗口、燈籠の蓮華座等の鑄型片の他、溶解炉の送風口部片や溶解炉壁片など約400点が確認された。

この遺構を、京都大学構内遺跡検出の梵鐘鑄造土坑や奈良県巨勢寺³⁴⁾検出の梵鐘鑄造土坑と比較すると、規模や出土遺物などから本遺構で梵鐘を鑄造した可能性が高い。既刊の『166集』³⁵⁾では廃棄土坑と報告されているが、今回の調査で梵鐘鑄造土坑であると断定できる。

イ 鑄造遺跡の様相

近年、梵鐘の鑄造遺跡の検出例も多くなり、その様相も明らかになりつつある。現在、仏具生産の鑄造土坑は、全国で50数基³⁶⁾が報告されている(表67)。

古代の鑄造遺跡では、7世紀末から8世紀初頭に操業した滋賀県木原遺跡が現在確認されている中で最古の遺跡である。鑄型の検出例としては奈良県田中廃寺があり、時期は7世紀後半とされている。また、現存する最古の梵鐘は、京都府妙心寺と福岡県大宰府観世音寺のもので、7世紀後半には梵鐘の製作技術が日本に確立したものと考えられ、8世紀以降、各地に鑄造遺跡が見られるようになる。

中世の遺跡としては、長野県寺平遺跡、福岡県銚子の浦遺跡、京都大学構内遺跡などで検出されており、江戸時代の遺跡としては、宮ヶ瀬遺跡群が知られている。

ウ 梵鐘鑄造遺構の構造について(第800～802図)

ここでは、他の遺跡の鑄造土坑と本跡の状況を比較し、本跡における遺構の特徴について述べる。

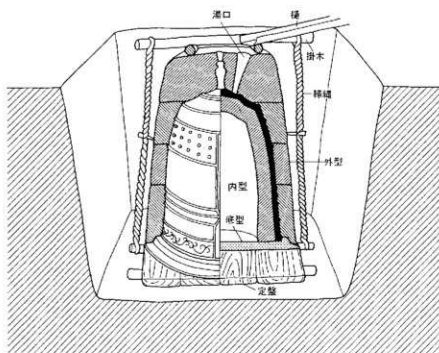
まず、梵鐘の鑄造状況については第800図³⁷⁾を参考にされたい。内型と外型を設置する粘土魂を「底型」と呼び、この粘土魂を載せるための台が「定盤」である。京都大学構内遺跡AP22区で検出された第257号土坑の底面からは、梵鐘鑄造のための円形の「底型」が検出されている。表面は酸化焼成されて赤褐色を呈している。底型の構造には多少の違いが認められ、京都大学構内遺跡の土坑や兵庫県多可寺跡遺跡³⁸⁾の例では、底形の中央部には詰まっているが、木原遺跡の例では円形の空間となっている。

また、寺原遺跡の例でも円形の空間が見られ、その部分には砂が詰まっており、この穴は空気抜きの穴であったと考えられている。

この他、巨勢寺遺跡からは、底部に木板を4枚敷き並べた定盤が検出されている。また、岩手県白山社遺跡³¹⁾でも、定盤の板3枚が残って検出されている。さらに「定盤」の上に「内型」・「外型」が残存していた例としては、多可寺跡遺跡、大分県豊後国分寺³²⁾、福岡県鴻臚館跡³³⁾などがある。

このように、低部に明確な痕跡を残している遺構もあり、京都大学構内遺跡AP22区の土坑SK245では底面に溝が平行に2条掘り込まれ、その両端に円形の掘り込みが認められた例もある。この溝や掘り込みは、湯入れ時に溶湯やガスの圧力によって鑄型が動くのを防ぐためのもので、木材を定盤の下部と最上の鑄型の上部に組んで、その両端に縄を掛け、縄を張ることによって生まれる張力を利用して鑄型を固定させる仕掛けである。この掛木を据える為の溝や掘り込みと考えられている。

特徴的な4つの事例を紹介する。一例目は京都大学構内遺跡AP22区の土坑SK245で、平行に掛けた掛木に2本の短い棒や釘を用いて固定する「お神奥型」。二例目は兵庫県牧野・町西遺跡³⁴⁾の平行に掛けた掛木に1本の短い棒を固定した痕跡のある「工の字型」。三例目は岐阜県野口廃寺³⁵⁾の十字に2本の掛木を組んだ痕跡が確認されている「十字型」。四例目は、鳥名熊の山遺跡の幅広の溝を一方に掘り込んだ「一字型」である。このように定盤・底型が鑄造当時の様相を留めるものや、溝の形状が異なるものなどが知られており、幅広の溝を一方に掘り込んだ本遺構の「一字型」は他に例が無い。この溝を使って鑄型をどのように固定したかは明らかでないが、鑄造土坑に土砂を詰め込んで、湯入れ時に鑄型がずれないようにしていた木瓜原遺跡の例などを考えれば、当遺跡でも同様に固定したと考えられる。



第800図 梵鐘の鑄造状況（「日本中世における鋼鉄の金属生産とその流通に関する研究」より）



京都・京都大学構内遺跡 AP22区 SK257



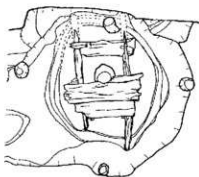
兵庫・多可寺跡



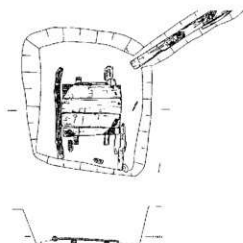
大分・豊後国分寺跡



奈良・巨勢寺



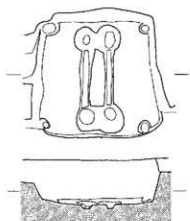
岩手・平泉白山社遺跡



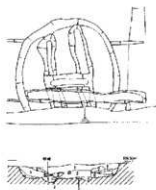
奈良・巨勢寺



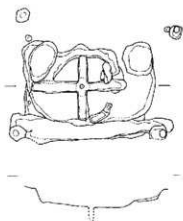
第801図 梵鐘鑄造土坑①(「日本中世における鋼鉄の金属生産とその流通に関する研究」より)



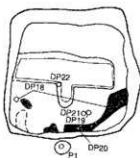
京都・京都市内遺跡 AP222区 SK245



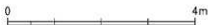
兵庫・牧野・町西遺跡



岐阜・野口廃寺



鳥名熊の山遺跡・第681号土坑



第802図 梵鐘鑄造土坑②(「日本中世における銅鉄の金属生産とその流通に関する研究」より)

表67 鑄造土坑遺跡一覧表

No.	遺跡名	年代	所在地	出土遺物	検出遺構	参考文献
1	真福寺遺跡	13世紀後半	大阪府南河内郡 箕原町栗山	銅鑄型・梵鐘 鑄型・浴解炉	鑄造土坑	大阪府教育委員会・大阪府文化財センター 「真福寺遺跡」1997年3月
2	枚方田中家銅物 工場跡	江戸時代	大阪府枚方市 枚方上之町	銅鑄型・梵鐘鑄 造型	梵鐘鑄造土坑	枚方市教育委員会「田中家銅物工場跡」『枚方市文化財調査報告』 36 2000年
3	徳大寺遺跡	古代	大阪府箕面市西生園 谷東・京木市橋久庄 二本松町	梵鐘鑄型	梵鐘鑄造土坑	廣瀬時智他「徳大寺遺跡」『大阪府文化財調査研究センター調査 報告書』1999年6月
4	京都大学教養部 構内 A P22区	9 - 10世紀	京都市左京区吉田二 本松町	梵鐘鑄型・浴 解型・浴解炉	梵鐘鑄造土坑	五十川伸夫・筒野博文「京都大学教養部構内 A P22区の発掘調査」 『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和57年度。1984年3月
5	京都大学医学部 構内 A N18区	13世紀前半	京都市左京区吉田近 畿町	梵鐘鑄型	浴解炉	五十川伸夫・梶原白河の鑄造工房—京都大学構内の鑄造に関する遺 跡—『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和60年度。1988年3月
6	広隆寺	9世紀後半 - 10世紀初	京都市左京区 太秦藤原町	梵鐘鑄型	梵鐘鑄造土坑	石屋政信「広隆寺跡」『京都府遺跡調査概報』第5冊2 1972年 7月
7	丹波国分寺跡	9世紀	亀岡市国分	梵鐘鑄型	梵鐘鑄造土坑	亀岡市教育委員会調査
8	東大寺戒壇院東 地区	8世紀中葉	奈良市鐘司町	梵鐘鑄型	大型鑄造土坑	奈良国立博物館考古学研究所附属博物館「大和を語る」(1990年発 掘調査速報第11回録)1991年 p.35
9	山田寺跡	鎌倉時代	奈良県桜井市山田	梵鐘鑄型	梵鐘鑄造土坑	奈良文化財研究所「大和山田寺跡」(『奈良文化財研究所学報』 63)2002年
10	田中庚寺跡	7世紀後半	奈良県橿原市田中町	梵鐘鑄造型		奈良国立博物館考古学研究所附属博物館「大和を語る」(1990年発 掘調査速報第11回録)1991年 p.27
11	巨勢寺跡	9 - 10世紀	奈良県御所市 大字古瀬		鑄造土坑	奈良県教育委員会「巨勢寺」(『奈良国立博物館考古学研究所調査 報告』87)2004年2月 p.p.35-36
12	飛鳥油遺跡	江戸時代	奈良県高市郡明日香 村大字飛鳥池	梵鐘鑄型	梵鐘鑄造土坑	奈良国立文化財研究所調査
13	川原寺寺城北周	7世紀末	奈良県高市郡 明日香村	鉄羽釜鑄型	鑄造土坑	奈良文化財研究所「川原寺寺城北周の調査」2004年3月

No.	遺跡名	年代	所在地	出土遺物	検出遺構	参考文献
14	天満1号墳	中世	和歌山県有田郡吉備町藤並	梵鐘跡遺構		吉備町教育委員会調査
15	長尾遺跡	9世紀	滋賀県大津市滋賀里町長尾	梵鐘銅型・沼解弁	梵鐘跡土坑	林博道「梵鐘を铸造した遺跡の調査」『月刊文化財』176号 1978年 林博道「長尾遺跡の梵鐘跡遺跡」『古代研究』27 1982
16	坂本八条遺跡	平安後期	滋賀県大津市坂本本町		梵鐘跡遺跡	大津市教育委員会「滋賀県六ヶ地区遺跡群発掘調査報告書Ⅱ」1985年3月
17	木瓜原遺跡	7世紀末～8世紀	滋賀県草津市野路町		梵鐘跡土坑	滋賀県教育委員会「木瓜原遺跡」1996年3月
19	辻遺跡	18～19世紀	滋賀県栗東市辻	梵鐘銅型	沼解弁	栗東町出土文化財センター調査
20	多可寺跡	8世紀末	兵庫県多可郡中町新治屋	梵鐘銅型	梵鐘跡土坑	神崎興「多可寺跡出土の梵鐘跡遺構」『古代研究』27 1982年 妙見山麓遺跡調査会「播磨歴史史の研究」1986年3月
21	白水遺跡	11世紀前半	兵庫県神戸市西区伊川谷町	梵鐘銅型	梵鐘跡土坑	神戸市教育委員会「白水遺跡第4次」1999年
22	西安田・長野遺跡A地区	中世後期	兵庫県多可郡中町西安田・長野		梵鐘跡遺構	山沖浩信「西安田遺跡」『兵庫県多可郡中町 西安田長野遺跡群調査報告Ⅱ』妙見山麓遺跡調査会調査 2000年10月
23	清水・タカアゼ遺跡	13～14世紀	兵庫県多可郡加美町清水		梵鐘跡遺構	加美町教育委員会「清水・タカアゼ遺跡 実情報告書」1987年
24	鹿野宮ノ前遺跡	15世紀または17世紀前半	兵庫県福山市鹿野町	梵鐘銅型	梵鐘跡土坑	西脇市教育委員会「鹿野宮ノ前遺跡Ⅱ」『西脇市文化財調査報告書』14 2004年
25	牧野・町西遺跡	13世紀	兵庫県多可郡中町		跡遺土坑	多可郡中町教育委員会「牧野・町西遺跡Ⅱ」 2005年
26	政所遺跡	平安後期	岡山県加茂	梵鐘銅型	梵鐘跡土坑	岡山県古代高橋文化財センター「加茂政所遺跡・高松原古才遺跡・立宮遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』138 1999年3月
27	田村庚寺跡	奈良時代	香川県丸亀市田村町	梵鐘銅型	梵鐘跡土坑	宮崎哲治「遺・田村遺跡」『讃波・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報平成11年度』香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター 2000年
28	大溝遺跡	平安時代	徳島市市東町	梵鐘銅型	密教法具銅型	一山典・海山雄一「大溝遺跡(徳島県)」『佛教藝術』174 1987年
29	上喜来蛭子・中佐吉遺跡	16世紀前半	徳島県阿波郡市場町上喜来	銅口銅型		藤川智之「上喜来蛭子・中佐吉遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報』vol.2 1990年度 1991年3月 p.31-34
30	前田遺跡	江戸時代	徳島県板野郡土成町土成字前田	梵鐘銅型		徳島県埋蔵文化財センター「徳島県埋蔵文化財センター年報」vol.4 1992年度 1993年7月 山本信夫・狭川真一「鉢ノ溝遺跡梵鐘跡遺構発掘調査速報」『古代研究』27 1984年 山本信夫・狭川真一「鉢ノ溝遺跡一筑前大宰府物語師の解明」『仏教芸術』174号 1987年 大宰府市教育委員会「大宰府系古跡」Ⅱ(「大宰府の文化財」53) 2001年3月
31	鉢ノ溝遺跡	13世紀後半～14世紀前半	福岡県太宰府市鉢ノ溝	各種銅型		福岡市教育委員会「滝遺跡Ⅰ」第270集 1991年
32	滝遺跡	室町時代～11世紀	福岡市中央区城内	梵鐘跡土坑		福岡市教育委員会「滝遺跡Ⅰ」第270集 1991年
33	小路遺跡	13世紀後半～14世紀前半	福岡県浮羽郡浮羽町	梵鐘銅型	梵鐘跡土坑	福岡県教育委員会「流川地区遺跡群」『福岡県文化財調査報告書』171 2002年
34	智恵寺跡	鎌倉時代	大分県豊後高田市大字唐		梵鐘跡遺構	大分県立宇佐坂土記の丘歴史民俗資料館「国東六郡山本山寺智恵寺」2002年3月
35	豊後国分寺跡	奈良時代	大分県豊後高田市大字唐		梵鐘跡土坑	大分市教育委員会「豊後国分寺跡」『平成10年度確認調査概要報告書』1999年3月
36	大山原寺跡	11世紀末	愛知県小牧市大山		梵鐘跡遺構	小牧市教育委員会「大山原寺発掘調査概報」1979年
37	金屋遺跡	室町時代末	岐阜県恵那郡坂下町本郷	梵鐘銅型	梵鐘跡土坑	坂下町教育委員会「金屋・星の宮遺跡」1975年
38	野口奥寺	古代	岐阜県各務原市		跡遺土坑	各務原市埋蔵文化財調査センター「野口奥寺A地区の発掘調査報告書」『各務原市文化財調査報告書』13 1993年3月
39	寺平遺跡	南北朝～室町時代	長野県上伊那郡飯島町本郷	梵鐘銅型	梵鐘跡土坑	友野良一「寺平遺跡の梵鐘跡遺跡」『月刊文化財』194 1979年 飯島町教育委員会「寺平遺跡」1980年
40	稲尾庚寺跡	平安時代初期	福井市稲尾町	龍頭銅型		福井県教育委員会「稲尾庚寺調査概要」1972年
41	豊原寺跡	14世紀後半～15世紀前半	福井県坂井郡丸岡町豊原		跡遺土坑	丸岡町教育委員会「豊原寺跡Ⅱ」『福井県第2次発掘調査概報』1981年3月
42	一乗台朝倉氏遺跡第64・65区画	16世紀	福井市城戸ノ内町	梵鐘銅型		福井県立朝倉氏遺跡資料館「特別史跡一乗台朝倉氏遺跡」1989年3月 p.24
43	原山遺跡	江戸時代	新潟県糸魚川市大野	梵鐘銅型	梵鐘跡土坑	新潟県教育委員会「新潟県埋蔵文化財調査報告書」第50集 1988年3月
44	宮ヶ瀬遺跡群B(No.9)遺跡	18世紀前半	神奈川県豊田町清川村大字宮ヶ瀬	梵鐘銅型	梵鐘跡土坑	市川正史 長谷川正「宮ヶ瀬遺跡群Ⅱ北原(No.9)遺跡(1)」『内務省』『神奈川県埋蔵文化財センター調査報告』21 1993年2月 神奈川遺考古学会・神奈川教育委員会「第15回神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨」1991年
45	関跡物遺跡	江戸時代	東京都国立市	梵鐘銅型	梵鐘跡土坑	国立市教育委員会「東京都国立市関跡物遺跡」『国立市文化財調査報告』43 2000年

No.	遺跡名	年代	所在地	出土遺物	検出遺構	参考文献
46	下総国分寺跡	奈良時代	千葉県市川市	瓦葺銅型	瓦葺銅造土坑	千葉県埋蔵文化財センター2004年度調査
47	金井遺跡B区	13世紀	埼玉県坂戸市大字新堀字金井	銅鑄型・瓦葺銅型	瓦葺銅造土坑	赤熊浩一「金井遺跡B区」、『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書』第146集 1994年10月
48	金平遺跡	13世紀	埼玉県比企郡嵐山町金平	瓦葺銅型	瓦葺銅造土坑	嵐山町遺跡調査会「金平遺跡Ⅱ」 2000年
49	金谷遺跡	中世	茨城県桜川市金谷	銅鑄型・髹漆型	鑄造間造土坑	茨城県教育財団「金谷遺跡Ⅰ」225集 2004年3月
50	無名無の山遺跡	中世	茨城県つくば市無名	瓦葺銅型・鑄口・塗籠遺構	瓦葺銅造土坑	茨城県教育財団「無名無の山遺跡Ⅱ」280集 2007年3月
51	川俣城跡	19世紀	福島県伊達郡川俣町	銅鑄型・瓦葺銅型	溶解炉	川俣町教育委員会「川俣城跡の概要」1995年
52	白山社遺跡	12世紀	岩手県平泉町	瓦葺銅型	瓦葺銅造土坑	八重樫忠都「岩手県平泉町白山社遺跡検出瓦葺銅造遺構について」『鑄造遺跡研究会資料』6 1996年9月 八重樫忠都「平泉・白山社遺跡の瓦葺銅造遺構」『季刊考古学』62 1998年
53	電沢山遺跡	12世紀	秋田県本荘市境沢山	瓦葺銅型・髹漆型	鑄造土坑	秋田県埋蔵文化財センター2004年度年報22 2005年3月

(五十川伸夫「日本古代・中世の鑄造技術」『銅鉄の金属生産とその流通に関する研究』より引用 一部加筆)

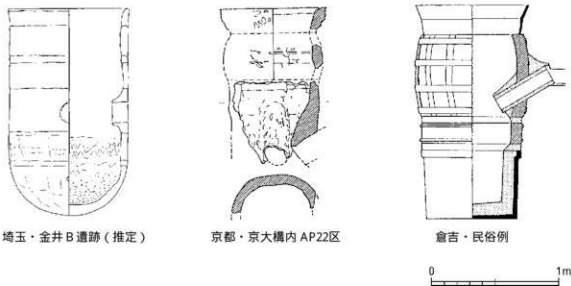
工 溶解炉 (第803図)

一般的に、鑄造遺構の脇に溶解炉を設置して鋼を溶かし、その湯を樋を通して鑄型の頂部(湯口)から注ぎ込んで鑄込みすることは知られている。

当遺跡では溶解炉を掘えたとと思われる遺構は確認されなかったが、溶解炉の炉壁片や溶解炉羽口と思われる炉壁片が出土していることから、溶解炉の存在が考えられる。当遺構出土の溶解炉羽口の外側には、赤紫色でアメ状の溶解物が付着しており、溶解炉の外側と内側の境目部分の炉壁と考えられる。溶解炉羽口の残存部から羽口部の直径を推定すると、内径で約16cmを測ることができる。

これまでの全国における溶解炉の検出例は少なく、古代のものでは岡山県政所遺跡、中世では金井B遺跡、京都大学構内遺跡、大宰府の鉾の裏遺跡が知られ、中世末では福島県室町遺跡、江戸時代では宮ヶ瀬遺跡等がある。金井B遺跡の溶解炉は、粘土を素材とし円筒状に形造られ「ル」、「こしき」、「上こしき」に分割され、防湿用の粘土を貼りこんだ上に炉を自立させて設置していたと考えられている。

第803図は、金井B遺跡・京大構内遺跡A P22区出土の溶解炉の残片から復元したものである。この復元された溶解炉を鳥取県倉吉市の民俗例と比較しても形態的に酷似しており、本遺跡の溶解炉壁片は、中世における溶解炉の形態を示すものとして貴重な資料になるものと考えられる。

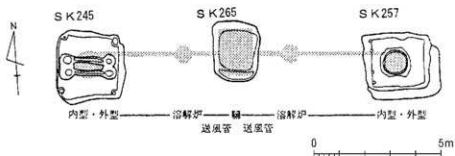


第803図 溶解炉集成図

オ 送風装置（第804図）

鞆（送風装置）は、古代から踏鞆があったと想定されている。京都大学構内遺跡のAP22区では、鑄造土坑SK257・SK245の中間にSK265があり、その内部には、溶解炉の残片が廃棄され、底部には遺跡地には見られない良質の白色粘土が貼られていた²⁷⁾。このことから、この粘土は踏鞆の底部の構築材と想定されている。また、金井B遺跡からは長方形に浅く掘られた部分に白色粘土を貼り込んだ整地作業面に粘土と硬で構築された鞆座が検出されている。

当遺跡では、踏鞆と見られる遺構は確認できないものの、長径10～20cmほどの白色粘土ブロックが第681号土坑の覆土中から確認されており、京都大学構内遺跡や金井B遺跡の白色粘土の出土状況などから考えると、本遺構の近くに白色粘土と硬などで構築された鞆座の存在を想定することができる。



第804図 梵鐘鑄造工房の復元図(「日本中世における銅鉄の金属生産とその流通に関する研究」より)

カ 鑄造遺物について

第681号鑄造土坑から出土した鑄型及び溶解炉壁片は約67.5kgである。明確に分類できる部位は、梵鐘の竜頭1点(196.1g)・撞座2点(24.6g)・乳16点(約11g)・鑄口14点(2.2kg)、燈籠蓮華座10点(4.4kg)であり、その他溶解炉羽口と思われる破片が確認できる。次に鑄型片及び溶解炉について述べる(表68)。

a 梵鐘(竜頭・撞座・乳・紐帯)(第805図)²⁸⁾

竜頭の鑄型片は、『第166集』で報告された第681号土坑出土のP6(第197図)で、縦繋の部分がある。長さ5.7cmほどで5本の溝を確認することができる。撞座の鑄型は、『第166集』で報告された第681号土坑出土のP7(第197図)であり、竜頭として報告されているが円形の窪みや楕円形の窪り込みなどから撞座の一部と考えられる。

乳の鑄型片は大小合わせて16点(11g)が出土している。型の大きさは1cmほどの六角形状で、残存する部分での乳径は約2cm、最大で3cm近くになるものと推測され、一段の円丘状を呈していると考えられる。鑄型の表面は被熱で還元され、濃い灰色に変色して、硬くしまっている。

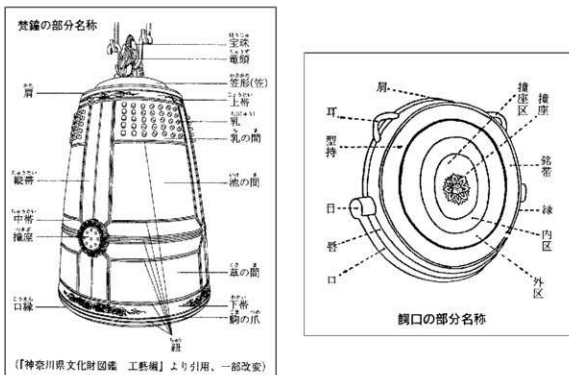
この他、紐帯の突帯と思われる溝を有した鑄型片2点(257g)が出土しており、その形状から縦位のもので、溝の間隔は約1.5cmである。

表68 鑄造遺物一覧表

鑄 鐘 型 片	竜頭	196.1g
	撞座	24.6g
	乳	11g
	鑄口	2.2kg
	蓮華座	約 4.4kg
	その他	約 31kg
溶解炉壁片		約 23.3kg
やかもと		約 4kg
その他		約 2.2kg
合計		約 67.5kg

b 鯛口（第805図）²⁹⁾

鯛口と思われる鋳型片は、既報告分も含めて9点が出土しており、推定直径は16cm前後と考えられる。鋳型片は色調等の違いから、2個体以上の鯛口を鋳造したものと考えられる。鋳型からは銘文などは確認されず、型持の幅は1.5cmで外区とは3本の突線で区画されている。鋳型の表面は全体的に灰白色に変色し、硬くしまっている。



第805図 梵鐘・鯛口の部分名称図（「折りの造形- 中世霞ヶ浦の金工品 -」霞ヶ浦郷土資料館より）

c 燈籠の蓮草座

蓮弁文が施されている鋳型片は既報告分も含めて10点が出土しており、8 - 9条からなる線状の浮き彫りで蓮弁を表現している。蓮草座の直径は33 - 36cmと推定され、鋳型片の中には平面をもつものが6点確認できることから、鋳型はレンガ状に積み上げて据え置かれたものと考えられる。前述したように一部にほぞ孔を有する鋳型片も確認されており、レンガ状に積み上げた鋳型を固定するためのものと考えられる。鋳型片の表面は、下位が濃い灰色、上位にかけては灰白色に変色して硬くしまっている。また鋳型片の表面には型離れをよくするための「くろみ」といわれる炭の粉が確認できる。

銅製の燈籠は、栃木県二荒山神社のものが有名であるが、今回の鋳型片と比較すると二荒山神社のものは蓮弁の外側の線が強く表現されているのに対して、当遺跡出土の鋳型はどれも同じ線の強さで表現されており、違いが認められる。この違いからこれらの新旧関係を明らかにすることはできないが、二荒山神社のものは1292年に三村六郎守季によって造られたことが銘文から分かる。この三村六郎守季は茨城県つくば市で活躍した鋳物師と推定されており、詳細は次項で記述する。

d やかもと

「やかもと」と呼ばれる赤褐色を呈する鋳型を焼くときに使用するレンガ6点（約4kg）が確認されている。

e 溶解炉壁片

炉壁片は約23kg出土しており、その胎土や形状から4つのグループに分類することができる。

- ① 内面に赤紫及び黒色でガラス状の溶解物と緑青が付着し、胎土に小礫を含み火熱で還元して暗灰色を呈するもの。
- ② 内面の溶解物が赤紫から白色化して細かな気泡が現れ、緑青が付着している炉壁片で、胎土にすさや小礫を含み、火熱で還元して暗灰色を呈するもの。
- ③ 外側の酸化粘土層が剥離した状態の破片であり、胎土は細かな砂粒を含み、火熱で還元して灰色を呈するもの。
- ④ 表面が酸化により灰色に変色し、表面にひび割れが認められ、胎土はすさや小礫混じりの灰色粘土を含むもの。

溶解炉の部位については、京都大学構内遺跡では「最上部は黄褐色を呈し、端部は外側に開いている。胴部は灰褐色を呈し、表面がひび割れているもの。その下部は、表面がガラス状に溶解し羽口が取り付く。湯だまりは検出されなかった。」と報告され、宮瀬遺跡群では、「炉壁の胎土は各部位ともほぼ同じで、径3～10mmの小礫を混じえて粗く、色調は橙茶褐色を呈する。」と報告されている。また、五十川伸矢氏²⁹⁾からは、「下位はぐつぐつしたもの。中位は表面がざらざらしていて、ひび割れているもの。上位は赤く焼けただれているもの。」との概略的なご教示を受けている。

これらに準じて、①～④のグループを溶解炉の部位に当てはめてみると、最上部に該当する溶解炉壁片は確認できなかった。胴部は、④が該当し、12.5kgが出土している。胴部下位は、①・②・③が該当し①の下に②が、②の下に③が位置するものと考えられ、①は約500g、②は3.5kg、③は約7kgが出土している。しかし、湯だまりに該当する溶解炉壁片は確認できなかった。

キ 鑄造遺構をもつ遺跡の形態

ここで、他の遺跡の鑄造遺構と比較し、当遺跡の性格について考えてみたい。村上伸二氏³⁰⁾は、中世前半の東国における鑄造工房の形態を4つに分類している。

- ① 河内系鑄物師主導の継続して営まれた拠点的工房
金井遺跡B区(埼玉県坂戸市)、二反田遺跡(埼玉県日高市)、金谷遺跡(茨城県岩瀬町)
- ② 河内系鑄物師による短期間操業の出吹き工房
金平遺跡(埼玉県嵐山町)、宿ヶ谷戸遺跡(埼玉県東松山市)
- ③ 在地鑄物師による鉄製錬・鑄造・鍛冶と総合的継続操業された小規模工房
深沢遺跡(埼玉県嵐山町)
- ④ 都市・鎌倉における工房の実態が不明な小規模工房

鳥名熊の山遺跡から検出された遺構は、梵鐘鑄造土坑1基のみであるが、梵鐘・鑄口・燈籠などの仏具製作を目的とした鑄造施設である。またその規模や遺構数から、計画的・短期間のうちに操業した出吹き工房であることが想像できる。前述した分類の中では、②のグループに近いと考えられ、大型鑄物を鑄造できる技術をもった鑄物師と在地物師との協働も想定しておく必要がある。

鎌倉時代の関東地方においては、鎌倉の大仏鑄造に見られるように河内系鑄物師による幕府や北条氏、そして有力御家人等による権力を背景にした操業の可能性が考えられる。しかし、本跡では、河内系と特定できる鑄型が確認できなかったため、「短期間操業の出吹き工房」の可能性が高いと推測される。

ク 茨城県内の鑄物師

茨城県内の鑄物師²¹⁾について古記録や現存する鑄口²²⁾、梵鐘²³⁾を集成し、さらに当遺跡の鑄物師についても考えてみたい(表69-71)。

県内で現存する最古の梵鐘は、鎌倉時代前期に鑄造された極楽寺(現土浦市等覚寺蔵)の梵鐘で、建永元年(1206)、小田城主筑後入道尊念(八田知家)が寄進したものである。13世紀後半を代表する梵鐘には土浦市般若寺のものがあげられ、銘文には「大日本常州信太庄般若時建治元年(1275)乙亥八月廿七日己丑時正第二 大勳進源海 願以此功德 普及於一切 我等與衆生 皆共成仏道 大工丹治久友 大工千門重延」と記されている。この梵鐘は、建治元年(1275)8月の製作で、大工は鎌倉大仏の鑄造に参加した丹治久友であり、丹治久友と併記される千門重延は地方鑄物師と考えられている。五十川伸矢氏によると、「有力鑄物師といえども鑄物生産が定着していない所で、梵鐘のような大型鑄物の「出吹き」を行なうには、要因や材料の手配などが非常に困難なため、地方の鑄物師とその配下の作業集団の協力を得たと見るべきで、それ以外の場合は製品を搬送した。」²⁴⁾と推定している。

13世紀末では、二荒山神社の大燈籠(1292)製作の三村六郎守季²⁵⁾があげられる。守季の本貫地三村(現つくば市)は、常陸守護小田氏の本拠地小田一帯に隣接した郷名であり、彼らは常陸守護所近傍に住む鑄物師であったと推測されている。

鎌倉末期を代表する梵鐘には、常陸国久慈郡戸崎村蓮光寺(現常陸大宮市)の梵鐘があり、延慶二年(1309)製作で、大工は沙弥善性である。その銘は鑄物師大工と見えるので、在地鑄物師集団の長と考えられる。この沙弥善性の作例は、他に2例が知られており、一つは正和丙辰(1316)常州鹿島郡宝雲山安福禅寺の梵鐘である。二つ目の例は、応長元年(1311)下州印東庄八代柳舟方業師寺の梵鐘であり、「応長元年太歳辛亥十一月日」の銘文が残っている。現在この梵鐘は千葉県成田市の東勝寺に保管されている。沙弥善性は、常陸国から下総国にかけて活動した大工で、本拠地は穴戸荘鳴井であり、現在の八郷町東成井と考えられている。この鳴井は穴戸荘のはずれであり、当地を本拠地としていた穴戸氏との関係が推定される。

また、奥州岩城郡石森忠教寺(現福島県いわき市)の梵鐘は、応安元年(1368)の製作であり、常州久慈郡横瀬(現常陸大宮市)大工円照の銘が記されている。

南北朝以降を代表する梵鐘には、常州路信太庄大和村東端山崇源神寺(現つくば市)の梵鐘があり、応安五年(1372)の製作である。銘文には、大神兼弘・守重の名が見え、常陸中郡荘の岩瀬町大神(現桜川市)を本拠地とする鑄物師と見られている。戦国期では、永正十三年(1516)に鑄造された下総香取郡勝福寺の鑄口があげられる。また、鑄物師である広沢定吉は、戦国末期に至るまで真壁氏の保護を受け、真壁領内を中心に営業を展開していたといわれている。

その後近世に入ると、真壁には、常陸を代表する小田部氏[創業正保期(1644-1648)頃]が鑄物師として創業していたことが知られている。

表69 茨城県の鑄物師

	鑄物師	本拠地	現在地	寺院名	鑄造物	時期
13世紀末	三村六郎守季	南野荘三村	つくば市三村	日光二荒山神社	銅製燈籠	1292
14世紀初頭	沙弥善性	穴戸荘成井	八郷町東成井	蓮光寺	梵鐘	1309
14世紀中葉	円照	久慈郡横瀬	常陸大宮市	忠教寺	梵鐘	1368
14世紀後半	大神兼弘	常陸・中郡荘	岩瀬町大神	崇源寺	梵鐘	1372
16世紀初頭	広沢定吉	真壁	桜川市(元 真壁町)	勝福寺	鑄口	1516
近世	小田部氏	真壁	桜川市(元 真壁町)	-	-	-

表70 茨城県の梵鐘一覧表

No.	名称	制作年代	作者	寸法	寄進先	所在地	銘文	備考
1	吾賢寺 (旧 種末寺)	建永年間 (1206- 1207)	河内録物師系	総高: 135.0cm 身高: 100.0cm 扉座中心高: 25.7cm 口径: 73.5cm	不明	土浦市	鐘銘「諸願勝去寺鐘 奉 大納言・・・ 建永〇〇 筑 後入道尊家 (八田知家)	筑後入道尊家 (八田知家)
2	神龜寺	宝治元年	-	-	不明	亡失	宝治元年丁丑十月十五日	土浦市神龜寺の古 鐘『古今鐘銘集』
3	(常陸国多可郡) 荒川八幡宮	康元二年	大工丹治國光	-	不明	亡失	-	『新編常陸国誌』
4	般若寺	建治元年 (1275)	丹治久友 千門重延	総高: 100.0cm 身高: - 扉座中心高: - 口径: 約60cm	不明	土浦市	「大日本常州信太庄般若時 建治元年(1275)乙亥八月廿 七日己丑時正第二 大勸進源 海 願以此功德 普及於一切 我等與眾生 皆共成佛道 大工 丹治久友 大工 千門 重延」	-
5	常陸州中郡庄 板橋神社	正応二年	梵鐘大工行正	-	不明	亡失	正応二年	『葉古十集』
6	常陸国久慈西郡 戸崎村 蓮光寺	延慶二年	大工 沙弥善性	-	不明	亡失	延慶二年大歳己酉二月二十一 日	-
7	下州印東庄八代 藤船方 蓮師寺	応長元年	大工 沙弥善性	-	不明	成田市 東藤寺	応長元年大歳辛亥十一月日	-
8	常州鹿嶋郡宝雲 山安福禅寺	正和丙辰 (五年)	大工 穴戸嶋并善性	-	不明	亡失	正和丙辰(五年)三月十四日	大禮那善庵戒尼願 心『葉古十集』
9	下総国下幸輪郡 辺田村聖徳寺	元応三年	-	-	不明	亡失	元応三年辛酉二月廿三日	『隱意集』
10	海雲山長勝寺	文治元年 (1185)	甲斐権守 卜部助光	総高: 115.0cm 身高: 84.8cm 電線高: 24.5cm 口径: 66.3cm	不明	潮来市	-	大旦那北条高時 大膳主下総国主 千葉五郎禪門道曉
11	-	(鎌倉末期)	-	-	不明	亡失	-	常陸国円結寺 旧鐘『禪居集』
12	華嚴院	暦応二年	大工 円阿 小工 横朝正	-	常陸州楳崎吉祥山 淨国禅寺	那珂湊市	暦応二年九月廿五日	大禮那式部丞源義 長
13	-	康永三年 (1344)	大工 神屋 行家	-	下総国相馬郡安楽 寺	千葉市立郷土 資料館	康永三年甲申十一月一日	大禮那形堂妙 師
14	-	貞和六年	-	-	(常陸国久慈東郡 西金砂山)	亡失	貞和六年庚寅正月十八日	大旦那源茂重 『古今鐘銘集』
15	-	延文六年	-	-	(常陸国 南野庄小田)	亡失	延文六年丑歲	大禮那小田孝経 『新編常陸国誌』
16	-	応安元年	常州久慈西横溝 大工 円照	-	常州常陸郡 石森念教寺	亡失	応安元戌申小春日	『友山録』
17	-	(南北朝後期)	-	-	常陸国久慈東 三和河内田谷寺	亡失	-	市河買前田龍托本
18	-	応安五年	大工 右兵衛尉 大神義弘	-	常州常陸太庄 大和村廣徳山 崇源禅寺	亡失	応安五年壬子四月五日	-
19	-	-	出国中郎左 左衛門尉守直	-	大蔵山福泉寺	亡失	-	『新編常陸国誌』
20	-	永徳三年	-	-	久慈郡利貴村 續徳寺	亡失	-	『新編常陸国誌』
21	下妻市 大宝八幡宮	應永元年	大工 沙弥道善	-	武蔵国轄西横 洪江郡金原村 金高山平林禅寺	亡失	-	-
22	-	応永乙亥 (二年)	大工大和守 卜部家光	-	(下総国結城郡) 實城山龍藏寺	亡失	応永乙亥(二年)七月日	大禮那結城中程大 輔重保(沙弥聖朝) 『新編常陸風土記』
23	-	応永丁丑 (四年)	-	-	常州小幡庄北〇 堂天王寺	亡失	応永丁丑(四年)八月十二日	玉造村天王夜のち の常陸国郡考
24	玉里村・円妙寺	応永十年	-	-	常州南郡 田余典木山 王堂円妙寺	亡失	応永十年癸未 11月8日	禮那家長
25	-	宝徳二年	-	-	左都東郡 西岡田郷嘉敷寺	亡失	-	『新編常陸国誌』
26	-	長祿二年	大工下野国宇都 寄 住人大和七郎	-	常陸国那珂 西太古山清音寺	亡失	長祿二年戊寅六月廿日	源隆河守義聖 (大禮那か) 『大日本地名辞書』
27	-	文明八年	-	-	下総州下川辺庄 桜井権六郎山 東昌禅寺	五霞村 東昌寺	文明八年六月廿四日	大禮那梁田河内守 祐治 鐘は鎌倉期のもの 、銘文は追刻

No.	名称	制作年代	作者	寸法	寄進先	所在地	銘文	備考
28	-	天文(七年) (1537)	大工 石井静阿弥	-	常州八瀨山 (下の坊)	亡失	天文(七年)庵集戌戌冬十月吉	大權部源朝臣義興 『白河古事考』
29	-	永祿十季 (1567)	古鳥集人助造 彫刻之	-	伊佐郡奥崎郷 下稻村玉皇山 定林寺	下稻村 足林寺	永祿十季丁卯三月八日	大權部水谷兵部大 輔源前俊 経は鎌倉期のもの 、銘文は流布
30	-	元龜四年	大工相本三郎左 衛門	-	常州佐竹寄 神保良沢村 下野近津山	亡失	-	大權部佐竹次郎 自義源并義忠并丸 『水府志』
31	-	天正十九年	-	-	(鹿嶋郡) 神宮寺	-	-	『新編常陸国誌』
32	加茂堂轉院	永享三年 (1431)	-	縦高: 150cm 身高: - 扉座中心高: - 口径: 77cm	不明	玉造町 満満	-	玉造城主平兼幹が 寄進
33	-	文祿二年	-	-	(常陸国) 水戸城大手櫓	-	-	-
34	-	文祿四年	-	-	下総国 古河隆吉寺	-	-	大權部小笠原房正 『古河誌』
35	-	慶長元年	-	-	常州新治郡 椿岡光明山 常林寺	-	-	『新編常陸国誌』

(『中世常陸における「職人」の存在形態- 鑄物師・鍛冶を中心として-』より引用、一部加筆)

表71 茨城県内の鑄口一覧表

No.	名称	制作年代	作者	寸法	寄進先	所在地	銘文	備考
1	大宮神社	正嘉元年 (1257)	-	直径: 27.7cm 厚: 14.2cm	不明	五里村上玉	鑄鑄 正嘉元年 大丁才巳 (1257) 十二月八日敬白	鎌倉末文
2	如意輪時	應曆三年 (1328)	-	-	不明	友部町西方	-	同銘文の鑄口が 歴史資料に保存
3	-	貞和五年 (1349)	南井鑄物師 (南井善性)	直径: 16.6cm	不明	瓜連町古徳	貞和五年(1349)	瓜連町常福寺南西 1km 一括出土
4	岩瀬淨観音堂 (岩瀬山慈願院)	貞和五年 (1349)	南井鑄物師 (南井善性)	直径: 29.0cm 厚: 10.8cm	不明	岩瀬町	『常州光戸庄景徳佑南観音 堂之鑄口(聖観音種子) 貞和五年己酉(1349) 別当徳信等』	-
5	安楽寺	文和元年 (1352)	大工 神屋 行家	直径: 31.5cm	不明	藤ヶ崎市 川原代町	『福岡相馬郡河原代安楽寺鑄 口。天台智者賢海法印住之 説。文和元年(1352)己酉六 月十九日、大勧進沙門栄全』	-
6	上戸観音院	観応三年 (1352)	南井鑄物師 (南井善性)	直径: 29.0cm 厚: 9.0cm	不明	牛郷町	『上福寺 藤主内蔵国安 観 応三年(1352)五月十八日』	-
7	羽黒権現	応永廿四年 (1397)	-	-	不明	北茨城市	-	羽黒権現跡出土
8	大宮神社	応永十年癸未 (1403)	-	直径: 33.0cm 厚: 7.3cm	不明	霧ヶ浦安食	『常州國南野庄安観郷大宮 応永十年癸未(1403)三月廿 八日淨願敬白』	-
9	リュウガイ遺跡	應永廿年 (1413)	-	直径: 29.0cm 厚: 9.0cm	不明	那珂町	隆刻: 『鹿嶋大明神常州久 慈門部師。應永廿年(1413) 九月廿七日旌主敬白』、『久 慈西門辺 八万宮 應永十八 年(1411)十二月三日敬白』	『水府志科』に見 えるが現在亡失
10	大宮神社	享祿四年 (1531)	-	-	不明	玉造村加茂	『享祿四年(1531)辛卯重慶 日』、『大目那早轉録』	『水府志科』に見 えるが現在亡失
11	天王宮	文明十三年 (1481)	-	-	不明	亡失	文開十三年二月十五日	住吉住人大都次郎 (藤法介) 『新編常陸国誌』
12	那珂西部 墨盛原山	天文廿二年 (1533)	-	-	不明	亡失	天文廿二年七月	大山村鑄造鑄口 『新編常陸国誌』
13	奉懸依神岡田村 金沢十二天	永祿六癸亥 (1563)	-	-	奉懸依神岡田村 金沢十二天	亡失	永祿六癸亥九月吉日	『新編常陸国誌』
14	長林寺	永祿十季 (1568)	-	-	不明	栃木県足利市	『常陸河内庄小寺権東林寺鑄 守聖宝前 奉寄進尾形住持 干足永祿十季(1568)戊辰 二月吉日』	現在の牛久市新地 町常林寺
15	(依上保) 上沢村八幡神	元龜二年 (1571)	-	-	(依上保) 元龜二年	亡失	-	『水府志科』
16	-	天正元年 (1574)	大工 島山轉監	-	不明	不詳	天正元年甲戌歲月吉日 常州徳庄(口)船子	大權部地義法印 島山は徳大庄内
17	-	天正七年 (1579)	-	-	下総国相馬郡 府河郷十一面觀音	-	天正七年己卯今月吉日	大皇那平貞輝・輝 信
18	常護寺	天正十二年 (1584)	-	-	(那珂東郡戸村) 常護寺	亡失	天正十二年甲午六月十六日	寄進 源田伊藤守道興 『水府志科』

(『中世常陸における「職人」の存在形態- 鑄物師・鍛冶を中心として-』より引用、一部加筆)

ケ 妙徳寺

鑄造遺構の検出された第9区は、小字名が前道場と呼ばれている地区で、鑄造遺構の第681号土坑から西へ100mの所には妙徳寺が位置している。『谷田部の歴史』³⁶によると、妙徳寺(吉祥山文殊院)は、永仁五年(1297)に一過上人の弟子・一阿了向が道場として開基したもので、時宗に属している。現在の本堂は文永二年(1862)、庫裡(こうち)は文政十二年(1829)に建立されたもので、山門は鐘楼となっており、「寛延二年(1749)己巳秋九月吉日鑄造」の梵鐘があったことが伝えられている。

この梵鐘の鑄造年は江戸時代であり、この時期の梵鐘の特徴は、飾りが多くて銘文が長い点があげられる。しかし、出土した鑄型の特徴は、文様や銘文に当たる部位は確認されておらず、同じく出土している燈籠の蓮華座や駒口の形状からも近世ではなく、中世に鑄造されたものと考えられる。したがって、当遺跡出土の鑄造関係遺物と妙徳寺の梵鐘などとの直接的な関連は認められない。

コ 妙徳寺建立期の田中荘(鳥名郷)

永仁五年(1297年)に妙徳寺が建立されているが、この当時の社会の情勢について考えてみたい³⁷。

鳥名熊の山遺跡は、古代には河内郡鳥名郷の拠点集落であったが、中世に入って、当鳥名郷も田中荘に組み込まれる。『吾妻鏡』の文治四年(1188)三月には「常陸国村田・田中・下村等庄事」との記載が見られ、八条院領荘園として立荘された。田中荘はつくば市から旧谷和原村にかけた地域と比定されており、この地域は常陸平氏の大塚直幹を中心に開発が行なわれ、その子下妻広幹が荘園の下司職を掌握した地域である。

建久四年(1193)6月、大塚義幹は殺害され、12月には下妻広幹が殺害された。その後田中荘は、八田知家知知行し、13世紀はじめには嫡子知重が家督を譲り受け、その後九郎知氏が田中氏の祖となっている。弘安八年(1285)の霜月騒動では、御家人安達泰盛方についた田中筑後五郎左衛門尉、田中筑後四郎が自殺して、田中荘は没収され、地頭職は北条氏となり、後に北条得宗領となった。

ほぼ同じ頃、当遺跡から南に1kmに位置する、鳥名前野東遺跡には1町四方の堀に囲まれた方形居館が出現する。この居館内に居住した在地有力者については不明であるが、13世紀末の当遺跡の所在する鳥名地区一帯を治めたものと考えられる。

建武の新政以降、田中荘は小田氏の支配下となり、室町時代になると、小田氏支配下の平井手氏が面野井城を構えて鳥名・面野井を治めたといわれている。

サ 鳥名熊の山遺跡の鑄物師

鳥名熊の山遺跡の鑄物師については、燈籠の鑄型片からはつくば市三村に本質地を置いたとされる三村六郎守季の存在が浮かんでくる。出土鑄型片と、三村六郎守季製作の日光市二荒山神社の銅製燈籠を比較すると、二荒山神社のものは蓮弁の外側の線が強く表現されているのに対して、本跡出土の鑄型片はどれも同じ線の強さで表現されている。作風の違いがあり、三村六郎守季の関わりについては不明であり、またこの違いは製作時期と見ることができ、これらの鑄型片は、蓮弁を線状の浮き彫りで表現しているところに特徴がある。千葉隆司氏は、同様の特徴は、石岡市東成井(旧八郷町)の、広福院阿弥陀如来坐像(鉄仏)に見られると報告している³⁸。石岡市東成井は穴戸荘鳴井にあたり、この地を本拠地にしてた沙弥善性の製作したものと想定されるが、特定するまでには至っていない。いずれにしても、本跡で鑄造した鑄物師集団は、県内に拠点を置く鑄物師の可能性が高いと考えられる。

この他の、梵鐘の竜頭や撞座、鐃口の鋳型片からは、鋳物師を特定できるような特徴的な鋳型片は確認されていない。

次に、鋳造された梵鐘や鐃口、燈籠の納入先についてであるが、まず最も近い場所に位置する妙徳寺に納められたと想定できるが、前述したように時期差もありそれらを明確にすることはできなかった。納入先については、東を流れる東谷田川を利用して東谷田川流域の神社や寺に運ばれた可能性を考えておきたい。

最後に、当梵鐘鋳造遺構が機能した時期については、妙徳寺創建の時期と、鋳物師三村六郎守季や沙弥善性の活躍した13世紀末から14世紀初頭と一致する事や、島名前野東遺跡において北条得宗家の存在が想定できることなどから、13世紀末から14世紀初頭にかけて、当梵鐘鋳造遺構が機能したと推定できる。また、今回の調査報告では妙徳寺の南側第16区の様相も明らかとなっている。妙徳寺正面からは、直線的に延びる16世紀前半の参道が確認され、墓坑やその他の遺構がこの時期急増していることから、この時期に妙徳寺が最も繁栄した時期と考えられる。この当時島名は小田氏に支配されており、小田氏の権力を背景にした鋳物操業の可能性も考えられる。以上、梵鐘等が鋳造された時期については2期が想定されるがいずれにしても鋳造時期を特定するまでには至っていない。

今回、梵鐘鋳造遺構の検出に伴ない、鋳型片や鋳物師の集成からその時期や鋳物師の特定について、考察を試みたが、いずれも明確に特定することはできなかった。今後とも引き続きこの梵鐘鋳造遺構の検討を重ねていきたいと考えている。今後、当遺跡周辺の発掘調査の進展によって、鋳物師の解明や地域社会における宗教の広がりが解明されることを期待したい。

(2) 第16区における中・近世出土遺物の様相(第806・807図)

当区では、古墳時代から平安時代までの集落跡のほか方形竪穴遺構、地下式墳、井戸跡、土坑など中・近世の遺構が多数確認されており、土師質土器や陶器が出土している。特にそれらは、堀跡や溝跡からまとまって出土しており、当区の中世後半から近世初頭にかけての出土遺物の様相を知り得る資料となっている。そこで、堀跡や溝跡、道路跡から出土した土師質土器や陶器の中の残存率の良いものを取り上げ、土師質土器の小皿(口径が10cm以下のもの)を中心に、土師質土器の皿、内耳鍋、襷、搦鉢(以下小皿、皿、内耳鍋、襷、搦鉢とそれぞれ表記する。)の特徴について以下にまとめてみたい。時期については、出土遺物や遺構の重複から4時期の分類が可能である。

ちなみに小皿や皿は、いずれも口ウロ成形で底部が回転系切りのものであり、手づくね成形のものは確認されていない。なお、各時期の年代観は共伴する陶器を基準にしており、『瀬戸市史陶磁史篇四』で示された編年を参考に1世紀を2時期区分し、第A期を15世紀後半、第B期を16世紀前半、第C期を16世紀後半、第D期を17世紀前半としている。

第A期

第96号堀跡、第176号溝跡出土の小皿2点と皿1点、陶器1点が該当する。小皿は口径5.5cm、器高1.6cmのもの(1)、口径7.9cm、器高2.3cmのもの(2)、皿は口径12.0cm、器高3.1cmのもの(3)があり、いずれも口径に比して底径が大きく、2分の1以上である。2・3は底部がわずかに突出し、体部との境が認められる。体部は外傾して立ち上がり、口縁部でわずかに内彎している。また口縁端部までナデが施され、薄くなる。体部外面には口ウロナデによる稜もわずかに認められる。寸法は異なるが、器形は類似

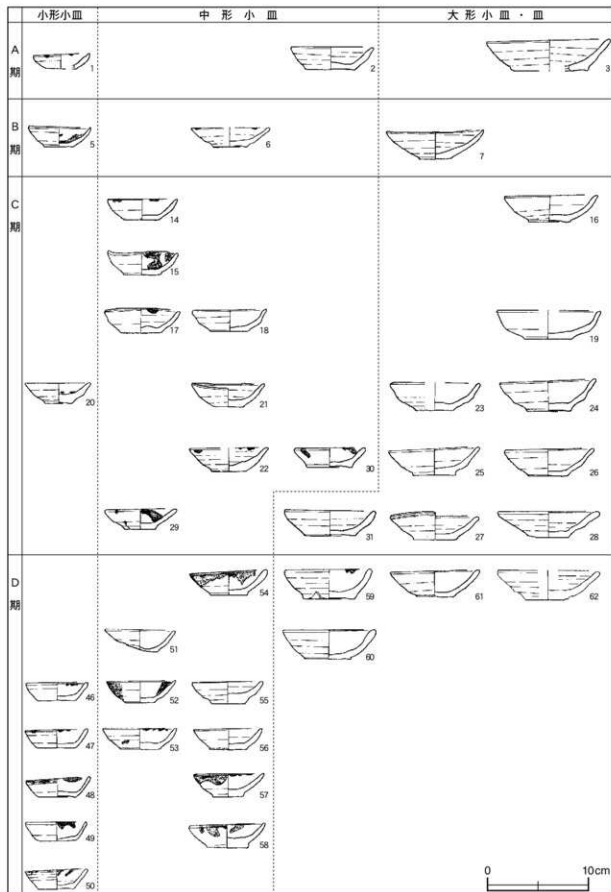
して扁平化している。内耳鍋については、いずれも細片のため器形など不明である。共存する陶器は15世紀中葉から後葉に比定される古瀬戸産の直縁大皿(4)である。

第B期

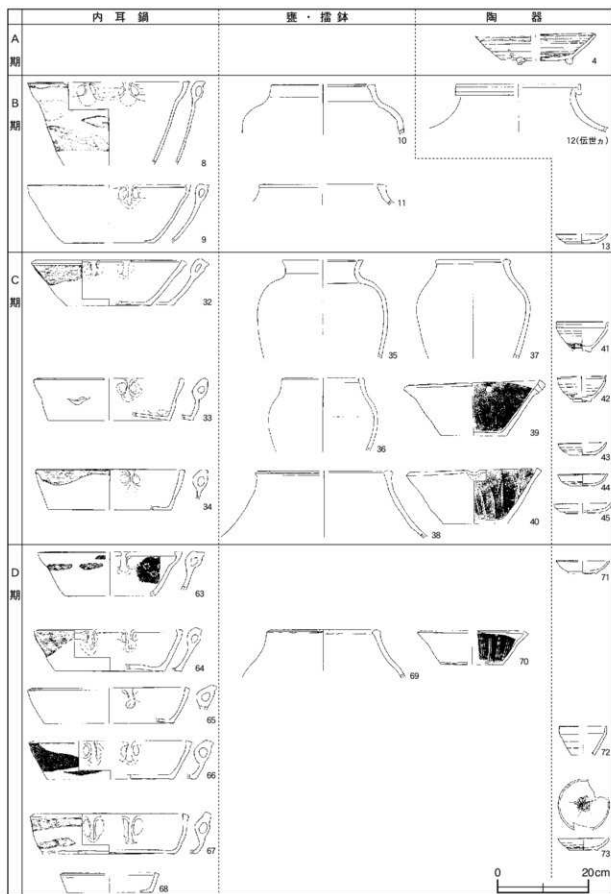
第95号堀跡, 第155号溝跡, 第16号道路跡出土の小皿3点, 内耳鍋2点, 襷2点, 陶器2点が該当する。小皿は口径が6cm前後のもの(5), 7-8cmのもの(6), 9-10cmのもの(7)と1点ずつではあるが大中小に分類できる。底径はいずれもA期より小さくなり, 口径に比して底径は2分の1以下になる。また底部の突出が認められ, 体部との境はA期よりも明瞭となる。体部は大きく外傾して立ち上がり, 口縁部でわずかに内彎し, 口縁端部まで口クロナデが施され薄くなる。5・7は丁寧な口クロナデであり, 体部外面はなめらかであるが, 硬質である。6は強い口クロナデによって体部に稜ができ, わずかに凹凸が認められ, これらはC期に近い様相を示している。内耳鍋は口径35cm, 器高15cmほどの寸法であり, 口径に比して器高は5分の2から2分の1と高く, 土鍋形が主体である。いずれも体部は内彎気味に立ち上がり, 口縁部でほぼ直立している。また口縁端部が幅広のもの(8)と幅広で内側につまみ出されるもの(9)が見られる。耳は体部上位につき, 体部内面はナデによって口縁部と体部の境に稜が認められる。襷は口径24cmほどで, 口縁部から頸部, 胴部へと弧状に径が大きくなり, 常滑産の襷を意識した器形と想定され, 胴部上位が最大径となる。口縁端部が内側につまみ出されるもの(10)と, 外側につまみ出されるもの(11)も見られる。共存する陶器は13世紀後半から14世紀に比定される常滑産の襷(12)や廃絶後に廃棄されたと考えられる16世紀後葉に比定される長石釉が施された瀬戸・美濃系丸皿(13)である。

第C期

第92-94・97-99・103号堀跡, 第151号溝跡出土の小皿18点, 内耳鍋3点, 襷4点, 擂鉢2点, 陶器5点が該当する。小皿はB期に続いて, 大中小に分類できる。中形の小皿は口径7cm前後とB期よりも小さくなり, 口径に比して底径はほぼ2分の1になる。大形の小皿は多く見られるようになり, 口径に比して底径はほとんどが2分の1以下となる。また底部が突出し, 体部との境がB期よりも明瞭になる。強い口クロナデにより体部と口縁部に稜ができ, 凹凸はB期よりもはっきりとしてくるものが多く見られるようになる。また体部が外傾して立ち上がり, 口縁部でわずかに内彎しているもの(14-16)や直立気味に外反しているもの(17-19), 口縁部で外反しているもの(20-27)や大きく外反しているもの(28), 外傾して直線的に立ち上がっているもの(29-31)とに分けられ, 口縁端部が肥厚するもの(28・30・31)も見られる。14-16はB期の様相に類似しており, 当期の中でもB期に近い時期のものと考えられる。内耳鍋は口径32cm, 器高9cmほどの寸法で, B期よりも器高は低くなり, 焙烙形になる傾向が認められる。32は口径に比して器高が3分の1と低く, 体部は大きく外傾して直線的に立ち上がっている。口縁端部は幅広で内側と外側へつまみ出され, 耳は体部上位についている。33・34は口径に比して器高が3分の1以下とさらに低くなっている。体部は外傾して直線的に立ち上がり, 口縁端部は平坦面をもちシャープである。耳は体部上位についている。体部中位で器壁が薄くなり口縁端部に向かって徐々に厚くなる。襷は口径が16-29cmほどで, 口径より頸部の径が小さくなる器形で, 口縁端部が外側にシャープにつまみ出されているもの(35)とB期とほぼ同じ器形であり, 口縁端部が内側につまみ出されているもの(36), 外側につまみ出されているもの(37-38)が見られる。擂鉢は口径29cm, 器高12cm, 底径14cmほどの寸法であり, 体部が外傾して直線的に立ち上がって口縁部で肥厚するもの(39)と肥厚しないもの(40)が見られる。



第806図 土師質土器(小皿・皿)の変遷



第807図 土師質土器(内耳鍋・甕・播鉢), 陶器の変遷

いずれも内面に5条1単位の襷目目が認められる。共存する陶器は16世紀後葉に比定される瀬戸・美濃系天目茶碗(41・42)、鉄釉が施された瀬戸・美濃系丸皿(43・44)、長石釉が施された瀬戸・美濃系丸皿(45)である。

第D期

第100・101号堀跡、第150・152・161・163・166号溝跡出土の小皿17点、内耳鍋6点、襷1点、播鉢1点、陶器3点が該当する。小皿は前期と同様に大中小に分類できる。C期に比べると全体的に小形化する傾向にあり、口径が6cm前後のもの(46-50)が多く見られるようになる。口径に比して底径が大きく2分の1以上で、底部の突出は認められず、体部は外傾して直線的に立ち上がっている。また器壁は薄く硬質である。中には口縁端部が肥厚するもの(46)も見られる。これらはC期までに見られなかった新しいタイプのものである。中・大形の小皿では強い口クロナデによって体部に稜が認められるもの(51-62)や口縁端部が肥厚するもの(54・59・60)が見られ、前期の様相を継承していることからC期に近い時期と考えられる。また中形小皿の中には、底部が厚手になるもの(55-58)も見られるようになる。内耳鍋は口径が20-35cm、器高が4.5-10cmと寸法に幅があるが、器高はC期よりも低くなる傾向にあり、焙烙形が主体になる。63・64は口径に比して器高が3分の1以上であり、器形や調整はB期の様相を示している。65・66の器形や調整はC期の様相を示しており、当期の中でもC期に近い時期のものと考えられる。67は直立気味に内彎して立ち上がり、口縁端部は幅広になる。耳は体部の上位からやや下につくようになり、当期の特徴となる。68は口径20cm、器高4cmほどの規模で、かなり小形化している。襷(69)は口径が24cmほどで、器形はB期とほぼ同じである。また口縁端部が外側・内側につまみ出され、断面三角形を呈している。播鉢(70)は口径が23cm、器高8cm、底径14cmほどの寸法で、C期より小形で扁平化している。体部は外傾して立ち上がり、口辺部でさらに外傾している。口縁端部は内側につまみ出され、内面には3条1単位の襷目目が認められる。共存する陶器は16世紀中葉の瀬戸・美濃系の灰釉端反皿(71)、17世紀前半の瀬戸・美濃系天目茶碗(72)、志野系の鉄絵皿(73)である。

以上のことから小皿を大中小に分けて考えると、小形小皿は、器壁が厚く、体部が内彎して立ち上がるものから、器壁が薄く、体部が外傾して直線的に立ち上がり硬質なものと変化し、中・大形の小皿は、底径比が大きく扁平形で、体部が外傾して立ち上がって口縁部で内彎するものから、底径比は小さく、体部が外傾して立ち上がって口縁部で直立気味に外反し、さらに大きく外反するものと変化することが想定される。また、中・大形小皿の調整では、A期からC期にかけて底部の突出が認められて体部との境が明瞭になり、B期からC期にかけて強い口クロナデによる体部の凹凸がはっきりし、C期からD期にかけて口縁端部が肥厚してくる傾向が認められる。内耳鍋は大形で器高の高い土鍋形から小形で器高の低い焙烙形へと変化し、耳の位置は体部上位からやや下がっていく傾向が認められたが、襷や播鉢は出土数が少ないため明確な傾向はつかめなかった。今回は限られた遺物の中から変遷する様相を見たが、先述したことは当区における傾向把握であり、今後も調査成果をもとに比較検討を図っていく予定である。

(3) 第16区における中・近世遺構の様相

ア 遺構の分析

第16区の中・近世の遺構は、掘立柱建物跡、方形竪穴遺構、地下式墳、堀跡、溝跡、道路跡、井戸跡、土坑などが多数確認されている。当調査区は、永仁五年（1297年）の開山が伝えられる妙徳寺の南方70mに位置している。調査前の土地利用図によると、妙徳寺からの参道が台地の西側縁辺部に沿って延びており、調査区中央を南北に縦断している。検出された堀跡や溝跡の一部はこれと重複し、古い段階の参道に伴うものと考えられ、周辺に展開するその他の遺構群とともに、中世後半から近世初頭にかけての土地利用の状況を知り得る好資料となっている。ここでは、これらの遺構の様相を概観し、さらに、調査区内における中・近世の景観復元を試みたい。以下、遺跡景観の基軸となる堀跡・溝跡・道路跡、それらに付随する掘立柱建物跡・方形竪穴遺構・地下式墳・井戸跡などの遺構、土坑群の順で述べる。

堀跡・溝跡・道路跡（第808図）

前項の出土遺物の検討から、以下のような変遷を追うことができる。

第A期 (15世紀後半)	第B期 (16世紀前半)	第C期 (16世紀後半)	第D期 (17世紀前半)
第96号堀跡 →	第95号堀跡 →	第92・94・99・102・103号堀跡 →	第101号堀跡
		第97号堀跡 →	第98号堀跡 → 第100号堀跡
第176号溝跡 →	第155号溝跡 →	第151号溝跡 →	第150・152・158・160 161・163・164・166号溝跡
	第16～18号道路跡	→	→ 第152号溝跡 → 第15号道路跡

15世紀後半の第96号堀跡は、調査区北部に位置している。平面L字状で、断面葉研状を呈し、南北の主軸方向はN-6°-Eで、規模の最大値は上幅324cm、下幅36cm、深さ176cmである。覆土上層にはローム層や常総粘土層の大粒のブロックが多量に含まれ、北・東側から人為的に埋め戻されている。こうした堆積状況から、掘削時の廃土で構築された土塼の存在が想定され、土塼は堀の内側肩部に設けられていたと考えられる。また、覆土の最下層にはグライ化した粘土層が堆積しており、機能時には常時滞水した状態であったことを示している。出土遺物は、土師質土器（小皿・内耳鍋・播鉢）のほか、陶器（古瀬戸直縁大皿、常滑系甕）、石器（砥石・石臼）などがある。その他、調査区南西端に第176号溝跡があり、覆土中層から増埧に転用された土師質土器小皿や鞆羽口、多量の鉄滓（5.54kg以上）が出土している。鉄滓は大形の椀形滓が大半を占め、至近に精錬銅冶に関連する工房が存在した可能性がある。

16世紀前半は、調査区中央の台地縁辺部に第95号堀跡、第155号溝跡がN-18°-Eの方向で平行しており、ほぼ直線的に延びている。第95号堀跡は断面逆台形形で、上幅254cm、下幅60cm、深さ86cm、第155号溝跡は断面U字状で、上幅120cm、下幅68cm、深さ56cmである。妙徳寺の参道と重複した位置にあることから、古い段階の参道の道路側溝に相当すると考えられ、復元される路面幅は9～12mである。両跡は調査区南部の斜面部上段で止まり、延長線上のやや標高が下がった位置から、第16～18号道路跡が東側へ延びている。出土遺物は、土師質土器（小皿、内耳鍋）が多く、陶器（瀬戸・美濃系碗・皿・大皿、志野系皿、常滑系甕）や石器（石臼、茶臼、砥石）なども少量見られる。

16世紀後半は、調査区域一帯に堀が巡らされている。調査区中央には第93号堀跡があり、その南端から南へ第94号堀跡、東へ第102号堀跡、西へ第103号堀跡が延びている。第93・103号堀跡の接点や第94

号堀跡の南側は土橋状に地山が掘り残されていることから、参道の位置は前代から踏襲されていると考えられ、第93・94号堀跡は、その道路側溝として機能していたと考えられる。その他、調査区東辺部に第92号堀跡、北西部に第97・99号堀跡が新たに開削されている。規模は、第92号堀跡が断面逆台形状を呈し、上幅540cm、下幅92cm、深さ223cm、第93・99・103号堀跡が断面葉研状で、上幅250～425cm、下幅40～78cm、深さ163～183cm、第97・98・102号堀跡が断面U字状で、上幅186～214cm、下幅50～80cm、深さ74～88cmである。これらの堀は、前代に比べて規模も大きく、直線的であり、区画としての機能が強化されている。堀没いの痕跡も認められ、定期的に維持管理されていた状況が看取される。また、第97号溝の覆土中位には人為的に踏み固められた平坦面が存在し、ある程度埋没した段階で道路としても利用されている。主な遺物としては、第99号堀跡から瀬戸・美濃系鉄釉丸皿が2点重なった状態で、第102号堀跡からは馬骨一体分がそれぞれ出土しており、堀の廃絶に伴い何らかの儀礼的な行為があった可能性がある。また各堀跡からは、土師質土器(小皿・内耳鍋・播鉢)、陶器(瀬戸・美濃系天目茶碗・碗・皿・瓶類・播鉢・香炉、志野系皿、常滑系甕)、磁器(龍泉系青磁皿)などが多量に出土しており、種類や器種も豊富である。その他、石鏡(石臼・茶臼・砥石)、石塔(五輪塔・宝篋印塔)、鉄製品(鏃)、古銭(元符通寶・永楽通寶)が出土している。

17世紀前半は、調査区中央に第101号堀跡と第154号溝跡、北部西寄りに第158号溝跡、北西部に第100号堀跡と第158・160・161号溝跡が位置し、東部には、第150・152号溝跡が7～9mの間隔で平行している。第100・101号堀跡は東西方向で、断面形は葉研状である。規模は、第100号堀跡が上幅370cm、下幅60cm、深さ168cm、第101号堀跡が上幅256cm、下幅48cm、深さ104cmである。第100号堀跡は、覆土中位に人為的に踏み固められた平坦面が認められ、道路としても機能している。両跡からの出土遺物は他の溝跡より古い様相を示しており、土師質土器(小皿・内耳鍋・播鉢・火鉢)、陶器(瀬戸・美濃系天目茶碗・碗・瓶類・香炉)、磁器(龍泉系青磁輪花皿)、石器(石臼・砥石)などが数多く出土している。溝跡は、上幅110～190cm、下幅40～60cm、深さ30～80cmで、断面はU字状を呈している。多くが前代の堀による区画を踏襲するように掘削されているが、規模はかなり縮小化しており、道路側溝や排水溝としての機能に重点が移った感がある。溝跡からの出土遺物は土師質土器(小皿・内耳鍋)、陶器(志野系皿、常滑系甕・播鉢)、石器(石臼・砥石)であるが、出土量は少ない。

掘立柱建物跡・方形竪穴遺構・地下式墳・井戸跡(第809・810図)

掘立柱建物跡は5棟が該当し、調査区東部の台地縁辺部に1棟、西側の斜面部に4棟を確認している。堀や溝で区画されたブロックごとに単一棟で存在している。特に斜面部の建物跡は、近接する堀・溝跡と桁行方向が平行または直交するように配置されている。構造は、桁行4間の側柱建物が2棟、桁行2間以下の小規模な建物が3棟で、前者は倉庫、後者は簡易な小屋や小堂としての機能が想定される。時期は、関連する堀・溝跡の年代観や重複関係から、17世紀前半と考えられる。また、掘立柱建物を伴う遺構として、第20号不明遺構がある。第20号不明遺構は、調査区南端の斜面部中段に位置している。斜面部は段切りされ、桁行3間、梁行2間の側柱建物を構築し、建物の背面には排水溝を設けている。五輪塔、宝篋印塔、石幢などの石塔類の部材が多数出土しており、供養堂などの草堂と推定される。時期は、石塔類の形状から16世紀前半と考えられる。

方形竪穴遺構は8基が該当し、台地上から縁辺部にかけて散在している。構造は、2～3か所の柱穴を持つものが5基、柱穴が確認されないものが3基である。いずれも床の硬化が弱いため、居住以外の

目的で使用されたと考えられる。主な遺物としては、第73号方形竪穴遺構の鉄鍬、第79号方形竪穴遺構の瀬戸・美濃系陶器灰釉平碗、貝類（アカニシ）、第80号方形竪穴遺構の五輪塔水輪・宝篋印塔基礎部などが出土しているが、いずれも原位置は保っておらず、遺構の廃絶後に廃棄されたものと考えられる。第74号方形竪穴遺構から15世紀後半、第75・78・79号方形竪穴遺構から16世紀前半の土師質土器小皿や内耳鍋などが出土しており、検出遺構の中では古い様相を示している。

地下式墳は17基確認されており、このうち15基は調査区中央の堀・溝跡の西側に位置している。主軸方向は溝・堀跡と平行あるいは直交しており、堀・溝跡を意識した配置がとられている。分布状況は主軸方向を同じくして並列するものや重複した位置で作り替えが行われているものが見られるほか、土坑群を取り囲むように2～5基からなるまとまりを形成しており、一定の区域内で継続して構築された状況を示している。第51号地下式墳から瀬戸・美濃系陶器灰釉端反皿片、第57号地下式墳から土師質土器小皿、播磨、第52号地下式墳から土師質土器小皿など、15世紀後半から17世紀前半の遺物が出土しているが、いずれも天井部の崩落後に混入したものであり、時期は明確でない。重複関係から第53・59号方形竪穴遺構が16世紀前半よりも古く位置付けられる。

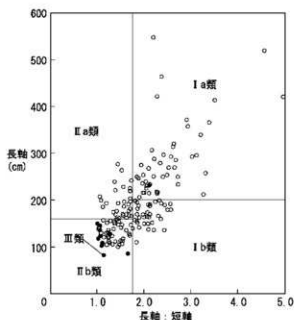
井戸跡は56基が該当し、掘り方の形状からⅠ～Ⅲ類に分類される。Ⅰ類は、円筒状の井戸跡で、台地縁辺部と斜面部中段から下段に分布している。重複関係は堀・溝跡や他の類型の井戸に掘り込まれている例が多く、古い様相を示している。Ⅱ類は、漏斗状の井戸跡で、台地上、台地縁辺部、斜面部中段から下段に分布が見られる。15世紀後半から17世紀前半の遺物が出土していることから、当期における一般的な形状であったと考えられる。Ⅲ類は、二段掘りまたは漏斗状で、井戸枠を埋設した版築状の埋土が見られる。台地縁辺部及び斜面部中段に並ぶように配置されており、井戸の掘削位置は区画等による規制が働いていた可能性がある。出土遺物の時期は、16世紀後半代が多い傾向にあり、各類型の中では新しい様相を示している。以上、重複関係や出土遺物からⅠ類からⅢ類への変遷が想定される。

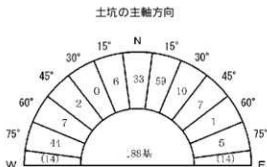
土坑群（第811図）

土坑は、性格不明なものを除く227基が該当し、廃棄土坑、粘土貼り土坑、火葬土坑、墓坑、墓坑や柱穴の可能性のある土坑を確認している。ここでは、墓坑9基、粘土貼り土坑4基、墓坑の可能性のある土坑175基の計188基の土坑について分析を行い、土坑群の性格を再検討したい。分析にあたっては、形状からⅠ～Ⅲ類に大別し、Ⅰ・Ⅱ類は大きさからそれぞれa・b小類に細分した。

Ⅰa類は、長軸と短軸の比が1.76以上の細長い長方形で、長軸の長さが2m以上の大形の土坑で、53基が該当する。北東部の最高所にあたる標高23.0m付近と標高22.0mの台地縁辺部付近、中央の堀・溝跡の西側に密な分布域があり、斜面部中段にも散在している。主軸方向は、南北方向（N-30°-W-N-30°-E）が51%、東西方向（N-60°-90°-

土坑の規模と形状





W, N- 60° - 90° - E) が45%である。中央部を南北に縦断する堀・溝跡と主軸方向(N- 17° - 18° - E) が平行・直交するものは63%で、各類型の中で最も高い値を示しており、配置には堀や溝による規制が強く働いていたことがうかがえる。出土遺物は、第4225号土坑から龍泉系青磁椀花皿片、第4269号土坑から寛永通寶(古寛永)5枚が附着した状態で出土しているほか、図示でき

なかったものの第4439・4654号土坑から古銭(不明)、第4339号土坑から刀子、第4375号土坑から鏝、第4252・4660・4368・5521号土坑から釘がそれぞれ出土している。

I b類は、長軸と短軸の比が1.76以上の細長い長方形で、長軸の長さが2.0m以下の小形の土坑である。42基が該当し、底面に炭化物が堆積している第4249・4258・4373 - 4375号土坑や粘土貼り土坑の第5397号土坑は本類に属する。分布域は調査区中央の堀・溝跡の西側に24基が集中しているほか、北西部や南部にも数基からなるまとまりが見られる。主軸方向は南北方向が48%、東西方向が33%、その他が19%で、中央の溝・堀跡と平行・直交するものは57%であり、中央の溝・堀跡を意識した配置がとられている。遺物は、第5519号土坑から宝篋印塔の笠部が横転した状態で出土しているほか、第5372号土坑から土師質土器小皿、第4164号土坑から鏝、第4343号土坑から釘がそれぞれ出土している。

II a類は、長軸と短軸の比が1.75以下の隅丸長方形もしくは方形で、規模が1.61m以上の大形の土坑である。33基が該当し、粘土貼り土坑の第5381・5523号土坑は本類に属する。標高21.0 - 22.5mの台地縁辺部から斜面部上段にかけて広範囲に散在しており、分布状況に堀・溝跡との関連性は認められない。南北方向と東西方向が39%、その他が22%で、主軸方向にもばらつきが見られる。出土遺物は、第4708・4213号土坑から土師質土器小皿、第4199・5373号土坑から古銭(皇宋通寶、永楽通寶)、第5282号土坑から鏝、第4298号土坑から釘、第4270号土坑から煙管吸口部がそれぞれ出土している。

II b類は、長軸と短軸の比が1.75以下の隅丸長方形もしくは方形で、規模が1.60m以下の小形の土坑である。38基が該当し、調査区南部において人骨が確認された第5252・5253・5259号土坑は本類に属する。第5252・5253・5259号土坑は臥屈葬、第5259号土坑では永楽通寶のみで構成された六道銭が副葬されている。中央の堀・溝跡の東西に分布域が見られ、東側では調査区北部、西側では中央部以南に集中している。主軸方向は、南北方向が66%と優位を占め、東西方向が24%、その他が10%となっている。中央の堀・溝跡と平行・直交するものが50%で、他の類型と比べると堀・溝による規制は弱い傾向にある一方、正方位を指向する割合が34%と高いことも特徴が挙げられる。遺物は、先述の人骨や六道銭のほか、第4520・5251号土坑から古銭(開元通寶、元豊通寶)、第4473号土坑から釘が出土している。

III類は、円形状を呈する土坑である。11基が該当し、台地上から斜面部上段にかけて点在している。第5257号土坑は底面に径98cmの溝状の凹みがあり、桶の底部の圧痕と推定される。また、粘土貼り土坑の第5382号土坑は、底部に長径86cm、短径52cmの楕円形状の落ち込みが認められる。いずれも座葬の桶棺を埋設した墓坑の可能性が高く、時期は17世紀代と考えられる。

イ 第16区における中・近世の景観復元

以上の分析結果を踏まえ、調査区域における景観変遷を試みたい。前項の時期区分に従い、第A期を

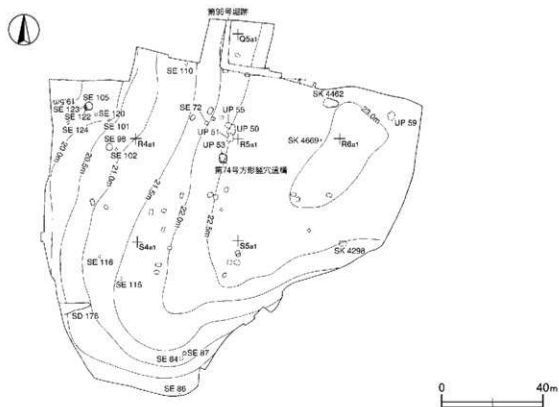
15世紀後半、第B期を16世紀前半、第C期を16世紀後半、第D期を17世紀前半としている。ただし、中・近世の遺構は出土遺物が少ないため、個々の時期を特定することが出来なかった。ここでの復元案は、遺跡景観の基軸となる堀跡・溝跡・道路跡との関連性や遺構の分布状況の特徴等から、最も符合する時期を推定したものであり、必ずしも存続期間の長短や同時期内での機能的な形態差は反映していない。

第A期（第812図）

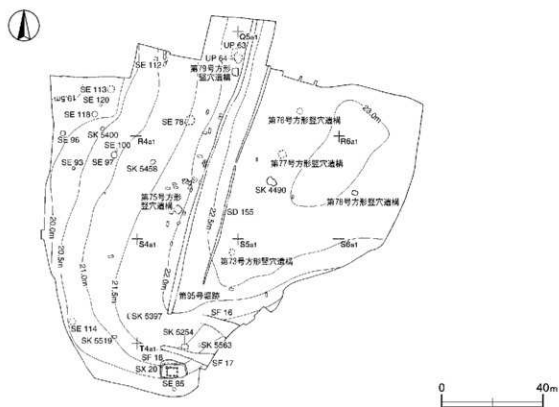
当区において中世段階の開発が始まる時期であり、調査区北部に第96号堀跡が開削される。第96号堀跡は、ほぼ直角に屈曲するし字状の平面形で、断面葉研状の大形の堀である。堆積状況から堀の内側側部に土塁の存在が想定され、堀の内外を区画する性格に加え、防衛的機能も備えていたと考えられる。調査区域が限られるため内部施設は確認されておらず、妙徳寺に直接伴うものか、在地有力者層の居館等に関連するものかは不明である。第96号堀跡より南側では、区画を明示するような施設は認められないことから、堀の外側へは土地利用に対する制約が及ばなかったと推測される。遺構は、台地上に廃棄土坑の第4462・4669号土坑、台地縁辺部に第74号方形竪穴遺構や第53・59号地下式墳があり、斜面部中段より下位に第176号溝跡や井戸跡が分布している。井戸跡は、円筒状や漏斗状の掘り方をもつⅠ・Ⅱ類が主体で、いずれも素掘りの井戸である。土坑群は、Ⅱa類が当期に該当すると考えられ、台地縁辺部から斜面部上段にかけて散在する点や主軸方向に規則性が認められないなどの特徴が当期の遺構配置と符合する。土坑の性格は不明な点が多いが、方形に近い形状や一辺2mを超える規模から、方形竪穴遺構に類似するものも含まれている可能性がある。その他、当期の土地利用をうかがえる遺物として、第176号溝跡から一括廃棄された多量の鉄滓が出土しており、調査区南西部に精錬銅冶に関わる工房の存在が推定される。

第B期（第813図）

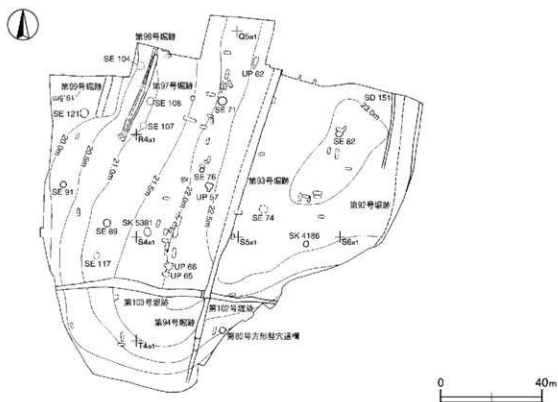
調査区中央の台地縁辺部に沿って妙徳寺の参道が出現する時期である。第93号堀跡と第155号溝跡は、その道路側溝に相当し、9～12mの路面幅が復元される。さらに、参道の南側から第16～18号道路跡が東側へ延びており、南東部の谷津から台地上への経路も当期に整備されている。参道の出現により台地部と斜面部の地理的な境界が明示され、当期以降の土地利用は参道を中心に展開していくこととなる。当期の遺構としては、第20号不明遺構、第75・78・79号方形竪穴遺構、第93・96・97号井戸跡、廃棄土坑の第4490・5400・5458号土坑などがあり、土坑群はⅠb類が該当すると考えられる。調査区南端に位置する第20号不明遺構は、3間×2間の側柱建物を伴い、周辺から五輪塔・宝篋印塔・石幢など石塔類の部材が多数出土している。供養堂としての機能が推定され、また、参道と道路との交点付近に位置していることから、妙徳寺の寺域の南限を示すものと考えられる。土坑群Ⅰb類は、五輪塔の空風輪が出土した第5563号土坑、宝篋印塔の空部が出土した第5519号土坑、粘土貼り土坑の第5397号土坑のほか、底面に炭化物が堆積した第4249・4258・4373・4374・4375号土坑などがある。分布域は、調査区中央部の第93号堀跡の西側に密集しているほか、第155号溝跡の南東側にも数基からなるまとまりが認められ、参道を意識した配置がとられている。一方、台地上の高所ではほとんど検出されておらず、参道周辺と台地上での土地利用状況の違いを反映している。遺物としては、第20号不明遺構や第5519・5563号土坑から出土した石塔類が目目され、遺構、遺物の面で宗教色が顕在化する時期として捉えられる。



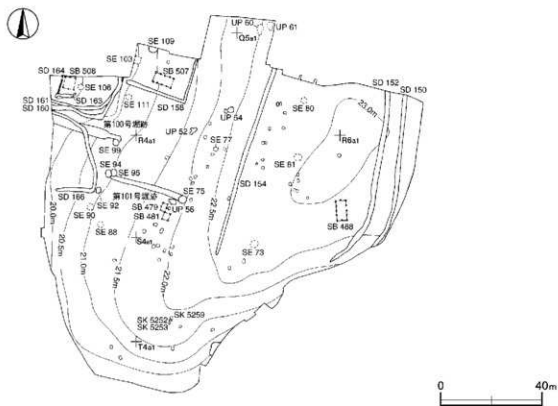
第812図 第16区第A期（15世紀後半）復元図



第813図 第16区第B期（16世紀前半）復元図



第814图 第16区C期(16世纪後半)復元图



第815图 第16区D期(17世纪前半)復元图

第C期（第814図）

調査区域全体に堀が掘り巡らされる時期である。調査区中央の参道の位置には第93号堀跡があり、その南端からは第94・102・103号堀跡が延びている。さらに、調査区東辺部には第92号堀跡と第151号溝跡、北西部には第97～99号堀跡が新たに掘削されている。これらの堀跡は断面形が逆台形や菜研状を呈し、前期に比べて規模も大きく直線的で、区画としての機能が強化されている。遺構は、第80号方形竪穴遺構、第57号地下式墳、第71・76・82・89・91・121号井戸跡、粘土貼り土坑の第5381号土坑などが確認され、また、配置や主軸方向から第62・65・66号地下式墳、土坑群Ⅰa類が該当すると考えられる。土坑群Ⅰa類は、各類型の中で堀の方向に対する意識が最も強く、主軸は東西方向と南北方向にほぼ限定される。参道西側の集中部は、北と南の2か所に分かれ、標高23.0m付近の台地上にも新たに分布域が形成されている。井戸跡は、漏斗状の掘り方をもつⅡ類に加え、井戸枠を埋設したⅢ類が見られるようになる。Ⅲ類は第C・D期の中で、斜面部に直線的に並ぶ傾向が見られ、掘削位置には区画等による規制が働いていた可能性がある。当期の出土遺物は、堀跡を中心に土師質土器、瀬戸・美濃系、志野系、常滑系の各種陶器類、龍泉系青磁、石臼、茶臼、砥石などの石器類、五輪塔、宝篋印塔などの石塔類、古銭（元符通寶・永楽通寶）など出土量が多く、内容も豊富である。背景に妙徳寺の経済的な繁栄が想定される。

第D期（第815図）

第D期は近世初頭の17世紀前半にあたり、第100・101号堀跡、第150・152・154・158・160・161・163・166号溝跡、第479・481・488・507・508号掘立柱建物跡、第52・56号地下式墳、第75・92・94号井戸跡、土坑群Ⅱb・Ⅲ類、第30～32号ピット群などが該当する。この中で、第100・101号堀跡は、覆土下層から出土した遺物が前代の特徴を残しており、他の溝跡より古い様相を示している。したがって、第100・101号堀跡の廃絶をもって、堀による区画から溝による区画へ移行したと考えられる。当期には掘立柱建物跡が出現し、堀や溝で区画された範囲内に単一棟で存在している。土坑群Ⅱb類は、調査区東部の台地上のほか、第154号溝跡の東西に分布域が見られ、東側は調査区北部、西側は中央区以南に集中している。調査区南部に位置する第5252・5253・5259号土坑からは人骨が確認され、埋葬状況は臥屈葬であり、第5259号土坑には六道銭が副葬されている。主軸方向は、溝の方向に対する意識が弱まる一方で、正方位を向くものの出現率が高くなる傾向がある。出土遺物は少量で、土師質土器や常滑系襦が散見する程度である。

ウ 小結

以上、中・近世の遺構の様相から、第16区における景観変遷を検討してきた。最後に変遷の概要と問題点について触れておきたい。

第16区は、11世紀前半の集落廃絶後、中世後半まで空白地となっている。中世の遺構が確認されるのは15世紀後半であり、L字状に巡る第96号堀跡が開発の初現となる。防衛的な性格が推定されるものの、同時期の関連遺構が確認されておらず、今後の調査に依るところが大きい。16世紀前半には、中央に妙徳寺の参道が整備され、周辺には墓域が展開した可能性があり、南端部には供養堂と思われる小堂が設置される。16世紀後半は、堀によって調査区域全体が大規模に区画・整備されており、出土遺物の内容も豊富で、経済的にも繁栄期の様相がうかがえる。17世紀前半に区画の機能が堀から溝へ縮小し、以後、

明確な遺構形成は認められなくなるが、参道及び道路の機能はその後も踏襲されて、今日に至っている。

中・近世の遺構の性格を考える上で、土坑群の位置付けが重要な問題となる。土坑群の分布状況は、堀・溝跡と主軸方向の関係から、台地縁辺部から斜面部に散在する段階、参道の整備に伴い、堀・溝の周辺に集中する段階、堀周辺の集中域が南北に分散し、台地上にも展開する段階、参道の北東・南西側及び台地上に分布する段階へと推移し、Ⅱa類→Ⅰb類→Ⅰa類→Ⅱb類・Ⅲ類の変遷過程が想定される。五輪塔・宝篋印塔などの石塔類や古銭等が出土しており、Ⅰb類では底面に炭化物が堆積する土坑、Ⅱb類では人骨等が確認されていることから、墓坑の可能性が高いと考えられる。しかし、臥屈葬を主体とする中世の墓制のなかで、伸展葬と思われる細長い長方形の土坑(Ⅰa・Ⅰb類)が多数存在するのは再検討を要する課題であるが、現状では第16区の中・近世の景観変遷案と表出した問題点を提示するに留め、再度検証を行いたい。

註

- 1) 稲田義弘 飯泉達司 「鳥名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅹ 鳥名熊の山遺跡」『茨城県教育財団文化財報告』第214集 財団法人茨城県教育財団 2004年3月
- 2) 稲田義弘 「鳥名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅸ 鳥名熊の山遺跡」『茨城県教育財団文化財報告』第190集 財団法人茨城県教育財団 2002年3月
- 3) 松本直人 「鳥名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅷ 鳥名熊の山遺跡」『茨城県教育財団文化財報告』第236集 財団法人茨城県教育財団 2005年3月
- 4) 註3)に同じ
- 5) 川津法伸 平石尚和 「一般国道50号結城バイパス改築工事地内埋蔵文化財調査報告書 下り松遺跡・油内遺跡」『茨城県教育財団文化財報告』第145集 財団法人茨城県教育財団 1999年3月
- 6) 伊藤玄三ほか 「村岡遺跡群発掘調査報告書」『千代川村埋蔵文化財報告書』第4集 千代川村教育委員会 1998年3月
- 7) 千葉隆司他 「祈りの造形-中世露ヶ浦の金工品-」露ヶ浦郷土資料館 2000年10月
- 8) 註1)に同じ
- 9) 青木仁昌 「鳥名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅶ 鳥名八幡前遺跡」『茨城県教育財団文化財報告』第201集 財団法人茨城県教育財団 2003年3月
- 10) 矢ノ倉正男 小林孝 川上直登 「鳥名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅵ 鳥名熊の山遺跡」『茨城県教育財団文化財報告』第166集 財団法人茨城県教育財団 2000年3月
- 11) 五十川伸矢 飛野博文 「第2章 京都大学教養学部構内A P 22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度 京都大学埋蔵文化財研究センター 1985年3月
- 12) 河上邦彦 木下亘 「巨勢寺」『奈良県立橿原考古学研究所調査報告』第87冊 奈良県立橿原考古学研究所 2004年2月
- 13) 田中幸夫 酒井雄一 田月淳一 松本直人 森村裕 「鳥名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ 鳥名熊の山遺跡」『茨城県教育財団文化財報告』第264集 財団法人茨城県教育財団 2006年3月
- 14) 宮本長二郎 「日本原始古代の住居建築」中央公論美術出版 1996年7月
- 15) 註11)に同じ
- 16) 赤熊浩一 「坂戸市 金井遺跡 B区住宅・都市整備公団坂戸入西地区土地区画整理事業関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ-Ⅳ」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書』第146集 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1994年10月
- 17) 市川正史 長谷川正 「宮ヶ瀬遺跡Ⅲ 北原(№9)遺跡Ⅰ 北原(№9)遺跡Ⅱ 長福寺址 宮ヶ瀬ダム建設に伴う調査」『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告』21 神奈川県立埋蔵文化財センター 1993年2月
- 18) 註12)に同じ
- 19) 註10)に同じ
- 20) 五十川伸矢 「日本古代・中世の鋳造技術- 鋳造土坑から復元される鋳造技術-」『日本中世における鋼鉄生産とその流通に関する研究』2005年9月
- 21) 註7)に同じ
- 22) 神崎勝 「多可寺跡出土の梵鐘鋳造遺構」『古代研究』27 元興寺文化財研究所 1984年
- 23) 八重樫忠郎 「岩手県泉町白山土遺跡出土の梵鐘鋳造遺構について」『鋳造遺跡研究会資料』6 1996年9月
- 24) 河野史郎 「豊後国分寺跡」『平成10年確認調査概要報告書』大分市教育委員会 1999年3月

- 25) 多可郡中町教育委員会 「牧野・町西遺跡」Ⅲ 2005年
- 26) 各務原市埋蔵文化財調査センター「野口廣寺A地区の発掘調査報告書」『各務原市埋蔵文化財調査報告書』13 1993年3月
- 27) 註20)と同じ
- 28) 註7)と同じ
- 29) 註7)と同じ
- 30) 京都橋大学教授五十川伸矢氏に梵鐘鑄造土坑の形態や周辺装置、並びに鑄造遺物についてご教授頂いた。
- 31) 村上伸二「中世前半東国の鑄造工房」『シンポジウム 中世日本の鑄物生産-日本列島の西と東-』京都橋大学 2006年9月
- 32) 市村高男 「中世常陸における「職人」の存在形態」『戦国期職人の系譜』角川書店 1989年4月
- 33) 註32)と同じ
- 34) 註32)と同じ
- 35) 五十川伸矢 「鑄造工人の技術と生産工房」『中世都市と商人職人』帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告 名著出版 1992年10月
- 36) 谷田部の歴史編さん委員会 「谷田部の歴史」谷田部町教育委員会 1975年9月
- 37) 茨城県史編集委員会 「茨城県史 中世編」茨城県 1986年3月
- 38) 野内正美他 「図説 土浦・石岡・つくばの歴史 茨城県の歴史シリーズ」郷土出版 2004年11月
- 39) 千葉隆司 「地名と考古学 - 中世鑄造遺跡からの歴史叙述 - 」『妻良岐考古 第28号』妻良岐考古同人会 2005年5月

参考文献

- ・井川達雄 「竇穴住居跡の統計的傾向- 上越新幹線関係遺跡発見の竇穴式住居の傾向 - 」『研究紀要9』財団法人群馬県埋蔵文化財事業団 1992年3月
- ・石野博信 『日本原始・古代住居の研究』吉川弘文館 1990年3月
- ・大町 健 『日本古代の国家と在地首長制』校倉書房 1986年12月
- ・原島礼二 『古代東国の風景』吉川弘文館 1993年3月
- ・山岸良二編 『原始・古代日本の集落』同成社 2004年9月
- ・川村満博 「つくば市小泉館跡出土の非口ロ口成形かわらけについて」『研究ノート』9号 財団法人茨城県教育財団 2000年6月
- ・川村満博 「茨城県南部を中心に見た12世紀後半-15世紀の口ロ口成形かわらけについて」『研究ノート』12号 財団法人茨城県教育財団 2003年6月
- ・白田正子 「茨城県における中世末から近世にかけての土師質内耳土器について」『研究ノート』7号 財団法人茨城県教育財団 1998年6月
- ・宇留野主税 「真壁城跡本丸出土資料の再検討」『Archaeo-Clio』第6号 東京学芸大学考古学研究室 2005年3月
- ・桜川市教育委員会 「史跡真壁城跡Ⅲ- 外曲輪中央部・東部・北部の概要調査 - 」『史跡真壁城跡発掘調査報告』第3集 2006年
- ・つくば市教育委員会 『史跡小田城跡- 第45次調査(周辺曲輪確認調査Ⅱ)概要報告 - 』2003年3月
- ・つくば市教育委員会 『史跡小田城跡- 第48次調査(本丸跡確認調査Ⅳ)概要報告 - 』2004年3月
- ・つくば市教育委員会 『史跡小田城跡- 第48次調査(本丸跡確認調査Ⅴ)概要報告 - 』2005年3月
- ・瀬戸市史編纂委員会 『瀬戸市史 陶磁史篇 四』第一法規出版 1993年9月
- ・福田義弘 「鳥名熊の山遺跡の様相について」『古代地方官衙周辺における集落の様相- 常陸国河内郡を中心として - 茨城県考古学協会シンポジウム』茨城県考古学協会 2005年2月
- ・五十川伸矢 「古代・中世の鉄鋳鑄物」『国立歴史民俗資料館研究報告 中・近世における東国と西国』第46集 1992年12月
- ・網野嘉彦 石井進 『中世都市と商人職人』帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告 名著出版 1992年10月
- ・網野嘉彦 五十川伸矢他 『中世を考える 職人と芸能』吉川弘文館 1992年12月
- ・五十川伸矢他 「鋼と鉄の鑄造」『鉄と鋼の生産の歴史 古代から近世初頭にいたる』雄山閣 2002年2月
- ・土浦市立博物館 「土浦市立博物館第18回特別展 中世の露ヶ浦と律宗 よみがえる仏教文化の聖地」土浦市立博物館 1997年2月
- ・若林幸子 廣瀬時習他 「箕面市業生間谷東・茨木市宮久庄所在 徳大寺遺跡 国際文化都市特定土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書」『大阪府文化財調査研究センター調査報告書』第45集 財団法人 大阪府文化財調査研究センター 1999年6月
- ・坪井良平 「梵鐘実測図集成」『奈良国立文化財研究所史料』第37・38冊 1993年6月

写 真 图 版

第 4 区
完 掘 状 况



第 1006 号住居跡
完 掘 状 况



第 1006 号住居跡
遺 物 出 土 状 况





第1001号住居跡
完掘状況



第1001号住居跡
遺物出土状況



第1001号住居跡
遺物出土状況

第16号住居跡
完掘状況



第2813号住居跡
完掘状況



第2813号住居跡
完掘状況





第2818号住居跡
完掘状況



第2818号住居跡
完掘状況



第2818号住居跡
遺物出土状況

第2818号住居跡
遺物出土狀況



第2819号住居跡
完掘狀況



第1000号住居跡
完掘狀況





第1030号住居跡
完掘状況



第2811号住居跡
完掘状況



第2811号住居跡竈
完掘状況

第2816号住居跡
完掘狀況



第2816号住居跡
遺物出土狀況



第2816号住居跡
遺物出土狀況





第2821号住居跡
完掘状況



第2821号住居跡
遺物出土状況



第2822号住居跡
遺物出土状況

第2827号住居跡
遺物出土狀況



第2812号住居跡
完掘狀況



第2812号住居跡
遺物出土狀況





第 2824 号 住 居 跡
完 掘 状 況



第 2824 号 住 居 跡 竈
遺 物 出 土 状 況



第 130 号 溝 跡
完 掘 状 況



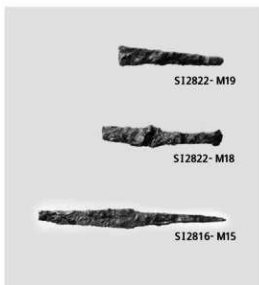
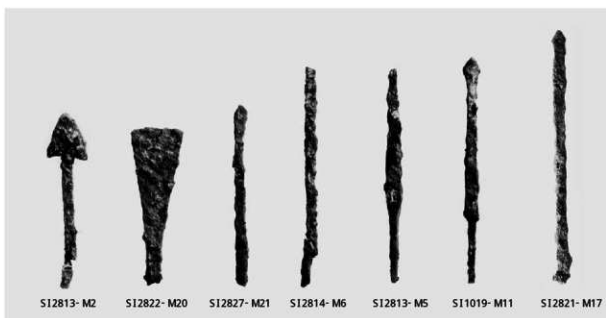














第 7 区
完 掘 状 况



第2523・2529号住居跡
完 掘 状 况



第2523号住居跡貯蔵穴
遺 物 出 土 状 况

第 2528 号住居跡
遺物出土狀況



第 2525 号住居跡
完掘狀況



第 2525 号住居跡
遺物出土狀況





第 2537 号 住居 跡
完 掘 状 况



第 2537 号 住居 跡
遺 物 出 土 状 况



第 2537 号 住居 跡 臺
遺 物 出 土 状 况

第2546号住居跡
完掘状況



第2546号住居跡
遺物出土状況

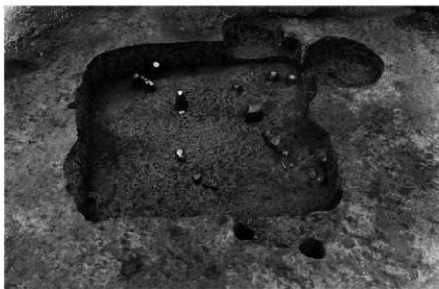


第2546号住居跡
完掘状況





第 2547 住居跡
完 掘 状 況



第 2547 号 住居跡
遺物出土状況



第 2547 号 住居跡
遺物出土状況

第2524 A号住居跡
完掘狀況



第2524 A号住居跡
遺物出土狀況



第2524 A号住居跡
遺物出土狀況





第2524 A号住居跡
完掘状況



第2524 B号住居跡
完掘状況



第2524 B号住居跡
完掘状況

第 2527 号住居跡
完 掘 状 況



第 2534 号住居跡
遺 物 出 土 状 況



第 2534 号住居跡
鉄 製 品 出 土 状 況

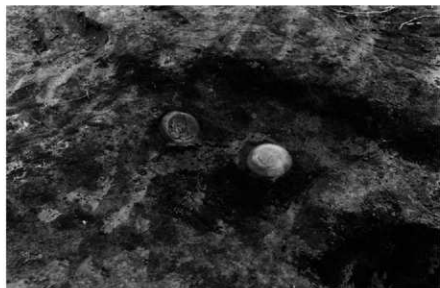




第2535号住居跡竈
遺物出土状況



第2539号住居跡竈
完掘状況



第2541号住居跡
遺物出土状況



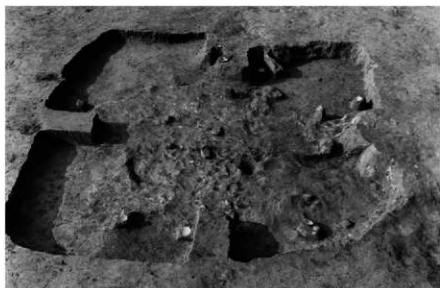
第 2543 号住居跡
完 掘 状 況



第 2543 号住居跡
遺 物 出 土 状 況



第 2550 号住居跡
完 掘 状 況



第2550号住居跡
遺物出土状況



第2550号住居跡
遺物出土状況



第2550号住居跡竪1
遺物出土状況



第2550号住居跡竈2
完掘状況



第4132号土坑
完掘状況



第4152 A・B号土坑
完掘状況













S12537-151



SK 4152B-234



S12543-175



S12547-194



遺構外-237



S12547-195



S12548-207



遺構外-240



S12547-200



S12537-147



S12550-221



S12550-220



S12550-222



S12550-223



S12550-224



S12550-226



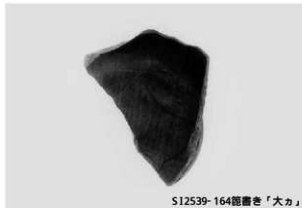
S12550-227



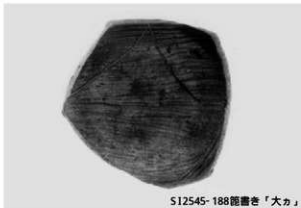
S12550-228



S12550-229



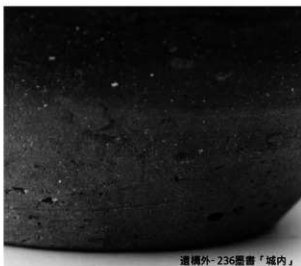
遺構外-164 瓦書き「大カ」



遺構外-188 瓦書き「大カ」



遺構外-239 刻書「川」



遺構外-236 墨書「城内」



S12548 DP12



S12546-Q13



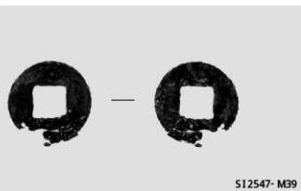
SK 4152A DP13



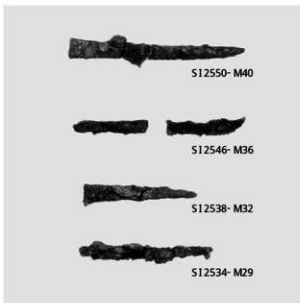
SK 4152A DP14



S12539- M35



S12547- M39



S12550- M40

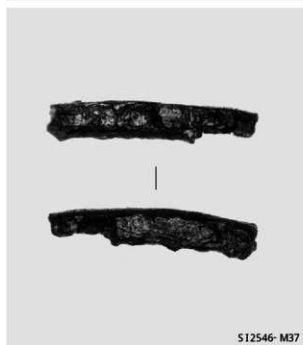
S12546- M36

S12538- M32

S12534- M29



S12547- M38



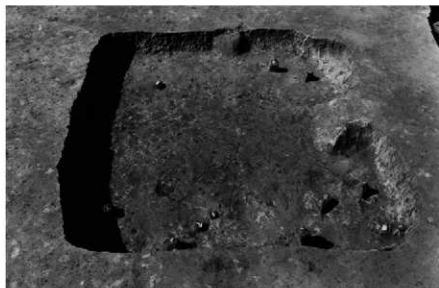
第 9 区
完 掘 状 况



第 2504 号 住 居 跡
完 掘 状 况



第 2504 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 况





第 2516 号 住居 跡
完 掘 状 況



第 2516 号 住居 跡
甕 1 遺物 出土 状 況



第 2516 号 住居 跡
甕 2 完 掘 状 況

第2508号住居跡
完掘状況



第2508号住居跡
遺物出土状況

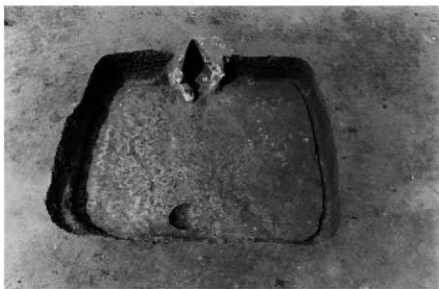


第2508号住居跡
遺物出土状況





第 2503 号 住 居 跡
完 掘 状 況



第 2507 号 住 居 跡
完 掘 状 況



第 2507 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況

第2515号住居跡
完掘状況



第2519号住居跡
完掘状況



第2519号住居跡竈
完掘状況





第 2509 号住居跡
完掘状況



第 2521 号住居跡
完掘状況



第 2521 号住居跡
遺物出土状況

第454号掘立柱建物跡
完掘狀況

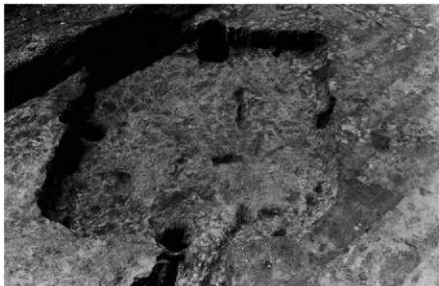


第 451・452 号
掘立柱建物跡
完掘狀況



第450号掘立柱建物跡
完掘狀況





第69号方形竖穴掘立遺構
完掘状況



第7号道路跡
完掘状況



第7号道路跡
完掘状況

第 4125 号 土 坑
完 掘 状 况



第 4125 号 土 坑
遗 物 出 土 状 况



第 4127 号 土 坑
完 掘 状 况





第 681 号 土 坑
完 掘 状 况



第 681 号 土 坑
遗 物 出 土 状 况

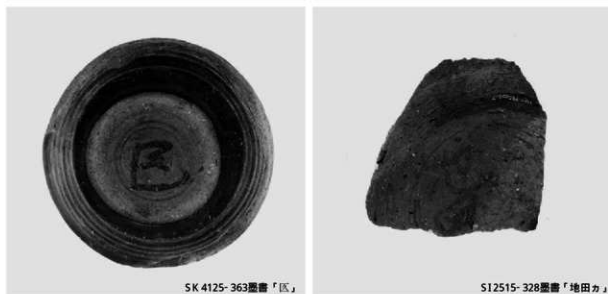
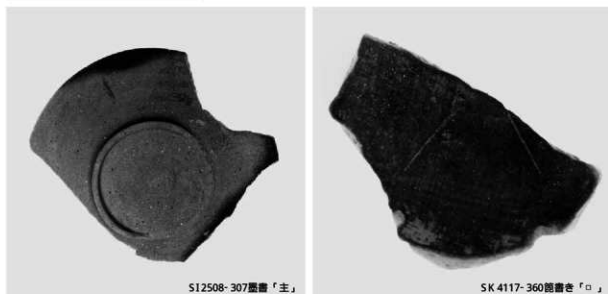
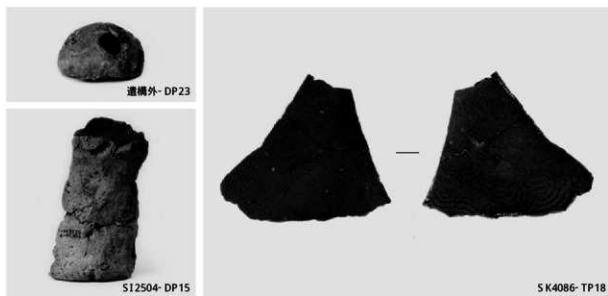


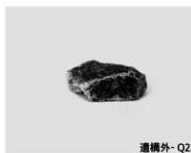
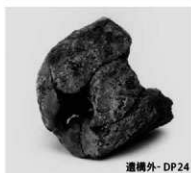
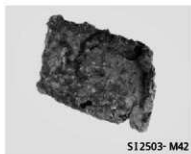
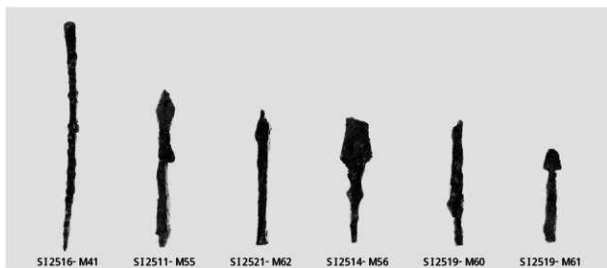
第 681 号 土 坑
土 层 断 面 状 况

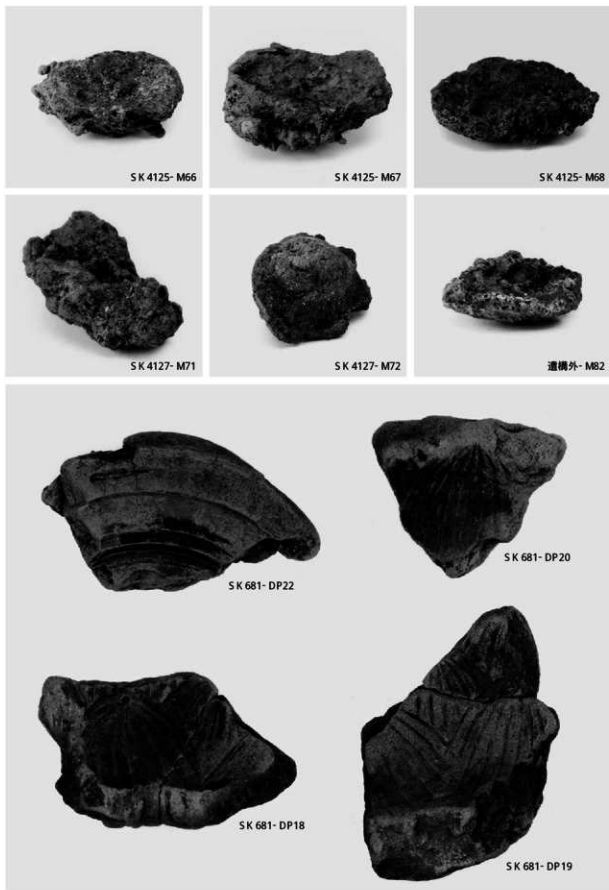












出土鑄型片，鉄滓

第 14 区 中央 部
完 掘 状 况



第 14 区 南 部
完 掘 状 况



第 2414 号 住 居 跡
完 掘 状 况





第 2400 号 住 居 跡
完 掘 状 况



第 2400 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 况



第 2418・2419 号 住 居 跡
完 掘 状 况



第 2411 号住居跡
完 掘 状 況



第 2411 号住居跡
遺物出土狀況



第 2411 号住居跡
遺物出土狀況



第 2416 号 住 居 跡
完 掘 状 況



第 2416 号 住 居 跡 竪
完 掘 状 況

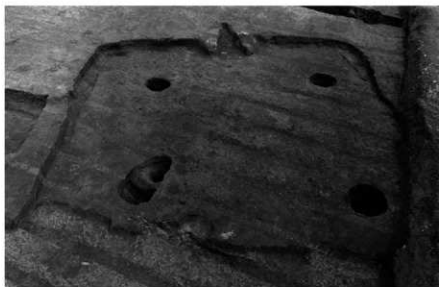


第 2418 号 住 居 跡
完 掘 状 況

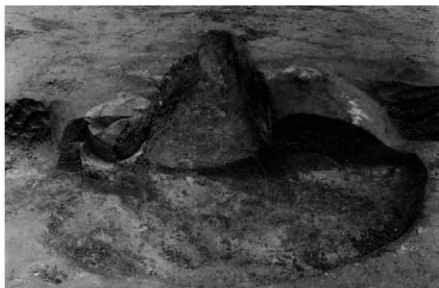
第 2418 号住居跡
遺物出土狀況



第 2420 号住居跡
完掘狀況



第 2420 号住居跡竈
遺物出土狀況





第 2421 号 住 居 跡
完 掘 状 況



第 2421 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況



第 2427 号 住 居 跡
完 掘 状 況



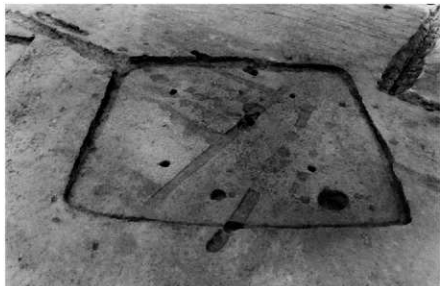
第 2425 号住居跡
完 掘 状 況



第 2425 号住居跡
遺物出土狀況



第 2438 号住居跡
遺物出土・完掘狀況



第 2432 号住居跡
完 掘 状 況



第2432号住居跡貯蔵穴
遺物出土状況



第 2432 号住居跡
遺物出土状況



第 2435 号住居跡
完 掘 状 況



第 2435 号住居跡
遺 物 出 土 状 況



第2435号住居跡貯蔵穴
遺 物 出 土 状 況



第 2404 号 住 居 跡
完 掘 状 况



第 2404 号 住 居 跡 竈
遺 物 出 土 状 况



第 2406 号 住 居 跡
完 掘 状 况

第 2407 号住居跡
完 掘 状 況



第 2407 号住居跡竈
完 掘 状 況



第 2408・2409 号住居跡
完 掘 状 況





第 2415 号 住居 跡
完 掘 状 況



第 2428 号 住居 跡
完 掘 状 況



第 2428 号 住居 跡
掘り方完掘状況

第 2437 号住居跡
完 掘 状 況



第 47 号地下式墳
完 掘 状 況



第 48 号地下式墳
完 掘 状 況





第427号掘立柱建物跡
完掘状況



第430号掘立柱建物跡
完掘状況



第431号掘立柱建物跡
完掘状況

第 138 号 溝 跡
完 掘 状 況

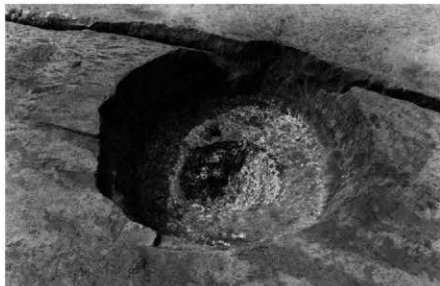


第 141 号 溝 跡
完 掘 状 況



第 144 号 溝 跡
完 掘 状 況





第 3412 号 土 坑
完 掘 状 况



第 3385 号 土 坑
完 掘 状 况



第 3449 · 3552 号 土 坑
完 掘 状 况









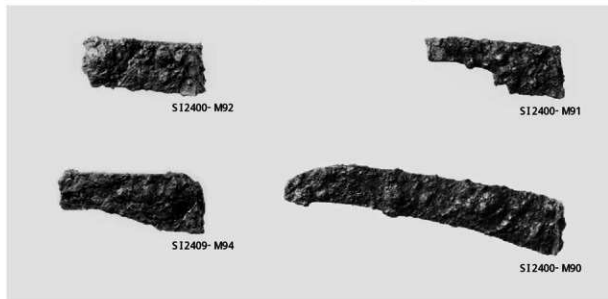
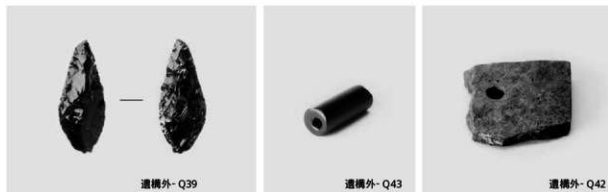
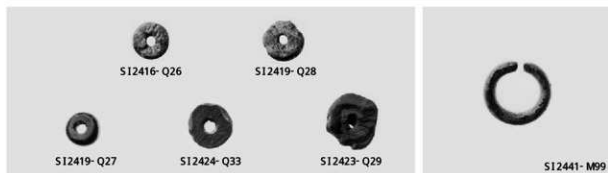
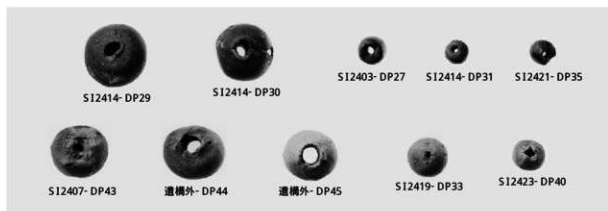


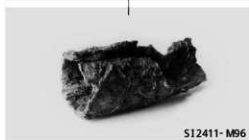
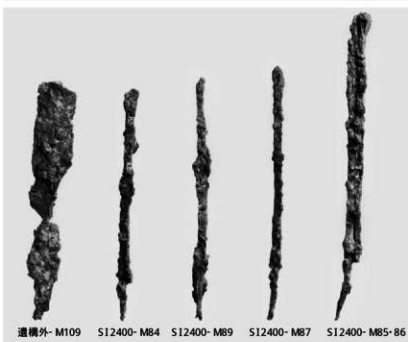
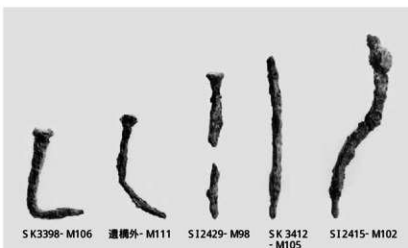














第 16 区 東 部
完 掘 状 況



第 16 区 南 部
完 掘 状 況



第 16 区 北 西 部
完 掘 状 況

第 2594 号住居跡
完 掘 状 況



第 2596 号住居跡
完 掘 状 況



第 2596 号住居跡竪
完 掘 状 況





第 2601 号住居跡
完 掘 状 况



第 2601 号住居跡
遺物出土狀況



第 2609 号住居跡
完 掘 状 况



第2609号住居跡
遺物出土状況



第2609号住居跡
遺物出土状況



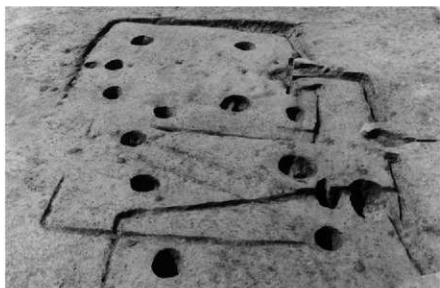
第2609号住居跡貯蔵穴
遺物出土状況



第 2624 号 住居 跡
完 掘 状 况



第 2624 号 住居 跡
完 掘 状 况



第 2625 号 住居 跡
完 掘 状 况

第 2625 号住居跡
遺物出土狀況



第 2625 号住居跡
遺物出土狀況



第 2635 号住居跡
完掘狀況





第 2657 号 住 居 跡
完 掘 状 况



第 2657 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 况



第 2657 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 况



第2657号住居跡竈
完掘状況



第2671号住居跡
完掘状況



第2671号住居跡竈
遺物出土状況



第2666号住居跡
完掘状況



第2666号住居跡
遺物出土状況



第2666号住居跡
遺物出土状況

第2666号住居跡
完掘状況



第2675号住居跡
完掘状況



第2677号住居跡
完掘状況





第 2681 号 住 居 跡
完 掘 状 况



第 2681 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 况



第 2681 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 况

第2681号住居跡
遺物出土状況



第2681号住居跡貯蔵穴
遺物出土状況



第2681号住居跡竈
遺物出土状況





第 2685 号住居跡
遺物出土状況



第 2685 号住居跡
遺物出土状況



第 2685 号住居跡
遺物出土状況

第2685号住居跡
完掘状況



第2693号住居跡
完掘状況



第2693号住居跡
遺物出土状況





第 2692 号住居跡
遺物出土狀況



第 2698 号住居跡
完掘狀況



第 2698 号住居跡
遺物出土狀況

第 2698 号住居跡
遺物出土狀況



第 2698 号住居跡
遺物出土狀況



第 2699 号住居跡
完掘狀況





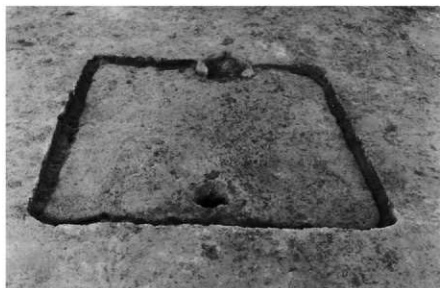
第 2631 号 住 居 跡
完 掘 状 況



第 2613 号 住 居 跡
完 掘 状 況



第 2613 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況



第 2641 号住居跡
完 掘 状 況



第 2667 号住居跡
完 掘 状 況



第 2667 号住居跡
遺 物 出 土 状 況



第 2642 号 住 居 跡
完 掘 状 況



第 2673 号 住 居 跡
完 掘 状 況



第 2673 号 住 居 跡
完 掘 状 況

第 2605 号住居跡
完 掘 状 況



第 2605 号住居跡
遺物出土状況



第 2605 号住居跡
遺物出土状況





第 2620 号住居跡
完 掘 状 況



第2620号住居跡貯蔵穴
遺物出土状況



第 2623 号住居跡
完 掘 状 況

第 2619 号住居跡
完掘狀況



第 2619 号住居跡竈
遺物出土狀況



第 2665 号住居跡
堆積狀況





第 2670 号 住 居 跡
完 掘 状 况



第 2670 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 况



第 2670 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 况

第2670号住居跡竈
遺物出土状況



第2691号住居跡
完掘状況



第2691号住居跡
遺物出土状況





第 2687 号 住 居 跡
完 掘 状 况



第 2687 号 住 居 跡 竈
遺 物 出 土 状 况



第 2696 号 住 居 跡
完 掘 状 况



第474号掘立柱建物跡
完掘状況



第486号掘立柱建物跡
完掘状況



第473号掘立柱建物跡
完掘状況



第471号掘立柱建物跡
完掘状況



第507号掘立柱建物跡
完掘状況



第7号陥し穴
完掘状況

第51号地下式墳
完掘状況



第57号地下式墳
完掘状況



第59号地下式墳
完掘状況





第 76 号 井 戸 跡
完 掘 状 況



第 89 号 井 戸 跡
完 掘 状 況



第 109 号 井 戸 跡
完 掘 状 況



第5519号土坑(墓坑)
遺物出土狀況



第5259号土坑(墓坑)
人骨出土狀況



第5252・5253号土坑(墓坑)
人骨出土狀況



第5458号土坑(廃棄土坑)
遺物出土状況



第20号不明遺構
完掘状況



第20号不明遺構
遺物出土状況



第92号堀跡・第150号溝跡完掘状況



第93号堀跡・第154・155号溝跡完掘状況



第95号堀跡完掘状況



第102号堀跡完掘状況

























第2698号住居跡出土土器

















第92号堀跡-1046

第92号堀跡-1047

第93号堀跡-1051



第95号堀跡-1059

第95号堀跡-1058

第96号堀跡-1066



第100号堀跡-1084

第100号堀跡-1085

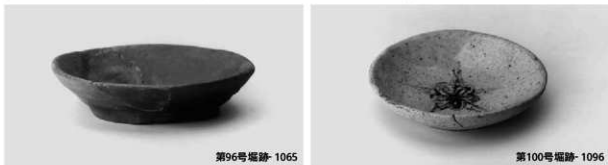
第100号堀跡-1086



第100号堀跡-1089

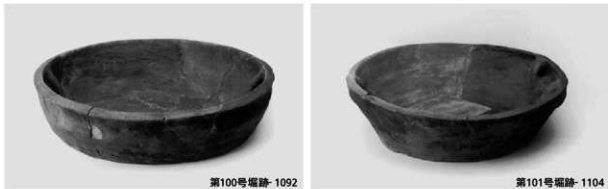
第100号堀跡-1090

第100号堀跡-1088



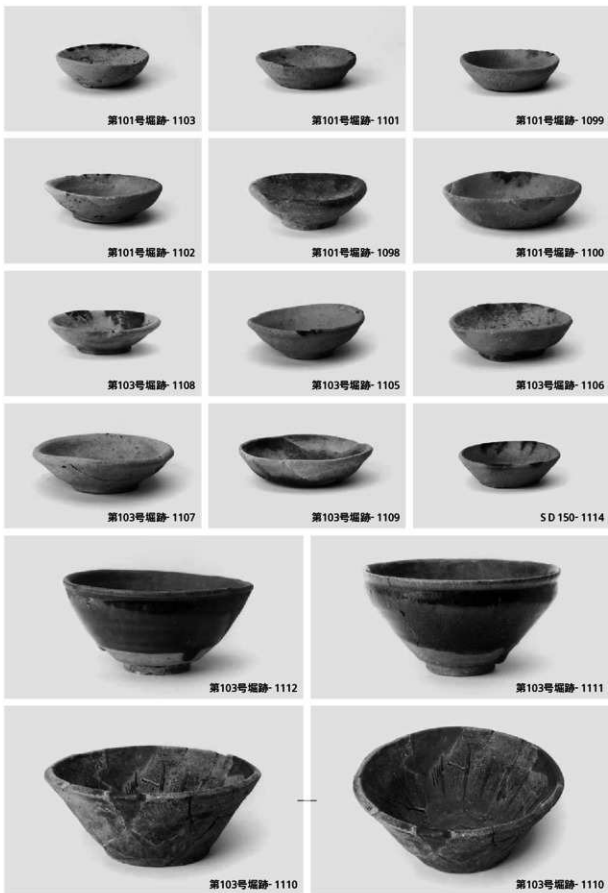
第96号堀跡-1065

第100号堀跡-1096

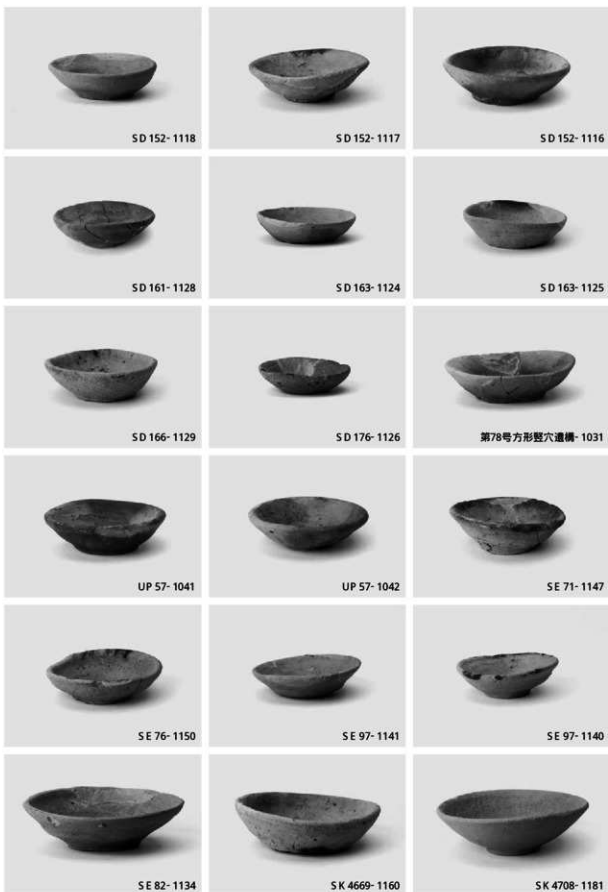


第100号堀跡-1092

第101号堀跡-1104

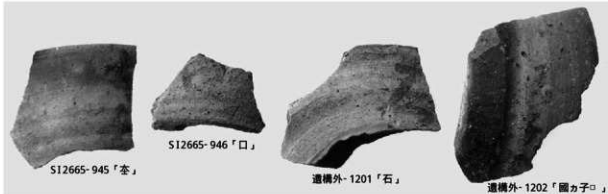
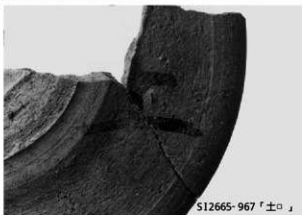


第101・103号堀跡，第150号溝跡出土土器・陶器



第78号方形竖穴遺構，第57号地下式壙，第152・161・163・166・176号溝跡，第71・76・82・97号并戸跡，第4669・4708号土坑出土土器







S12666



DP91



DP90



DP94



DP93



DP92



DP89



DP95



DP98



DP96



DP97



DP83



DP84



DP85



DP100



DP99



DP86



DP87



DP88



S12671-DP105



S12626-DP133



S12609-DP60



S12609-DP61



S12605-DP129



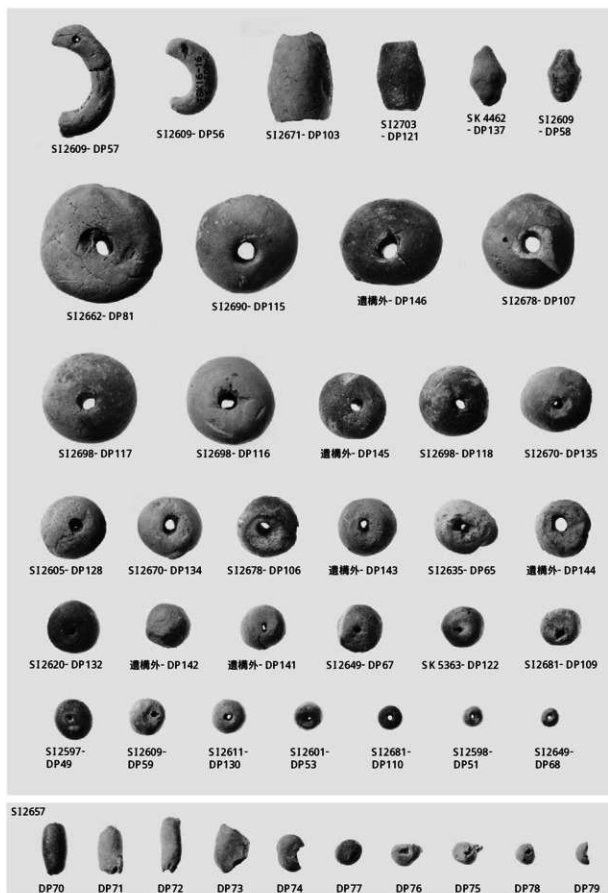
S12686-DP113

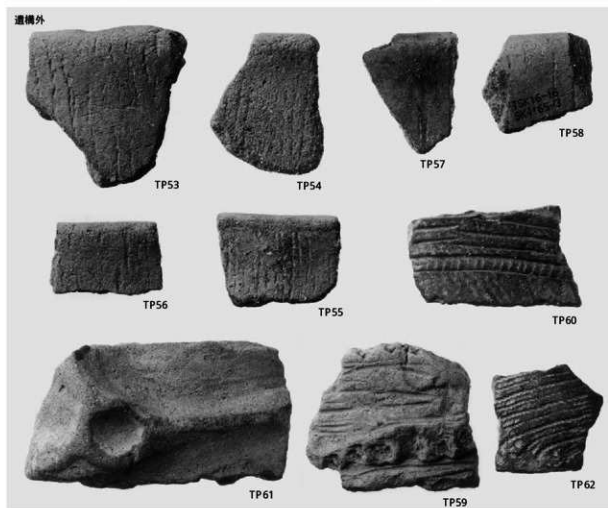


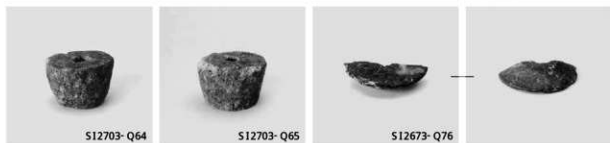
S12609-DP62



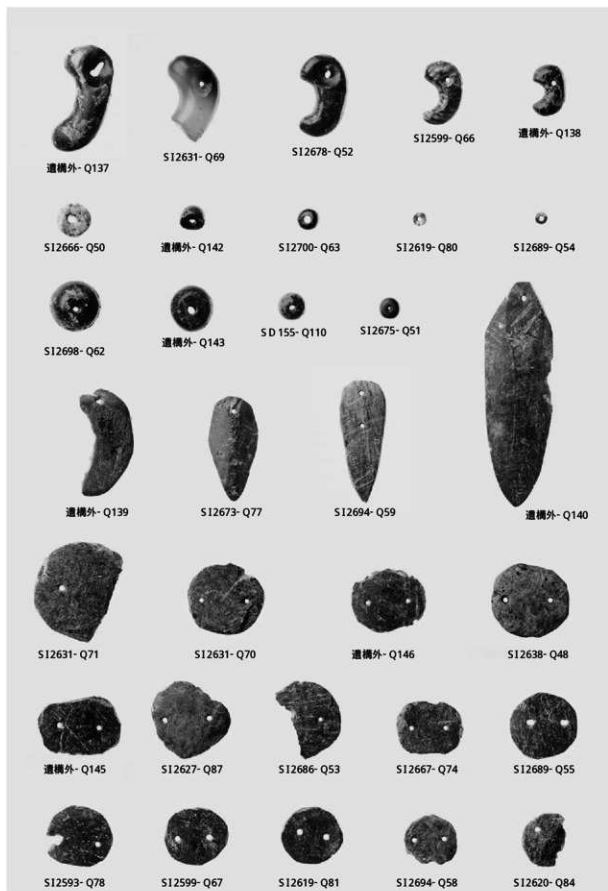
S12615-DP131

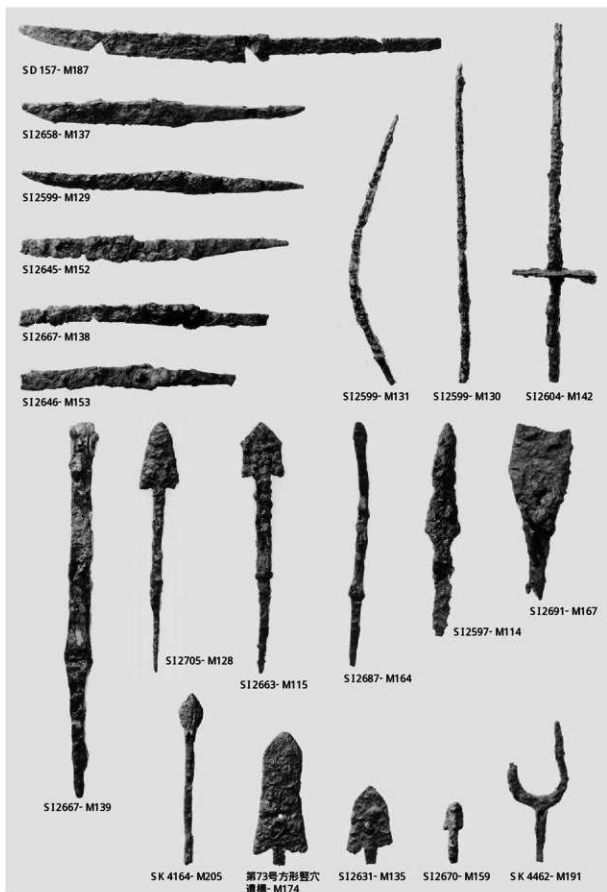


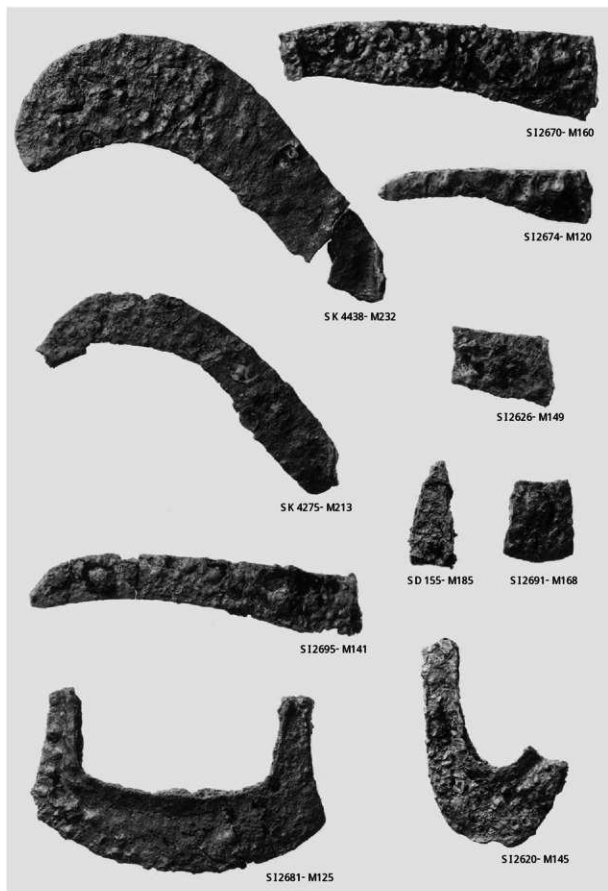


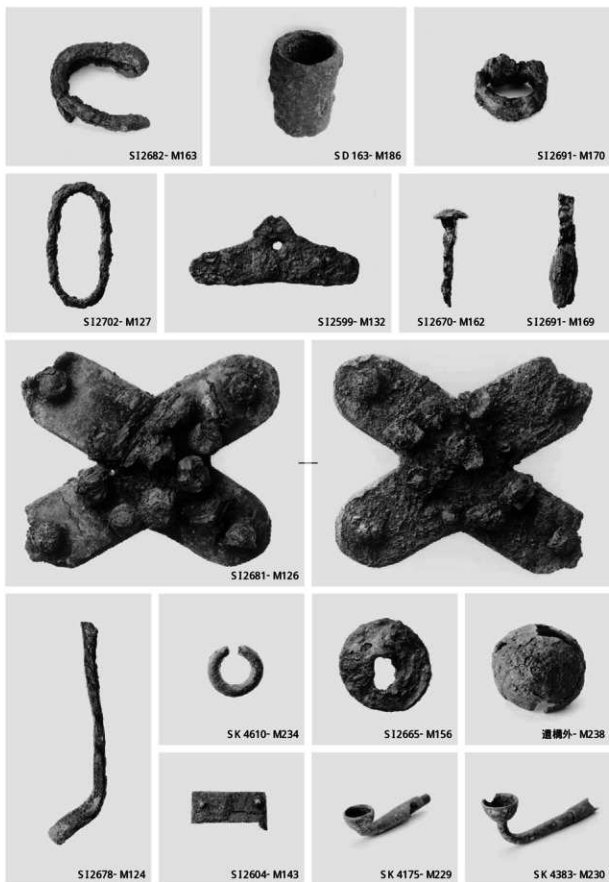


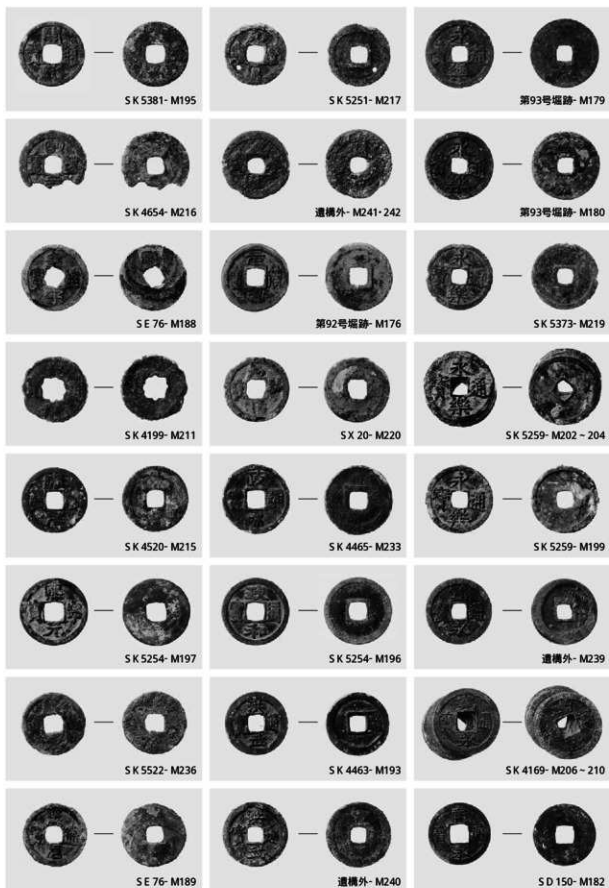
















SD 176- 鉄滓集合



SX 20- 鉄滓集合



S12665- 骨片



SD 152- 貝殻



第79号方形竪穴遺構 N1-3



第102号堀跡- N4

出土鉄滓・骨片・貝殻

茨城県教育財団文化財調査報告第280集

島名熊の山遺跡

島名・福田坪一体型特定土地地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書 XIII

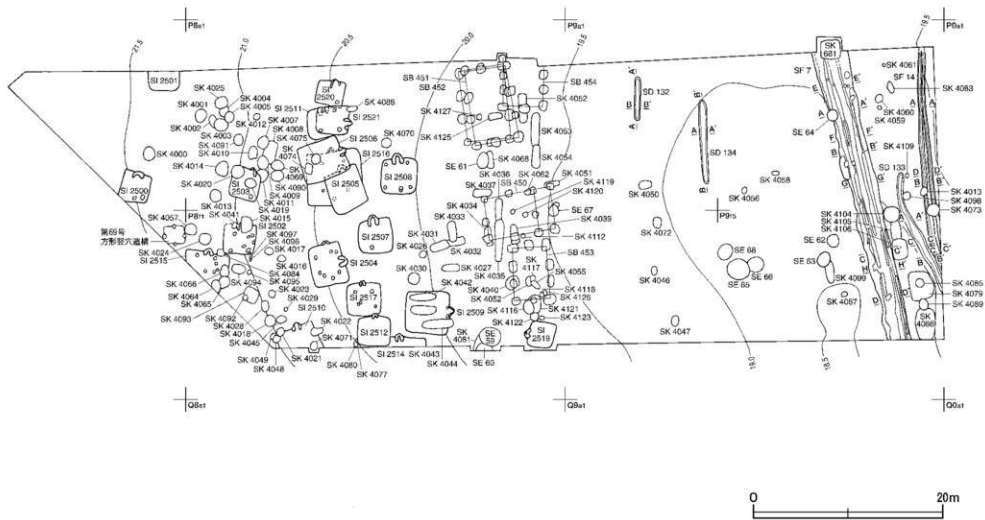
第 4 分冊

平成19(2007)年 3月19日 印刷

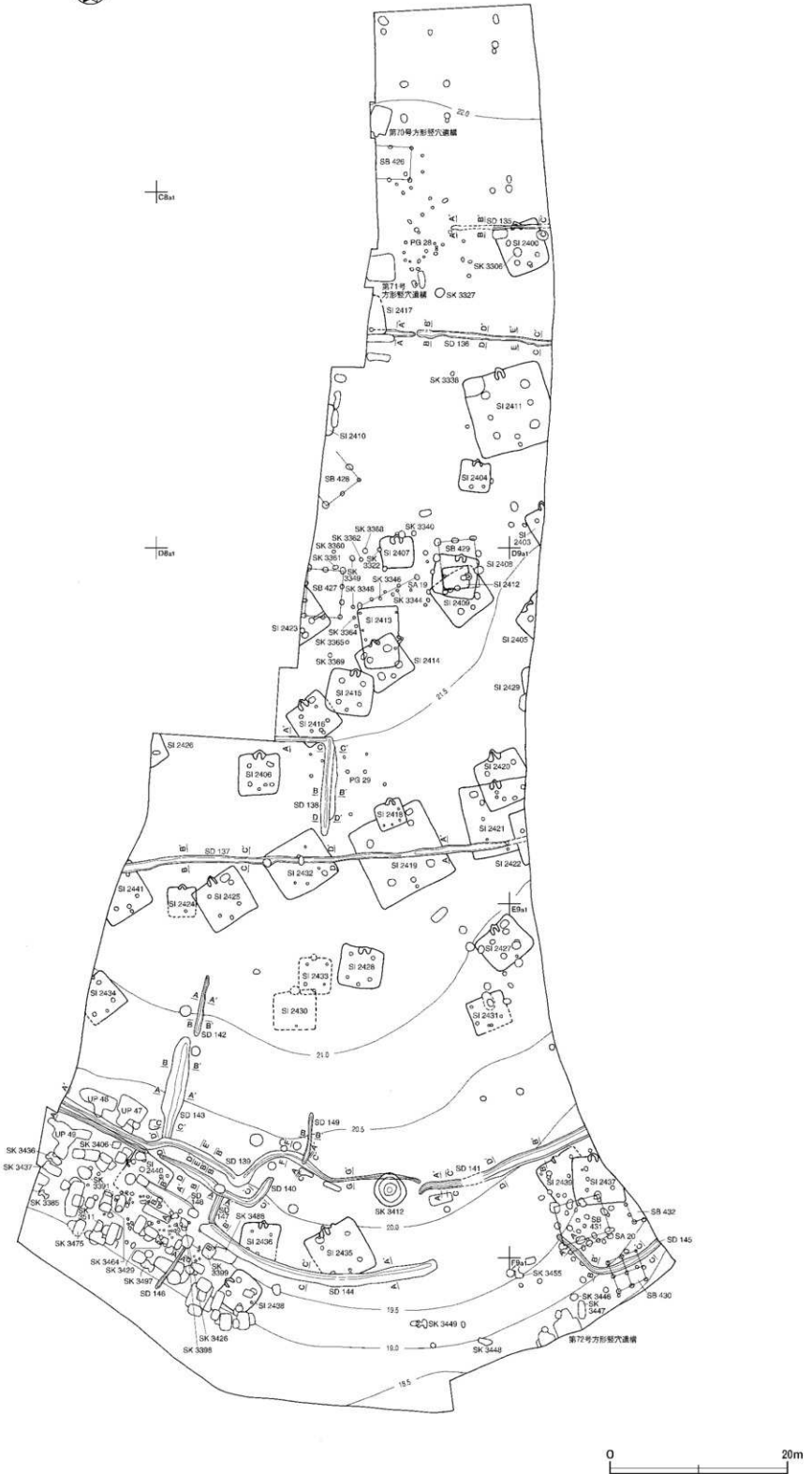
平成19(2007)年 3月23日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029- 225- 6587

印刷 (有)川田プリント
〒310- 0041 水戸市上水戸4丁目6- 53
TEL 029- 253- 5551



付図1 鳥名熊の山遺跡9区遺構全体図 茨城県教育財団文化財調査報告第280集



付図2 鳥名熊の山遺跡14区遺構全体図 茨城県教育財団文化財調査報告第280集



付図4 烏名熊の山道跡遺構全体図 茨城県教育財団文化財調査報告第280集